
90s nostalgia

木林タカシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

90s nostalgia

【Nコード】

N2805W

【作者名】

木林タカシ

【あらすじ】

統計学的に述べると、美少女が現れるのは四月に多い。

さらに詳しく調べると、第一週目、すなわち学校の新学期が始まる直前の春休み。遭遇するのは高校デビューを控えた男子高校生である事例が最頻である。

美少女はほとんどの場合なんらかの問題を抱えていて、一見平凡な男子高校生には隠された未知の能力が備わっていたりする。

八月の終わりに二番目のピークが現れる。これは夏休みが終了する時期と重なっている。

八月の美少女は四月の美少女に比較して転校生であることが多い。
しかし、これはそれほど大きな差異であるとは言えず誤差の範囲だ。
これらの事実は膨大なデータの蓄積から統計学的に導き出された。

膨大なデータについて。

それらはある種の偏りを避けるために多次元平行世界から無作為に
抽出された。

多次元平行世界とは……。

ドクター、ジニアの日誌より

更新報告はブログにて行っていました。

ブログ：<http://takmslave.blog71.fc2.com/>

90s nostalgia ?

統計学的に述べると、美少女が現れるのは四月に多い。

さらに詳しく調べると、第一週目、すなわち学校の新学期が始まる直前の春休み。遭遇するのは高校デビューを控えた男子高校生である事例が最頻である。

美少女はほとんどの場合なんらかの問題を抱えていて、一見平凡な男子高校生には隠された未知の能力が備わっていたりする。

八月の終わりに二番目のピークが現れる。これは夏休みが終了する時期と重なっている。

八月の美少女は四月の美少女に比較して転校生であることが多い。

しかし、これはそれほど大きな差異であるとは言えず誤差の範囲だ。これらの事実膨大なデータの蓄積から統計学的に導き出された。

膨大なデータについて。

それらはある種の偏りを避けるために多次元平行世界から無作為に抽出された。

多次元平行世界とは……。

ジニアの日記より

ドクター、

くるつと姿見の前で一回転。

空気を吸い込んだプリーツスカートが花びらのようにふわりと舞い上がり、絶対領域最終防衛ラインを賭けて危うい攻防が魅惑の生足戦場で繰り広げられる。

一度目は突破を許し、二度目は防衛網が堅固に過ぎた。

そして三回目。

防衛線は緩やかに後退を続け、危険領域ぎりぎりまで推移。だが、陥落寸前で息を吹き返し連戦連勝。オーバーニツソックスとスカートの間には秩序がもたらされた。

「よし。完璧」

クーヤは満足してひとつ肯いた。

紺色のブレザーと白いブラウスを整えて、姿見の中の自分を見つめる。

大きな黒い目をした抜群の美少女が微笑んでいる。

「うんうん。我ながらなんて可愛いらしいんだろ」

薄い唇から紡ぎだされる言葉は春のそよ風のように心地良い。

自分と他人に聞こえる声の間にはギャップが存在する。録音した自分の声を聞くと、違和感を覚える人が多いという話を聞いたことがないだろうか。これは骨伝道、つまり声の振動が骨を伝わるかどうかに由来している。

しかし、クーヤは全く違和感を覚えていない。何故ならクーヤは自分の声を録音して、何度も聞き直したことがあるからだ。あくまで不自然にならないように、それでいて最高のパフォーマンスをもたらす美声を何日も前から研究してきた。ぬかりはない。

「ふふつ。ふふふ」

思わず邪悪な忍び笑いが口から漏れた。

「はっ。これはイケナイ」

クーヤは瞬時に表情筋を自在に操り、清楚な笑みを顔面に張り付かせた。肩にかかる髪を指ですく。

「あは」

邪悪さの欠片も感じられない美少女が鏡に映っていた。

高校デビューを翌日に控え、クーヤは制服を試着して最終チェックを行っていた。

ぱっと着替えて、ぱっと脱いで、素早く就寝。

そう思っていたのに、気がつけば一時間近く鏡の前で自分の姿に見とれていた。

いや、正確には自分の姿ではない。これは偽りの姿だ。

美少女としてあるべき作られた姿。いわゆる擬美少女。それが自分だが、凡百のナチュラル美少女が束になってかかってきたところで己の敵ではないという自負がクーヤにはあった。

ダイヤの原石。

それはそれ自体が確かに価値のあるものだが、適切な加工を施さなければ美しく光り輝くことはない。

原石に興味を持つのは専門家、好事家の類で、一般人は光り輝いて見せなければ、その価値に気づくことはない。

だから……大丈夫。きっと大丈夫なはずだ。

クーヤは自分に言い聞かせるように、それが事実であることを確認するかのように、何度も心の中で繰り返す。

所詮はイミテーション。

絶対に美少女にはなれない。

そのことはクーヤ自身が誰よりも熟知している。

しかし、引けない戦いというものがある。引いてはいけない戦いというものがある。

クーヤはある男と賭けをした。

賭けの内容は、高校生活で誰からも「美少女ではない」ということに気づかれないこと。

クラスメート、教師、その他あらゆる人間から正体を隠し続けること。欺き続けること。演じ続けること。

それがクーヤに課せられた使命だ。

「スノップの野郎。ぜってー、目にモノ見せてやるからな」

鏡の中の少女は瞳に熱い闘志をみなぎらせている。

およそ美少女らしくない。

だが、これが本来のクーヤ。クーヤらしい表情だ。

クーヤは賭けをした。

賭けるものは

世界の全てだ。

偏心分離塔ユグドラシル。

それは世界の中心で長大な体をもてあますように、揺れて、たわんで、震えている。

一般的に塔と言え、先端に向けて細くなっていくものと考えがちかもしれない。ところが、ユグドラシルは反対に上に向かうほど大きく末広になっていて、素人目にもバランスが悪い。設計者は余程ねじれた性格をしていたに違いない、と空也は思う。

全体としては巨大なコップのように見えなくも無い。それが、ふらふらと酔っ払ったように傾きながら、コマのように回転している。昼も夜も関係なく回り続けている。回転速度は一定ではなく、そのことが見るものを一層不安な気持ちにさせる。

いまにも倒れそうだ。

今日こそ倒れるんじゃないか。

空也が区界90s nostalgiaに足繁く通っている理由の一つは、区界の中心で威容を誇るユグドラシルを観察するためだ。不規則に運動するユグドラシルは、見るたびにその姿を変える。日に日に傾きが大きくなってきたかと思えば、次の日には持ち直していたりもする。まるで生き物のようだ。もしかすると空也はユグドラシルの最期を看取りたいだけなのかもしれない。

ユグドラシルの回転が速くなってきた。時刻を確認する。

午後九時……三分前。

毎日、この時間になると、ユグドラシルはそれまでの不規則な動きが嘘のように、規則的な動きに変わる。一分一秒狂うことなく、時計の針のように正確に時間を遵守する。

踊るようになってくる回りながら、回転速度を徐々に増していく。

塔の上半分、その外壁からよきによきといくつも砲身が伸びてきた。成人男性が入れそうなものもあれば、せいぜいこぶし大のボールくらいしか入らなさそうなものまで。大きさはマチマチだ。

砲身の位置は日によってランダムに変化している。

午後九時……三十秒前。

ユグドラシルが唸るように不気味な咆哮を上げる。全身が淡く輝いて、回転は一段と鋭さを増す。砲身は大も小も天を突かんばかりに空を指している。その姿は調和とはほど遠く、どちらかと言えばグロテスクだ。生物的な造詣がそう感じさせるのだろう。

午後九時……ジャスト。

ユグドラシルが脈動する。

根元が風船のようにぽっこりと膨らんだ。それはうねり、暴れまわりながら、塔内部を駆け上っていく。そして、瞬く間に砲身に達した。

ばひゅっ！　ばひゅ！　ばひゅ！

砲身が火を吹いた。

飛び出してきたのは光り輝く球体だ。小ささまざまな弾丸。それが火の玉のように激しく燃え上がり、空いっぱいに広がっていく。遠

心力とコリオリの力が働き、放物線を描きながら、空也の頭上はるか遠くを飛び越えて、区界の外縁部に消えていった。

ユグドラシルはまるで歓喜に打ち震えているかのようにビクビクと痙攣している。

空には飛行機雲のような白い軌跡だけが残った。

「きみも好きだねえ」

空也の側らに男が立っていた。

黒い細身のスーツの上に白衣を羽織って、レンズの小さなサングラスをかけている。顔には無精ひげ。

「いいだろ。べつに」

空也は男のほうを見ずに言った。

男は「くつくつ」と喉を鳴らしながら、サングラスをはずし胸ポケットに入れた。端正な顔立ちをしている。年齢は三十歳くらいに見えるが、実際はもう少し若いのもかもしれない。無精ひげを剃った男の顔を空也は数えるほどしか見たことが無かった。

「まあな。メインはこのあとだしな。行くだろ？」

「行かない。何度目だよ。このやりとり」

空也がうんざりしてため息をついても、男はニヤニヤと笑っている。身をくねらせながら「ええー」と大げさに驚いて見せた。はつきり言って気持ち悪い。

「じゃあ、何しに来てんだよ。美少女を拾いに行かないで、90s

nostalgiaに来る意味あんのか？」

「スノップには関係ないだろ」

「それを言われるとつらいなあ」

スノップは全然堪えた様子も無く、白衣のポケットに両手を突っ込んで、ユグドラシルを眺めている。

男は自称、天才科学者で名前は……忘れてしまった。

初めに自己紹介されたが、あまりに鬱陶しく付きまとってくるので、尊敬と侮蔑を込めてスノップと呼んでいる。スノップは90sn

ostalgiaに関する知識は人一倍持っている。空也はその点に限っただけは密かに一目置いていた。

「美少女はいいぞー。世界は美少女でできている」

「そのわりには、人いないけどな」

「酷いや。そんなこと言う子はおしおきしちゃうぞ」

「キメエよ。なんなの？ そのキャラ。地なの？」

「地です。諦めてください」

スノップはうそ臭い笑みを浮かべている。スノップ本人をいくら貶しても効果は薄そうだ。空也は攻め方を変えることにした。

「美少女たつて、どうせ劣化コピーの産業廃棄物が埋まってるだけだろ。いまだき美少女なんて流行らねーんだよ」

「れ、劣化コピー。さ、産廃……」

スノップ絶句。顔面が引きつけを起こしている。

「そ。劣化コピーで産廃。当たってるだろ？ 最初の頃は、物珍しさもあつて美少女拾いに行つてたけどさ。もう飽きちゃったんだよ。ね。なんていうかテンプレ？ 特定の行動に対しては決まった反応が返ってきて…… よーするにつまんないんだよ」

畳みかけると、スノップは額に手を当ててよろめいた。

「スノップだつてわかつてんだろ。見ようぜ、現実をさ」

「……今日はいい天気だなー」

背中を向けて千鳥足で逃げようとするスノップの前に空也は回りこんだ。

「だーかーらー。現実を見ようぜ。げんじつを」

「なんだよー。俺は知ってたぞ。空也が毎日来てる理由」

口を尖らせてスノップが言った。

「はあ？ ユグドラシル見に来てんだよ、俺は」

空也にはやましいところなど無いし、あつたとしてもスノップに知られているわけがない。そう思っていた。

「……ナズナ」

だからぼそりと呟かれた単語に、一瞬胸がドキツとした。

「な、ナズナは関係ねーよ」

「劣化コピーってことは、オリジナルがあるんだろ。ナズナに告げ口しちゃおうかなー。空也はナズナに会いたくないって」

スノップはある種の確信を持っているらしい。だからと言って認めるわけにはいかない。認めたら最後、どんな嫌がらせをしてくるかわかったものではないからだ。

「会いたくないなんて誰も言っていないだろ」

「うん？ 凶星？ 青いねー」

スノップは白い歯を見せてニカつとした。

「劣化コピーは言葉のあやだつて。オリジナルはもつと別。……例えばファイとか」

内心の動揺を押し隠すように言葉を並べる。

「ファイ、か。確かに昔から人気だけど……お前の趣味そなたつたっけ？」

スノップの切れ長の瞳が空也を値踏みするように見ている。

空也は目を逸らした。

「ま。いいか。それならそれで」

スノップは頭の後ろで手を組んで空を見上げた。

追求の魔の手が伸びてこなかったので、空也はほつと息をついた。

「劣化コピーで、産廃……ね。そこまで言うならお前さ。ひとつ美少女やってみろよ。飽きるほど美少女を見てきたなら簡単だろ？」

「なんで俺が……」

空也の質問を無視してスノップは話を続ける。

「もし三年間の高校生活で完璧に美少女を演じきれたら、世界の半分なんてケチくさいことは言わずに全部お前にやるよ」

「何を？」

空也は乗せられているとわかっていても聞き返さずにはいられない。スノップが持ってくる話は大体いつも面白いからだ。その難のある性格にさえ目をつぶれば、スノップは概ね付き合いやすい男だった。

「ここを。90s nostalgiaを」

「ハッ！ 何を言い出すかと思えば。ここは誰のものでもないし」
空也が鼻で笑つても、スノップは意外と真剣な目をしている。

「実際には、俺とお前とナズナの三人しか利用していないんだ。俺がいなくなれば、あとは二人で好き放題できるぜ」

「それは……」

魅力的な提案だ。

言葉には出さなかったが、空也の心は傾いていた。

「賭けようぜ。お前が誰にも男だとばれずに三年間高校生活を過ごせればお前の勝ち。途中でばれるようなことがあれば俺の勝ち。負けたほうはここから出て行く。わかりやすいだろ？」

「わかりやすいけど……なんか裏がありそうだな」

「裏？ ナズナと二人っきりの時間を邪魔されたくないのはお前だけじゃないってことだ」

賭けに乗ることは、認めることと同義だ。

だから……だからこそ空也は迷わなかった。

スノップにだけは負けられない。

「受けて立つぜ」

空也は静かに右手を差し出した。

「男と男の約束だ」

スノップは空也の手を取って、固く握り締めた。

あとから冷静になって思い返せば、その賭けは空也にとっては一リスクが大きい反面、スノップにとってはほぼリスクがないのだった。

スノップ許すまじ。

90s nostalgia ?

「ふむふむ。なるほどねー。私の知らないところでそんなことを」
白い瀟洒な^{しやし}テーブルには純白のレース。

二つのグラスにはコバルトブルーとエメラルドグリーンの液体。
細い指が海色のグラスに添えられ、白桃のような唇がストローに触れる。

「そうなんだよ」

空也もグラスを手にとって、少しだけ喉を潤した。

少女は物憂げに目を伏せて頬杖をついた。グラスの中身をストローでひと回しすると、重なり合った大粒の氷がぶつかり合ってカラン
と音を立てた。

「そっかー。そうかー。なるほどねー」

限界まで溶け込んだ炭酸が気泡となって大気中に逃げ出していくの
にも構わず、少女はグラスの中身を攪拌し続けている。

「あの……ナズナ、さん？　もしかして怒ってらっしゃる？」

「べつにー」

そうは言うものの、ナズナは視線をグラスに落としたまま、焦点の
定まらない目をして氷を溶かす作業をやめるつもりはないようだ。
薄い笑みを浮かべているのが、空也にはたまらなく恐ろしい。

「ソーダ。炭酸抜けると、おいしくないと思うよ」

おそるおそる、あくまで逆鱗に触れないように当たり障りのないこ
とを言うと、ナズナは満面の笑顔。空也もつられて笑いそうになる。
しかし、ナズナは何を思ったのかグラスを両手で抱え上げると、そ
のままぐいっと一気飲み。ドンっとテーブルにグラスを置く。

「おいしいよ？」

ナズナの完璧に整った笑顔を前にして悲鳴を漏らさなかった自分を
誉めてあげたいと空也は思った。

「ソウデスカ」

彫像のように固まりはしたが、人間に理解可能な発声を成し遂げたのもまた偉業と言えるかもしれない。

「一言くらい相談してくれてもいいんじゃないかなって思うの。男の約束だか何だか知らないけど」

ちなみに空也がナズナに説明したのは表向きの理由だけだ。

90s nostalgiaの領土権を賭けてスノップと勝負する。

高校生活を通して美少女を演じ続けられれば勝ち。誰かに見破られれば負け。

それだけを伝えたのだが、そのことがナズナには不満に感じられて仕方がないようだ。

どこかに不自然さがあつたのかもしれない。隠し事をしている後ろめたさをなんとなく嗅ぎ取られてしまったのかもしれないが、だからと言ってナズナにありのままを伝える勇気を空也は持ち合わせていなかった。

「仲間ハズレにされて悲しい。この悲しみはちよつとやそつとじゃ癒せないわ。ああ、心が痛い。張り裂けそう。死ぬー」

大げさに片手を胸に当てて、空いた手を宙に飛ばしてナズナがうめいた。

それで空也は安心した。ナズナは怒っていない。

「私のお茶会がー。徹夜で衣装作ってきたのにー」

「そうなの？ この衣装」

ナズナは白い丸襟ブラウスに黒いジャンパースカート。頭にはヘッドドレスを装備してゴスロリ風の姿を装っている。

空也はナズナに言われるままに黒い燕尾服を着てシルクハットを被っていた。

マッドハッター

不思議の国のナズナとイカレ帽子屋というシチュエーションを再現しているらしい。

「そんなわけじゃない。こんなの作れないって」

ナズナはペロつと舌を出した。

「でも、楽しみにはしてたの。スノップとの賭けなんてどうでも良

いから、まずは感想を聞きたかったかな」

ナズナは立ち上がってスカートの裾をつかんで見せた。

「どうかな？」

恥ずかしそうに肩を寄せる。

女の子は……ナズナはずるいと空也は思う。

空也は何度かナズナのコスプレパーティーに付き合っているが、一度だってナズナの顔をまともに見られた試しはなかった。

普段はそうでもないが、意識させられると恥ずかしくなってしまうのだった。

「いいと思う」

だから、いつもお決まりの台詞を言うしかない。

「ホント？ 本気で言ってる？」

息がかかるほど近くからナズナの声がする。空也の目の前にナズナがいる。

肌理きめの細やかな白い肌や、ほんのりと色づいた柔らかそうな頬に目を奪われる。睫毛は驚くほど長く、目が合いそうになって空也はうつむくしかないというのに、ナズナは全然気にした様子が無い。

それは、ナズナが空也のことを特別に思ってはくれないということ。

だから、空也も何でもないという風に装わなくてはならない。

「顔、近いつて」

無理だ。心臓がバクバクする。

「近くで見ないとわからなくない？」

「そんなことないから」

無自覚拷問人の称号をナズナに授けよう。と、馬鹿なことを考えて気を紛らわせるくらいしか、空也には取れる術が無い。

「そんなもんか」

ナズナは満足したのか、席に戻っていった。

「しかし女装とは、また……」

ナズナはしめつめらしい顔をして、空也の全身を上から下までなめ

回すように見ている。

「女装するつもりはないよ。そんなことする必要ないだろ。そこま
で無謀じゃない。ちゃんと女の子になつていくつもりさ。あ、女の
子じゃないや。美少女だった」

「簡単そうに言ってくれるじゃない。美少女のプライドが傷つくわ
ナズナはおどけたように言つて首を振る。

「自分で言うか」

「自分だから言うの。人から言われたら、バカにされてるっぽい」
そうなのだろうか。空也は試してみることにした。

「ナズナは美少女だよ」

「……なんだか変でしょ、それ」

ナズナは肩をすくめた。

遡ることおよそ一ヶ月前。

高校受験を終えた空也は、合格発表を待つだけになって、特にやる
べきこともなくて、中学生と高校生の間で宙に浮いてしまった身を
持て余して、世界を漂泊していた。

誰も訪れたことの無い秘境を探して、自分だけのパーソナルスペー
スが欲しくて、人がいない方へ。ひたすらいらない方へ。

そうやってたどり着いた先は廃墟だった。

小さな遊園地ほどもある広大な敷地の中心で明らかに管理されてい
ない巨大な塔が不安定に不規則に鳴動していた。

明らかにリソースの無駄使いだった。

世界に存在するのは無骨な巨塔と自分だけだ。

空也はひと目で魅了された。

理由なんて存在しない。考えられない。完全なひと目惚れだった。
ずっと見ていたいと思った。

巨塔が震えた。

光球がいくつもいくつも射出された。

巣立つ雛鳥のようだ。

放物線を描いて、白い筋を残して飛んでいく。

そして空也は激突した。

光球だと思ったものは体を丸めた人間で、それが高速回転しながら自分に接近していると気づいたときには、既に何もかもが手遅れだった。

少女は両手を翼のように広げ、両足をピンと伸ばし、空也の脳天にドロップキックをかまして

「いったーい」

と、叫び声を上げた。

スカートの奥の逆三角形は空色縞々ストライプ。

「なんで着地点に人間がいるのよ。おかしいじゃない」

土煙を上げて地べたを転がり、仰向けに倒れた空也に向かって毒づいた。

少女自身は空也の頭を踏み台にして、空中で姿勢を制御。華麗な着地を遂げていた。

「あのー。生きてますかー」

物理的に死ぬことのない世界だということは空也もわかっている。だが、あんまりと言えばあんまりな物言いに空也は死んだふりをすることにした。

「パンツ見てたの知ってますよー。女の子のパンツは命よりも重いんですよー」

頭のおかしな女とは関わり合いになるな。

空也の理性が冷静に告げていた。

死んだふりを続けるのが得策だと思った。

「運命的な出会いのあとは……え、マジで？　ありえない？」

しかし、ぶつぶつと呟く独り言の内容が気になって空也は薄目を開けた。開けてしまった。

心臓が止まるかと思った。

空也の目と鼻の先に女の子の顔があった。それもとびっきりの美少女だった。

「はわっ」

鼻腔から変な息が漏れた。

「あ。やっぱり死んでなかった。あー、良かった。ファーストキスの責任なんて重過ぎ」

少女は起き上がり、片手に持った本をぱたりと閉じて放り投げた。

本は地面に落ちる前に空間に吸い込まれて消えた。

「ようこそ。90s nostalgiaへ！」

少女が差し出した右手を空也は取ろうとしたが、その手は宙を切った。

「なんてね。そんなキャラでもないのよね」

「お前……友達いないだろ」

空也は立ち上がって、体についた埃を払った。

「初対面の人に向かって放つ第一声がそれ？」

「初対面の人に向かって、ドロップキックはどーなんだよ」

「パンツとドロップキックで相殺でしょ」

「色気の無い縞パンなんかに興味ねーです」

空也が何気なく言うと、少女はぱつとスカートを抑えて数歩あとずさった。心なしか顔が赤くなっている。

「な、なんで知ってるのよ」

「なんでって……パンツとドロップキックで、水色ストライプで…

…」

「思い出さなくていいから」

少女は顔を両手で隠して耳まで赤くなっている。

可愛い女の子だった。しかし、着ている服が独特だった。デザインは一見普通の学生服のように見えるが、色がおかしい。上は薄いピンク色でスカートは紅色をしている。校則の緩い私立学校の生徒なのだろうか。

「お取り込み中のところすみませんが、自己紹介しませんか？」

空也が声をかけると、少女はまじまじと凝視してきた。天地神明に誓って後ろ暗いところはないと断言できるが、なんとなく居心地が

悪い。

「俺は空也。君は？」

「……ナズナ」

それが二人の出会いだった。

「おい。何トリップしちゃってんの？ 男がニヤニヤ思い出し笑いとか、はつきり言ってるきもいよ」

ナズナがジト目で空也をにらんでいた。

空也は誤魔化すようにジューズを口に含んだ。

「どうせパンツのことも考えてたんでしょ。何なら見せたげよっか？」

食道を下るはずの水流が分岐点で迷走して気管のほうへ向かった。直訳するとむせた。

「うわっ。ばっちい。まさかホントに考えてたの？」

ナズナは若干引いているが、ハンカチを差し出してくれた。空也は受けとって口元を拭う。

「使用済みだから、それ。未使用より価値があるはずだよ」

意味ありげに笑っているナズナを見て、空也は嫌な予感がした。丁寧なたたまれたままのハンカチを広げてみる。見事な逆三角形。純白、シルク、レースつき。

パンツだった。

パシャッとシャッター音がした。

ナズナがカメラを片手に爆笑していた。

「あっはっは！ いまの顔サイコーだったよ。空也君は毎回リアクションが良いから、仕込みがいがあるなあ」

「……そうですか。洗って返すね」

「もー。怒らないでよ。ごめんごめん。未使用の新品。いい匂いするでしょ。香水つけてみたんだ。匂ってみてよ」

「匂ってみて……」

空也は改めて両手でパンツを広げてみた。
白い。

顔を近づけて鼻をくんくんとさせている自分を想像してみる。

犯罪の匂いがした。

「どこからこういう発想が出てくるの？」

「漫画とかアニメ、かな？ あとはラノベとか？ 図書館にいくらでも蔵書があるじゃん」

空也はパンツをテーブルの上に置いて、丁寧に四つ折りにした。少し迷ったが、ポケットに突っ込んだ。

「あー、持って帰っちゃうか。そうかー」

「どうしろってんだよ！ どうして欲しいの!？」

しみじみと呟いていたナズナの目が丸くなった。

「あ……なんか、ごめん」

「ううん。そんなことないよ。私もちょっと調子に乗りすぎた。ほら、もう少しで学校始まるじゃない？ そうしたら会えなくなるのになって。そう思ったら、なんか記念になるものでもあげたほうがいいのかなって」

「それで……パンツ？」

ナズナと白い布を交互に見て、空也はためらいながら発音した。

「なんだか考えてるうちにわけわかんなくなっちゃって。それ……勝負下着」

ナズナの声は最終的に聞こえないくらいまで小さくなってしまったが、空也の耳はその単語を正確に拾った。

ナズナは横を向いて決まり悪そうにしている。

脳みそが煮沸された。

「しょうぶしたぎ？」

咄嗟に漢字変換できない。

「そつよ。悪い？」

試すようなナズナの視線に、空也は首を振って答えた。

「それは……ごちそうさまです」

「いいえ。おそまつさまでした」

二人でお辞儀しあってしまった。

ナズナは顔の横でぱたと手を振って風を送っている。

「調子狂うなあ。計画通りにはいかないもんね。体を張ったギャグ
って難しい」

「ギャクだったの？」

空也は椅子からずり落ちそうになった。

「どっちでもいいじゃない。新生活、応援してる。せいぜい女の子
頑張ってる」

ナズナはそう言うと、空間に溶けるようにして姿を消した。

「わっかんねー」

椅子にもたれかかって空を仰ぐ。

「お前はアホか……」

声につられてテーブルに視線を戻すと、ナズナの席にスノップが座
っていた。

「なんだ。いたのか」

「これだから若いやつらはヤだねー。二人の邪魔をしないように、
こっそり陰から見守っていたっていうのに。ナズナ、最近冷たいん
だよ。どうしたら昔みたいに懐いてくれるのかな。どう思う？」
指で「の」の字を書きながらいじけているスノップ。ひたすらうざ
い。

空也は視界からリムープすることに決めた。スノップの姿が薄くな
っていく。

「あ！ てめえ。何しやがるっ！」

「うつせーよ。消える消える」

空也はスノップからの干渉を一切受け付けないようにブロックする
ことにした。声も聞こえなくなった。

干渉されたくなければ、接触を絶てば良い。

それが可能な時代に空也は生きていた。

90s nostalgia ?

世界は断片化してしまった。

それは二十一世紀に発生した。

それはカップラーメンがお湯を注いで三分で出来上がるくらいには確からしい歴史上の事実で、五分で出来上がったとしても、伸びきってしまったとしても、個人の主観的にはそれほど大した問題ではなかった。

だから、正確には二十一世紀ではなかったのかもしれない。

だが、何はともあれ世界は断片化してしまった。それだけは確かだ。原因は世界に情報が氾濫し、世界の処理限界を超えてしまったことにある、らしい。

高次元宇宙からの侵略だという説もある。

四次元、五次元、六次元……もしくはさらに高次元の世界が相手だったのかもしれない。

この説はある程度の支持を得ている。

というよりは、三次元から他次元への移動が個人の裁量で行われているから、経験則として受け入れられている。

これが本当のソーシャルダンピング、なんて馬鹿げたジョークが一時流行ったそうだ。

世界は錯綜している。

世界は並行的で、どこへ行くのも個人の自由だ。

そして僕らは生活の基盤を失い……

地に足がつかないまま、日々を過ごしている。

ドクター、ジニアの日誌より

入学式が終わり、クラスでの自己紹介もつつがなく終えて休み時間。クーヤはひとまず安堵していた。

男の体から女の体へ乗り換えるのは、意識の持ち方を変更するだけで誰にでも可能だ。断片化以降可能になった。

しかし、空也の無意識は自分を男だと認識しているので、クーヤの体を絶えず男の体に戻そうとする。つまり意識していなければ、自然と男の体に戻ってしまうということだ。

わざわざ精神に緊張を強いてまで、自分の本来の性別と異なった肉体を纏おうとする人間は稀だ。

異性の肉体への興味？

無意識の強烈な揺り戻しによって、体は本来の性別に戻ってしまう。つまりエロいことはできない。

何人もの先人が挑戦しては挫折を味わった。現在も挑戦するものはあとを絶たない。

空也も例に漏れず、男子高校生の思春期真っ盛り。何度挑戦しても煩惱に負けて上手く変身できなかった。あまりの酷さに見かねたスノップから錠剤がいっぱい詰まった小瓶を渡された。

赤と青のコントラスト。

赤色の中に青色が混じっている。

赤い薬を飲めば女になって、反対に青い薬を飲めば男に戻れる。

薬の効き目は約六時間。個人差がある。

スノップが出し渋ったのは、薬を乱用するといざという時に戻れなくなるから、ということらしい。

クーヤは自分の胸元を見下ろした。

丸く膨らんだ双丘がブラウスを押し上げている。

股間に男性のシンボルは無い。

そのことを意識すると顔が火照ってくるが、同時に体は男性に戻るうとし始める。薬はあくまで補助剤。結局は意思の問題だ。

クーヤはぶんぶん頭を振って邪な雑念を追い払った。

「クーヤさん。どこか具合でも悪い？ 気分でも優れない？」

「大丈夫です。心配してくれてありがとう」

話しかけてきた女子に笑顔を向ける。

実は良く見知った顔で、目下のところ一番の懸念材料だったりする。

「クーヤさんって、私の知り合いと同じ名前なんだ」

「そうですね。珍しいこともあるものですね」

まさか同じクラスに彼女がいるとは思わなかった。それに緊張していて周りが全く見えていなかった。自己紹介の前にもっと凝った名前を考えておくべきだったと、クーヤは後悔しきりだった。

「女の子でクーヤって珍しい名前だよな」

クーヤの思惑とは正反対に、むしろ積極的と言ってかまわないほど話しかけてくる。

彼女にその気が無いのはわかっているが、まるで尋問されているような気分だ。許されるなら今すぐにも話を切り上げたい。しかし、それはいくらなんでも怪しすぎる。自分から不審者です、と名乗りを上げるようなものだ。当たり障りの無い会話を続ける以外の選択肢が取れない。

「本名は女の子らしい名前なんです。だからSNは男っぽい名前にしようと思っスクールネームて」

ちなみに個人情報保護の観点から、学校では匿名を使うことが推奨されている。

それがスクールネームだ。

「へー。私のSNは本名まんまなんだよ。もっと色々考えたら良かった」

「そうですねですか？ 唯さんって素敵な名前だと思いますよ」

「あれ？ 私の名前言ってたっけ？」

唯が怪訝そうな顔をする。

クーヤは顔に出さないように努めているが、内心はひやひやものだ。唯は昔から妙に勘が鋭いところがあった。

昔、まだ二人が小さかったころの話。

空也は誕生日のプレゼントとして唯におもちゃの指輪を贈ったこと

があつた。しかし、どこで嗅ぎつけたのか、空也よりも唯のほうがそわそわしていて非常に渡しにくかつた。

そのくせ自分は空也の誕生日にプレゼントを用意していることなどおくびにも出さない。そのうえ渡されるものは空也の欲しいものだったりするから余計に驚かされる。毎年のように繰り返されるので、流石にここ数年は慣れた空也だったが、子供のころは不思議で仕方なかつた。

「あはは。クラス全員自己紹介したじゃないですか。やだなあ、もう」

「あー。うん。そうだった。そうだった」

唯は納得していない。顔は笑っているが、心から笑っているかどうかくらい長年の付き合いから推し量れる。笑って誤魔化せられる相手なら苦勞はしない。

空也と唯は三歳の時からのお付き合い。

クーヤとユイは三分前からのお付き合い。

男と女。女と女。

「唯一の唯なんて、ホントに素敵」

自己紹介なんてろくに聞いていなかったが、唯とならなんとか話を合わせられる。それを考えれば、むしろ話しかけてきたのが幼なじみで良かったのかもしれない。

「うーん」

唯は首を捻っていたかと思うと、

「私はカタカナでユイって自己紹介したと思うんだけど」

しれっと爆弾発言をかましてくれた。

クーヤの背中を冷や汗が駆け下りていった。

「あ、あれ。そうだったかしら。勘違いしてたかも」

慌てて取り繕うが、唯の疑念はかえって強まってしまったらしく、じーっと半眼で見つめてくる。

「ユイと聞いてぱっと出てくるのが唯一の唯だったからかも」

顔をうかがいながら苦しい言い訳。

「そうなのかなあ。何か隠そうとしてない？」

「してない。してないって。隠すも何も、私はユイさんと初対面だし、隠すことなんて全然ありませんよ」

「そうなんだけど……なんか引つかかるんだよねえ。知り合いが私に隠し事してる時の雰囲気とそっくりなの。それだけじゃないよ。なんとなくなんだけど、纏っている空気？ 似てる気がする」

似ているも何も、あなたが頭に思い浮かべている人物と目の前にいる女の子は同一人物です。と、クーヤは心の中で独白した。

唯のつま先はグレーゾーンを越えそうになっている。ブラックゾーンに踏み込まれる前になんとかして方向転換させなければ。それができなければ、スノップとの賭けは空也の惨敗だ。一日すらもたずに看破されたとあっては末代までの恥。

クーヤはがしつと唯の手を取った。

「え？ え、なに？」

「実は隠し事してるんです。クラスに知ってる人、一人もいなくてそれで緊張しすぎて具合悪くなったの。だからユイさんが話しかけてくれて嬉しかったんです」

さも重大な秘密を打ち明けるように、唯だけに聞こえるように囁いた。

内心の動揺も手の震えとなって伝わっているはずだ。動揺している理由は唯本人のせいだが、この際それはどうでも良い。

「そんな大げさだよ」

幼なじみの性格の良さを利用するようで後ろめたくもないが、そんなことは言っていられない。とどめの一押しをする。

「ユイって呼んでもいい？ 私のことはクーヤって呼んで」
捨てられた子犬のような目をして唯を見つめる。

「……クーヤ」

唯はクーヤの手を優しく握り返した。

「うん。クーヤ。最初に友達になれたのがユイで良かった」
「ともだち」

クーヤが微笑みかけると、唯はぽーっと熱に浮かされたような顔をした。

予鈴が鳴った。

「私、席に戻るね」

唯は名残惜しそうにしながら、自分の席に戻っていった。

美少女クーヤの魅力の虜になったのは、誰の目にも明らかだった。

チヨロいぜ！

と、思ったクーヤだった。

それから数日間は何事も無く過ぎていった。

内気な控え目美少女クーヤを演出しつつ、話し相手はほぼ唯という学園生活を続行中。何かあってもらっては困るので、クーヤとしては願ったり適ったりだ。

風景に溶け込むように日々を送る。

それがクーヤの取った戦術だった。

隠れ潜む擬美少女としては正しい姿だ。

だが、クーヤは早くも飽きてきていた。張り合いが無さ過ぎる。

「他愛ないものね」

「どうしたの？ 急に」

机を囲んで昼食タイム。メンバーはクーヤと唯の二人きり。

「ああ？ いや、こつちの話」

「ふーん」

唯のお弁当は二段重ね。タコさんウィンナーとだしまき卵。きぬさやが彩りを添えている。

クーヤはサンドイッチの包装をぴりりと破る。

「……つまらない。そんな顔してるよ」

唯がタコさんウィンナーを箸に乗せて何気ない仕草でクーヤのほう

唯はすぐに笑顔を取り戻して、電光石火で漫画を鞆の中に押し込んだ。

「そんなに慌てなくても、誰にも取られないよ」

「クーヤって……もしかして天然？」

「まさか」

「そうだよ。そうだと思った。食事中にスプラッタ渡されるなんてびっくりしたあ」

クーヤは小首を傾げた。

唯も鏡のように小首を傾げた。

90s nostalgia ?

そして週末。 90s nostalgia。

「あははははっ！ なんなの、それ。面白過ぎ！」

ナズナはお腹を抱えて爆笑している。

空也が話し始めたときには興味なさそうな顔をして携帯ゲーム機をいじっていた。それを考えると喜んで良いのかもしれないが、なんとなく釈然としないものを感じる空也だった。

「面白いかなあ」

「面白いつて。ひひっ」

空也はテーブルの上のバスケットに手を伸ばした。クッキーやラスク、チョコレートなどが雑多に放り込まれている。適当にラスクを選んでボリボリとほおばる。小さな幸せが口の中を満たした。

ナズナは肩を震わせながらティーカップを口元に運んだ。フーフーと息を吹きかけている。猫舌で熱いのが苦手なようだ。

その日の二人は魔法使い。

空也は黒いローブに三角帽子。ナズナは白いフード付きローブを着ている。

フードは切り立った山が二つ寄り添うような形をしているせいで猫耳っぽく見える。

「尻尾とかつけると……」

さらに猫っぽくなるかもしれない。

「は？」

空也の温かい妄想にナズナの冷たい視線が突き刺さっていた。

「そういうのが好みなの？ 空也が言うならつけてあげてもいいよ」

「……いないから」

誤魔化すようにレモンティーで口を塞ぐ。ほろ苦い。

「意地張っちゃってー。にゃんことくらそうとか読んでそうだもん」
ナズナの当てずっぽうな指摘は嫌なこと到的を射ていた。

空也はスノップから薦められて三巻まで読んでいるが知らないふりをする。

淡い色調で猫耳少女が描かれている表紙はエスパーマミーとは別の意味で高い攻撃力を誇るからだ。

……主に性的な意味で。

空也としては女の子と二人で話すのは避けたい類の話題だった。

「隠したって閲覧履歴見ればわかるのにやー。どうしてそんなつまらない嘘つくのかにやー。わからないにやー」

「わからないでよっ！　せめてわからないふりしてよっ！　にやー、にやーって明らかにナズナ読んでるよね！」

「にやあ。読んでないにやー。空也の趣味に合わせて、衣装をセツティングとか絶対してないにやー。邪推しすぎだにやー」

にやーにやー言いながら、ナズナは楽しそうに笑う。

手の平で踊らされている感はいえないが、不思議と嫌な気持ちもしない。

「はいはい。認めますよ。猫耳尻尾つけたナズナさんが見たいです」
空也が投げやりに言う

「こまるにやー。えへへ」

ナズナは丸めた手で顔を洗う仕草をしてはにかんだ。

スノップ経由で空也に回ってきたものは、もれなくナズナも目を通していていると思っただろうが良さそうだ。

ところで、空也が気になっているのはナズナとスノップの関係だ。

年齢は離れているし性別も異なる二人。共通点は特に見当たらない。

空也は二人に何度か尋ねてみたが、その度にはぐらかされてきた。

少なくともお互いに悪印象は持っていないように思えるが……まさか二人は恋人同士なのだろうか。

「何かお悩み中、かにや？」

探るようなナズナの声で空也の意識は現実に戻された。

テーブルに乗り上げたナズナのローブの襟元は重力に引かれ、隙間からは白い肌がのぞいている。空也の視線も重力に引かれ、ナズナ

の胸元に落ちそうになる。理性を総動員して本能に抵抗する。

「うん。正解。見てるとすぐにわかるからね。別に見られて減るものでもないけど。好感度アップだよ」

ナズナはそつと胸元を押さえて微笑む。

空也はそらつとぼけるしかない。

「にゃーにゃー言うのやめたんだ」

「だって、にゃーにゃー言ってる为本気にしないでしょ」

不覚にもドキッとさせられた。

「高感度アップって……ギャルゲじゃないんだから」

ナズナの顔がまともに見られない。

「にゃはは。誰も好感度の話なんてしてにゃいにゃ。おっぱいの話だにゃ。エロいにゃー」

ナズナは自分の胸を両腕で抱えるようにして持ち上げた。

「結構大きいから見られると恥ずかしいんだ」

空也の目は今度こそ間違いなくナズナの胸元に吸い寄せられた。

してやつたりと言うようにナズナの目が細められた。

「コロコロ態度変えられると反応に困るよ……」

「それが狙いだからね。微妙な女心をレクチャーしてあげているのだ。空也が女の子でいられるように」

そう言つて、話は終わりとばかりに携帯ゲーム機のスイッチを入れた。空也はバスケットから力カオチョコレートの一つ摘まんで口の中に放り込んだ。

ビタースイート。

ナズナはゲーム画面を食い入るように見つめている。片手で操作を続けながら、ずり落ちてきたフードを直そうとしている。ところが上手くいかないらしく潔く脱ぎ捨てた。長い髪がはらりと落ちる。

「空也も好きなことといいよ。ここにいない必要も無いし」

ナズナはゲーム画面から目を逸らさずにそんなことを言う。

「あー……ごめん。何気に酷いこと言ったかも」

ゲームを一時中断して、しかしあくまでスイッチは切らずに、椅子

を空也の隣に移動させた。肩と肩が触れ合いそんな距離だが、ナズナは気にしていないようだ。

「ロムが三種類あって、内容は基本的に同じなんだけど……」

空也にも見えるようにと、さらに密着してくる。

「ほら、図鑑が埋まってなくて。一つだと絶対にコンプリートできないんだ。一人でやっててもいいんだけど……その……」

ナズナはゲーム画面と空也の顔を交互に見ている。空也はナズナの体温がこそばゆくて体を引いた。

「スノッブならコンプリートしてるんじゃない？」

空也は気を紛らわせるために思ってもいないことを言ってしまう。

「アイツ。なんだかんだでいいやつだしさ。頼んだら、二つ返事で交換してくれるって」

「……ばか。もういい。しらけちゃった。出てっってくれる？」

ナズナはふくれっ面をしてそっぽを向いた。

「え？ え？ え？ なんで怒ってるの？ 俺に頼むよりスノッブに頼んだほうが早いって。やってなくてもナズナのためなら……」
ナズナの姿が消えた。

空也はナズナの足跡を追跡しようとしたが、ブロックされていて追いかけれなかった。

こうなってしまうては、ナズナが許してくれるまで話すらできない。

「お前……バカだろ」

どこからともなくスノッブが現れて、バスケットの中からアーモンドチョコレートを取り出し放り投げた。小さなラグビーボールは綺麗な放物線を描いてスノッブの口の中に消えた。

「なんだ。スノッブいたのか」

「デジャブですな。甘いね。このチョコ。もっと甘くてもいい。チョコは甘ければ甘いほどいい」

あつという間に三つ。次から次へとスノッブの胃袋の中にチョコレートが吸い込まれていく。焼き菓子には一切手をつけない。ひたすらチョコだ。

「高級なんだぞ、これ。食わないの？」

残りが二つになったところでスノップが聞いてきた。空也はため息まじりに首を振った。見ているだけで胸焼けがしてきそうだ。

「あ、そう。じゃ、遠慮なく」

スノップはチョコレートを完食するとハンカチで指を拭い、テーブルに乗っていたティーカップを手にとった。

ナズナのカップだ。

「ちよっ！ スノップ待て。それナズナのだから」

空也は慌てて制止する。

スノップは一瞬眉をひそめ、口をつける寸前だったカップを見やる。空也がほっとしたのもつかの間、スノップはニヤリと口の端を上げると、構わずカップに残った紅茶を飲み干した。

「あーっ！ あー。あー……」

「砂糖もミルクもレモンもなしのストレートか。苦いね。だがそれがいい」

ポットを手にして二杯目を注ぐ。砂糖とミルクをたっぷり入れてスプーンでかき混ぜる。

「昔はあいつも砂糖ドバドバ入れてたんだけどなあ。最近は大層の気にしてるみたいよ。ちよつとくらい太ってても可愛いのにね。どーしたの？ 世界の終わりみたいな顔して。あ、もしかして狙ってた？ ナズナの残り。変態さんだなあ」

スノップは空也のカップにポットから紅茶を注ぐと、ぎゅーっとレモンを絞った。

「疲労回復にはクエン酸が効くらしいよ。どぞどぞ」

疲労の原因たるスノップは全く悪びれない。悪びれないからこそその疲労の原因だ。空也は呪いの眼差しをスノップに送った。

「おー。怖い怖い。そんな顔してにらんだって無駄無駄。ナズナはお前なんかに渡さないよ。早いとこバレないかなあ」

「こおんの、ロリコン！ 一回り以上も年が違う相手をいかがわしい目で見やがって。光源氏気取りか。おっさん！」

「お！ 若いのによく知ってるね。光源氏計画は男の夢だねえ。ぬつつぶ。ナズナの初めての相手かあ。それもいいなあ」

スノップは夢見るような目をしてるくでもないことを語る。

他人の詳細な女性遍歴に興味はないが、年下の女の子を自分好みに育て上げる。それが光源氏計画であることくらいは空也でも知っている。

「ナズナに言いつけてやる」

「別にいいよー。ナズナとは親密な関係だから。間接キスくらい、どうってことないさ。キスだってしたことあるんだぜー。ナズナのファーストキスは俺のもんだもんね。過去は変えられない。ひひひっ。お前がどんなに頑張ったところで。ふははははっ」

白衣をはためかせて高笑いするスノップは、どこからどう見てもマッドサイエンティストのいでたちだ。美少女の敵は世界の敵のはず。しかし、ヒーローはおるか死神すらもスノップを倒しに現れてはくれない。おそらく春の長期休暇中なのだ。桜の下で宴会をしているのかもしれない。

だから仕方なく空也が代行することになる。

「デタラメ言うな。ナズナに聞けばすぐにわかるんだよ。アホか」

「デタラメだつて言い切れるかな？ 俺が嘘をついたことがあるか？ よく考えてみるよ。こんな吹けば飛ぶような嘘をつく理由を。

あるか？ うん？」

スノップは自信たっぷりに笑っている。

紅茶に溶け込んだレモンの果汁のように、スノップの嘘が空也の心に侵食してくる。

はたして本当に嘘なのだろうか。

ナズナに対する信頼が揺らぐ。そんな自分が嫌で、空也は必死に心に浮き上がった疑念を打ち消そうとする。しかし、いったん浮かび上がった毒は心の隅々まで拡散していくばかりで、簡単には消えてくれない。

「カードゲームでもするか」

急に調子を変えてスノップが言った。

手にはカードの束が握られている。空也の返事を待たずにカードをテーブルの上に並べていく。山が七つできた。それらを一つにまとめて、さらに同じ動作を繰り返す。ディールシャッフルだ。

「ただやるのも面白くないな。何か賭けるか。何が良いかな……」

「おい。誰もまだやるとは言ってないだろ。勝手に話を進めるなよ」

「いいや。お前はやるね。何故なら賭けるものは真実だからだ。お前が今一番欲しいものだろ？ ほれ。デッキだしな」

スノップはシャッフルをヒンズーシャッフルに変えて、デッキを両手で何度も切り直している。空也が渋っていると、スノップはまず調子に乗った。

「負ける勝負はしたくないか？ 懸命だねえ。真実は闇の中へ。俺の真実じゃないぞ。お前の真実だ。逃げた、という真実は闇に葬ってやるよ。ナズナには知られたくないもんな。お情けで黙っていてやろう」

「うつぜーな。安い挑発にあえて乗ってやるよ」

空也はデッキを取り出した。スノップ以上に素早くシャッフルする。

「やる気まんまんだねえ。よしよし」

スノップはダイスを二つ中空に放り投げた。

90s nostalgia ?

ダイスの目は六と三を示している。スノップが三を示したダイスを指で弾いた。ダイスは綺麗に一回転して四の目を示した。

「ぬっふっふ。完勝完勝」

ダイスは初めに先攻後攻を決めた後——二戦目以降は敗者に先攻後攻の選択権が与えられる——は勝敗を表すのに利用されていた。最終戦績は六と四。

「空也君。見たまえよ。そして言いたまえ。勝敗を」

スノップは汚かった。ひたすら汚かった。

スノップのデッキは通称近代美術館と呼ばれる一人回し専用のコンボデッキだった。

一枚数万円もする希少価値の高いカードがふんだんに盛り込まれ、脅威の一ターンキル率八十パーセント越えを叩き出す。そのあまりの極悪さに、デッキのキーカードが何枚も禁止カードリストに記載されているといういわくつきの代物だ。

だが、それはあくまで公式大会においての話。

私闘にルールは無用とばかりに、スノップは財力に任せて蹂躪の限りを尽くした。

空也の代わりにアンティークドールのローズマリーちゃん——推定五百才、お値段はスノップの札束デッキとほぼ等価。スノップの数あるドールコレクションのひとつ——が座っていたとしても勝敗には微塵も影響しなかったと思われる。

「……ジウゼロです」

悔しさに声が震える。

「あーん？ 聞こえませんかあ。もつと大きな声で言ってもらいませんと。あー、目も悪くなつて良く見えん。で、何対何でしたっけ？ 十回もしたからなあ。さすがに覚えてないなあ」

スノップはわざとらしく耳に手をあて、目をぱちぱちと瞬かせてい

る。

勝負の結果よりも、スノップの策略にはめられたことのほうが何倍も悔しかった。だが、結果は結果として認めなければならない。

「十対ゼロでスノップさんの勝ちです」

「おけおけ。お互いの健闘を称えあおう。グッドゲーム」

空也が宣言すると、スノップは凄く良い笑顔で右手を差し出してきた。

勝負の結果は認められても、スノップの存在まで認められるかという、それは全く別の話だった。にやにや笑いを浮かべているスノップの存在はどちらかというと、消去してやりたい、とクーヤは思った。

「おーっと、姑息な手段に出るつもりかな？ リムーブしてブロックすれば俺の顔は見なくてすむだろう。しかし、その瞬間、俺の記憶には負け犬の姿が記録されるのだ」

クーヤは諦めてスノップの手を取った。せめてもの報復としてその手を力の限り握りつぶした。と、手の中に何か硬いものが隠されていた。ちょうど手のひらに納まるサイズ。それを握らされた。

空也は訝しく思いながら手を開いた。

ゲームのロムだった。

「これは？」

「鈍いなあ。忘れたのか？ 賭けただろ。真実。それが真実だよ」

「でも、俺は負けたのに……」

勝者から敗者に譲渡されるのは屈辱であるはず。それが賭けというものだ。スノップの意図がつかめない。

「ナズナがやってたゲーム。お前の言ったとおりだよ。俺はコンプリートしてるし、協力を惜しむつもりもない。けど……これ以上言わせんなよ。ま、やってみな。面白いから」

スノップはそれだけ言うと、ヒラヒラと手を振りながら立ち去った。屈辱。

ゲームに負けただけではなく、敵に塩まで送られてしまった。

さつさと仲直りしろ。

そう言われた気がした。

「くそつ。なんて嫌なやつなんだ」

空也はゲーム機にロムを乱暴に突っ込んだ。

冒険の始まりを予感させる明るいメロディーが流れ出した。

ユグドラシルは今日も変わらず回り続けている。

共有する認識が共通する世界を形作る。

現在では常識となった感覚だ。

しかし、断片化直後の世界ではパラダイムシフトを受け入れられた人間とそうでない人間がいて……結果、世界は断絶してしまった。もしくは現在でも断絶は続いている。

断絶という言葉はいつしか断片化と姿を変えた。旧世界を思い起こされるというのが主たる理由だ。一方で現実の本質は何も変わらないままだ。

民族、宗教、言語、文化、価値観……コミュニティーを隔てる境界は様々であり、それは曖昧でもあり明確でもある。

世界には無数の扉が閉じられており、一人の人間が両手に持てる鍵の数には限りがある。

開けられない扉の先に存在する世界は存在していないも同じ。

食べられない葡萄を酸っぱいと断じた狐のような思考回路だ。しかし、それで満足してしまう人間がいることも事実だった。

共有キーを創造する試み。

もしくはマスターキーを流通させるたくらみ。

そうして作り上げられたのが……

ジニアの日記より

ドクター、

指の間でくると回るシャープペンシル。眠気を紛らわせるために始めたはずだった。しかし、円弧を描くペン先からは睡魔が忍び寄ってくる。

数学教師のテノールボイスはクーヤを夢の世界の入り口へと案内する。

視界が白濁してきた。いよいよダメだな、とクーヤは思う。指の隙間からシャープペンシルが脱出して、机の上を走り回っている。ころうじて転落は免れたようだ。

「クーヤさん。この問題に答えてください」

「ほえ？」

夢の世界から強制的に引き戻される。

数学教師が怖い顔をして黒板の問題を指し示していた。

「は、ハイ！」

声が微妙に裏返っていて恥ずかしい。

元気良く返事をして立ち上がったものの、黒板には問題文が四つ書かれてあって、どれに答えたら良いのかわからない。

おそらく正解は一つだ。

数学教師はクーヤが授業中に居眠りしていることに気がついて、この難題をしかけてきたに違いなかった。立たされているのはクーヤ一人だけだ。それがいかにも怪しい。左端の問題に答えればいいのだろうか。しかし、ダミーの可能性もある。

「早く答えなさい。わからないのですか？」

数学教師は定規で測ったような絶妙な角度で黒板を指して問題を特定させない。

クーヤは助けを求めるように周囲に視線を走らせた。誰も目を合わせようとしない。みながつつむいている。

しかし窮地に立たされた空也の視線を真っ直ぐに受け止めてくれる人間がただ一人。

唯だ。

ただし、それはクーヤを助けるためではなかった。彼女は爆睡中だった。肘について細い両腕で頭を支えているが、両目は完全に塞がれていた。全く頼りにならない幼なじみだった。

「あのー、えー」

曖昧に言葉を濁しながら言い訳を考えるが、教師の眼光はいよいよ鋭くなってきた。とても目を合わせられない。クーヤは下を向いた。ノートは白い。答えはおるか問題文すら書き写されていない。当然だ。クーヤは今の今まで授業を聞いていなかった。ところが、右下でアンサー&ダウンロードの文字が点滅している。

差出人はアリサ。

知らない名前だが……クーヤは藁をもつかむ気持ちで指を当てた。

一瞬でノートに数式がずらりと並ぶ。

どうやら答えで間違いなさそうだった。それも全問の解答。クーヤは急いでコピーして送信。ノート上で起こったことがそのまま黒板上で再現された。

教師は黒板に現れた答えをしばらく吟味していたが、やがて「正解です。座つてよろしい」と言った。

席についたクーヤはほっと胸を撫で下ろした。冷や汗をかかされたが、あまり注目を集めずにすんだ。目立つようなことはできるだけ避けたい。

落ち着いてくると、送信元が気になり始めた。クラスの中でクーヤのアドレスを知っているのは唯だけのはずだ。そう考えれば、目を合わせようとしなかったクラスメートたちのことを一方的には責められない。スノップとナズナには教えてあるが、当然ながらここにはいない。

授業を聞き流しながら、クーヤは机の下でこっそりクラス名簿を呼び出した。

ユイと自分の名前しか記入されていない。クラスメートを避けるようにして学校生活を送っているクーヤにはいまだ唯以外の友達がい

なかった。もし唯がいなかったら、昼休みは花のぼつち飯になっていたかもしれない。美少女が一人ぼつちで食事している風景は絵にはなったとしても、本人は面白くないだろうとクーヤは思う。

アリサ。

名前からして女子だろうか。しかし、クーヤ自身の例もある。名前が女つぽいからといって、女だとは限らない。

もしかすると唯の友達かもしれない。唯は自分以外のクラスメートともそれなりにつきあいがあるように思える。唯にメールを送信する。返事は来ない。というか、お休みタイムが続行中。気づいてすらもらえない。

お礼くらいはしておこう。

クーヤは「ありがとうございます。おかげで助かりました」と、アリサにメールを送った。

90s nostalgia ?

昼休み。

クーヤは唯と二人でお弁当を広げている。

メールは送ったはずだが、唯からもアリサからも返事は無かった。

クーヤは唯にアリサのことを聞いてみることにした。

「アリサって人のこと知ってる？」

「うん。知ってるよ。有名人だもん」

唯は事も無げに言う。知っているならメールを返してくれてもいいじゃないか、とクーヤは思った。

「窓際の列の一番前の席に座っている人」

唯に言われて窓際を見ると、男子が一人。自然体に見えるようにさつぱりと切り揃えられた髪。すつと通った鼻筋。涼しげな目をしている。片手で文庫本を開いて読みふけていた。男のクーヤから見ても文句なしの美少年だった。いかにも優等生っぽい。

「ガン見しない。気づかれるよ。かつこいいから見たいのはわかる」
クーヤの顔を唯の手が押し戻した。

「クーヤは知らないだろうけど、女子の間では相互不可侵条約が結ばれてるの。自分から半径一メートル以内に入ったら、蜂の巣にされるよ。あんまり見ると色目使ったとか、なんとか言われるから」
「もしかして、文武両道だったりして」

「よくわかったね。そうなの。だから凄い人気。でも、そうか。クーヤも女の子だったんだ。全然男の子の話しないから興味ないのかと思った」

唯は全然見当違いのことを言っているが、あえてクーヤは乗ってみることにした。

「そ、そんなんじゃないって。もう、やだなあ。たださっきの時間助けてもらったから。それだけ」

「さっきの時間？ 何かあった？」

がつぷり食いついてきた唯にクーヤは軽く説明した。

「へー。そんなことが。いいなあ」

「何が良かったの？」

夢見るように呟いた唯の声に答えたのはクーヤではない。声はクーヤの後ろからした。

振り向くと、アリサその人が立っていた。

「お昼一緒にしても？」

二人が答える前にアリサは近くの席の女子に頼んで、席を貸してもらっていた。断られるとは露ほども思っていないらしい。自然過ぎて少し嫌味だ。

「ええ。どうぞ。ちょうど話をしていたんですよ。先ほどはありがとうございました」

爽やか過ぎるアリサに負けなくらい魅力的な笑顔でクーヤは彼を迎え撃つことにした。同性だからわかる。こいつは男の敵で、引いては女の敵だ。

「なんか困ってるみたいだったから。余計なことかもしれないって思ったけど、放っておけなくて」

「寝てるやつが悪いんで」

自分のことは棚に上げて、唯が横から茶々を入れる。

「自分だって寝てたくせに。どの口が言うか」

「わざわざ寝てる人を当てなくてもいいのにね。気がついて良かったよ」

爽やかな笑顔を崩さないアリサを見ると、クーヤは鳥肌が立ちそうになってきた。笑顔が引きつりそうになる。何が悲しくて男相手に愛嬌を振りまかなければならないのか。美少女の道はかくも厳しいものなのか。

「どうしたの？ 黙り込んだじゃって。いつもはもつとしゃべるのに」
唯は唯でキラーパスをガンガン蹴り込んでくる。シュートして見事ゴールを決めて見せろということなのだろうか。それはつまり、アリサを籠絡する。考えただけで気持ち悪くなってきた。

「ところで、アリサって女の子みたいな名前ですよ。由来とかあったりするんですか？」

内心はどうあれ、あくまで笑顔を保ったままでクーヤは質問を投げかけた。

「ああ、うん。好きな花の名前から取ったんだ。花言葉は……あーごめん。興味ないよね」

「そんなことないです」

クーヤは感心していた。実際クーヤは全く話題に興味が持てなかったからだ。だが、目の前の女の本性まではさすがのアリサでも抜けないらしい。クーヤが微笑みかけると、照れたような顔をする。

「私も好きですよ。プレゼントに花束って定番ですけど、もらえたら嬉しいだろうなって」

「あー。わかる、わかる」

「そうかな」

女子二人から同意を得られたアリサは嬉しそうだ。

「そうだ。花束をプレゼントするのは無理だけど、変わりにこれなんてどうかな？」

アリサは中空から何かを取り出して、机の上に置いた。

クーヤは口から心臓が飛び出しそうだった。

それはクーヤの睡眠不足の原因で、スノップから押し付けられた屈辱で、ナズナを怒らせるきっかけにもなった、あのゲームロムだったからだ。

「何だろ。何だかいわくつきの品みたい。古そうだけど……」

何も知るはずがない唯が手にとってしげしげと眺めている。

「いわくなんてあるはずないよ。おかしいと言わないで。ただのゲームロムだって」

「そうそう。それにしても良くわかったね。何十年も前の骨董品だよ、それ」

アリサの感心した口ぶりにクーヤは目が泳ぎそうになった。対照的に唯の瞳には疑念の炎がいまにも灯りそうだった。

「実は持ってたりにして。すごい偶然ですね」

下手に隠していると、余計泥沼にはまりそうだ。クーヤは観念してゲームロムを取り出した。

「え！？ どうして!？」

アリサが声を上げた。あまりにも大きな声だったので、一瞬クラス中の視線が集まった。唯も目を丸くしている。

「ごめんごめん。なんでもないから」

アリサは照れ笑いを浮かべながら、誰とはなしに弁解した。それで、あからさまな視線は散った。しかし、いったん集めてしまった興味までは逸らせなかったらしい。真綿に包まれているような居心地の悪さが残った。

「あやしいんだ。まあ良いけど。いらないうちに巻き込まれたくないし」

唯は手の中で弄んでいたゲームロムをアリサに返した。

「なんかごめんね。嬉しくてつい。また一緒にお昼してもいいかな？」

「ええ。喜んで」

逃げるようにしてアリサは席を離れた。

笑顔で見送りながらクーヤは内心ほつとしていた。糸がほつれるようにぼろが出てもおかしくはなかった。逃げ出したいのはクーヤも同じだった。

そして、クーヤは心の中でアリサを第一級危険人物に指定した。

その日の夜のこと。

空也がいつものように回転するユグドラシルを観察していると、唐突に景色が暗転した。

「だーれだ」

「ナズナ？」

半信半疑で尋ねる。声からするとナズナだろうと思うが、機嫌が良すぎるのがおかしい。空也はナズナにブロックされてから、特に何

もアクションを起こした覚えがない。楽しそうに後ろから目隠しをされるような理由は何も思い当たらなかった。

「そうでーす。ナズナでーす」

ナズナは踊るようにして空也の前に回りこんできた。

空也はナズナの姿に目を奪われた。ナズナがありえない格好をしていたからだ。いや、ありえない、ということはないのかもしれない。なぜなら、それは空也が毎日身につけている服だから。しかし、いまここでこのとき、ナズナが着ているとなると……やはり違和感が先にたってしまう。

「反応薄いなあ。初お披露目なのに」

ナズナはすねたように言うが、あくまで楽しそうだ。

ナズナが着ているのはクーヤが毎日着ている女子制服だった。飽きるほど目にしているのだから見間違うはずがない。

「ナズナ。同じ学校だった？」

「はあ？ 何言ってるの？ 意味わかんないよ」

「だって、その制服」

「今日は制服プレイの日なのです。ほらほら、空也も着替えて着替えて。あ。空也は男子と女子。どっちがいい？ 一応両方用意した」微妙に会話が噛み合っていない。もしかすると、ナズナは意図的にずらしているのかもしれない。だが、空也は流されてしまう。花のように微笑むナズナは犯罪的に可愛いのだった。ナズナの機嫌が直ったなら、それでいいか、と駄目な思考に陥ってしまった。

ナズナの右腕には男子制服、左腕には女子制服がかけられてある。

空也は男子制服を受け取り、瞬時に着替えた。

「せっかくだから女の子の姿、見せてくれたら良かったのに」

「やだよ。恥ずかしい」

「そんなことないと思うけどな」

ナズナは空を見上げて思わせぶりに呟いた。

不思議な女の子だった。女の子らしいかどうかと言えば、そうでもないような気がする。それでも、美少女を演じている自分よりは、

格段に女の子らしい気がする。ナズナを見ると、空也は自信を喪失しそうになる。

「まあいいや。座って座って。ガールズトークもしてみたいけど、いまはそれよりも」

ナズナは地面に腰を下ろして、携帯ゲーム機を取り出した。

「空也もやってるんでしょ。交換しょ」

ここにきて空也はようやく理解が追いついた。おせっかいなスノツブがナズナに報せたのだろう。手際の良さに舌を巻く。少し悔しいが、素直に感謝しておくことにした。

「スノツブによろしく言っておいてくれる？　ありがとうって」

「んー、なんのことかわからないから自分で言いなよ。そんなことより交換」

ナズナは腕を伸ばしてゲーム機を振ってみせた。空也もゲーム機を手にナズナの正面に座った。通信を開始しようとするが、うまくいかない。空也が首を傾げていると、ナズナが笑いながら首を振った。「無線通信できないの。骨董品だからね。それでコレの出番ってわけ」

ナズナはケーブルを手にして、コネクタを自分のゲーム機に差し込んだ。反対側を空也に向けて差し出す。短い。

膝を突き合わせていては届かない。空也は迷う。ナズナの隣に行けばケーブルは届くだろう。交換のため、それ以外には何もない。と、必死に自分に言い聞かせて顔を上げた。

ナズナと目が合った。ナズナは何も言わずに目を逸らした。

空也のなけなしの勇氣は早くも砕け散りそうだった。交換のため、交換のため、と念仏のように何度も心の中で唱えて、邪念を振り払おうとする。

空也はなるべくナズナから離れて、しかしケーブルがぎりぎり届く位置に座った。ケーブルはピンと張っている。

「そんなに離れてたら痛む」

ナズナはそう言って半分だけ体を寄せた。たわむケーブルに合わせて、自分の緊張も緩まれば楽になれるのに、と空也は思った。

「私もドキドキしてるんだ。初めてだから」

ナズナが交換のことを言っているのはわかっていても、肩が触れあい、耳元で囁くように言われると、全く別なことのように聞こえてしまう。

「空也はコレ出して。私があるのはコレでいい？」

画面に映し出されたファンシーな生き物をナズナの指がなぞる。空也のほうには海老を模した鍵型の生物が、ナズナのほうには蟹を模した錠型の生物がそれぞれ映っている。どうやらペアになっているらしい。

空也は一も二もなく首を縦に振った。

画面が切り替わり、ケーブルの中を固体情報が移動する。ナズナは鼻歌混じりに見送っている。交換終了を告げる音楽が鳴った。

「成功。またしようね。今度は対戦とかもいいかも」

ナズナの笑顔が眩しくてとても直視できない。

「ああ。うん。そうだね」

「ええー。なんだか私だけ盛り上がったみたい。感動薄いよ。そんな空也に問題です。97プラス84150115319はいくつでしょうか？」

「は？ もう一回言ってくれる？」

「だから、97プラス84150115319」

ナズナはそう言って、空也のゲームディスプレイを指している。97は交換した生物の図鑑番号、84150115319はナズナのゲームIDだった。

「841501154……16？」

「ぶー。はずれ。正解は9784150115319、でした」

「足してないじゃん」

「うん。まあそうなんだけどね。でも二人だけの記念の数字だから覚えててね」

ナズナが言うと、ただの数字の羅列が特別な意味を持つように思えてくるから不思議だ。しかし、十三桁もの数字はいくらなんでも覚えられそうに無い。空也がそう伝えようと口を開きかけたその時だった。

けたたましく鳴り響くアラーム音が二人の間に割り込んできた。

何の前触れもなくうるさく騒ぎ始めたアラームに驚かされて、空也は反射的にユグドラシルに目を走らせた。傾きながら不安定に回転しているが、全然倒れそうには見えない。至って平常運転。日常を続けている。

ユグドラシルに異変が無いとわかり、空也の気持ちに余裕が生まれた。注意して耳をすませてみると、どうやらアラームは近くで鳴っているようだった。

「イントルーダーアラーム、だよ」

澄まし顔をして聞きなれない単語を話すナズナに動揺の色は見られない。ケーブルを無造作にブチっと抜いて片付けを始めている。

「イントルーダーアラーム？」

空也はおうむ返しで問いかけた。

「そう。日本語で言うと、侵入警報。新しく誰か来たら鳴るように設定してあるの。空也の時の失敗を教訓に」

話しながらも、ナズナはときぱきと片付けを続けている。もはや二人で仲良くゲームに興じていた痕跡は空也の手に残った携帯ゲーム機だけになってしまった。

「しまつて。早く」

あまり強くないが有無を言わせぬナズナの口調に空也は正直とまどっていた。しかし逆らう理由も特に無いので、言われるままに従うことにした。

アラーム音が鳴り止んだ。

空間に無数のテクスチャが浮かび上がり、張り付くようにして人型を形成していく。針金色でデコボコの外観が緩やかに姿を変えていく。

高速で自己認識と他者認識が交錯し、世界の共通認識となって存在が承認される瞬間だ。

「あれ？ 空也じゃない。何してるの？ こんなところで侵入者はきょとんとした顔をしている。」

「お前こそ、なんでここに？」

空也も驚きを隠せない。

ナズナはそんな二人の顔を交互に見比べている。

「知り合い……だよね？」

おずおずと切り出したナズナに空也は黙ってうなずいた。

90s nostalgia ?

侵入者は唯だった。

空也の幼なじみで、クーヤのクラスメート。

この場において欲しくないランキング、ナンバーワン。

唯は現時点で空也に一番近く、さらにクーヤにも一番近い人間だ。それは疑いようのない事実であり、とどのつまり、空也とクーヤの秘密に感づく人間がいるとすれば、それは唯をさしおいては考えられない。

さらに間の悪いことに、空也とナズナはおそろいの制服を着ている。唯にとってもおなじみの学制服だ。

場を支配している気まずい沈黙。しかし、下手に口を開けばますます疑念が強まりそうだ。ナズナもそれを肌で感じているのか、いつものように軽口は叩かずに、空也の出方をうかがっている。

「えーと、私はクラスの友達に借りた本の続きが気になって。リンクを辿ってきたら、ここに。あ、友達って言っても女の子だよ。ちよつと変わった子なんだけど、綺麗な子だね。あの、あのね。私は説明したから。はい、空也も説明！」

沈黙に耐えかねて走り出した唯から、暴投ぎみにバトンが渡された。「こ、こちらはナズナさんです。先月、ここで偶然会って。それから仲良くしてもらってます。この制服を用意したのもナズナさんです。ナズナさんはコスプレ好きで、こんな格好をしているのはナズナさんの趣味です。全て偶然です。はい、ナズナさん。どうぞ！」バトンを落とさないことに必死で、支離滅裂なうえに丁寧語でまくしたてるように話してしまった。唯が暴投ぎみなら、空也は危険球の類だ。体にぶつけるように、バトンを投げつけた自覚があった。

「ご紹介にあずかりましたナズナです。90s nostalgiaへようこそ。この区画の水先案内人のような役目をやらせていただいています。と言っても、勝手に名乗っているだけですけど。よ

ろしく願います。唯さん」

ナズナは笑顔で軽く会釈をして右手を差し出した。見事としか言いようのない軌道修正。暴投だろうと危険球だろうと、ナズナに処理できないバトンは無いらしい。流れるように戻ってきたバトンを無^む碍^げにはできず、唯は握手に応じた。

「一つだけ訂正させていただくと、コスプレは空也が好きだからしてるんです。人のせいにするなんて、空也ってばお茶目さんですよ
ね」

ナズナはにこやかに笑いながら、平気で穏やかでないことを言う。

「……空也、空也って。呼び捨てなんだ」

「唯さんも空也って呼んでるじゃないですか」

笑顔、プラス丁寧口調でありながら、どこことなく棘がある言い方をするナズナ。

空也が「らしくないな」と思っていると、肘でわき腹をつつかれた。とにかく話をあわせると言いたいらしい。

「その……ナズナはナズナでいいって言うし、自分だけ空也さんって呼ばれるのは、なんというか……」

二人の間に立たされた空也は目に見えない圧力で押しつぶされそうだった。

どこかやりきれない顔をしている唯とは対照的に、ナズナは状況を中心に楽しんでいような気がしてならない。

「うう。だって空也と私は子供のころから一緒に。空也のことを空也って呼ぶ女の子は私だけだったんだよ」

「唯さんが知らなかったただけかもしれませんよ？ 現にいま、こ

で、私と空也は名前呼び合っているじゃないですか」

ナズナは傲然^{しょうぜん}と胸をそらし、小悪魔のように悪戯^{いたづら}っぽく笑う。

ナズナのおかげで当面の危機は乗り切れたような気がするが、新たに別の問題が持ち上がっている。なんとなくそれは空也にもわかる。なぜなら唯がぶるぶると肩を震わせているから。そして唯は爆発した。

「そんなことない！ 空也はそんなことしない！ 空也も何か言つてよ。私、この人嫌い。絶望的に気が合わない。砂糖を入れた玉子焼きが甘くなるっていうことよりも直感的にわかりやすい。水と油は混じらないの。こういう女は下手に出てたらつけ上がるの。絶対お友達になりたくないタイプ」

思いつく限りの悪罵あくばをひと通り叩きつけて、ハアハアと鼻息も荒く、悪鬼のごとき形相でナズナをにらみつける唯。十年来の付き合いの空也ですら、裸足で逃げ出したくなるというのに、ナズナは嬌然えんぜんと微笑んでいる。そればかりか、空也の腕をとって隣に寄り添い、自分の腕を絡めた。けっしてささやかではない感触に空也の鼓動は跳ね上がった。

「私たち仲良しですものねー」

拒否することも、逃げ出すこともできずに空也はうなずいた。

押しつけられた柔らかな膨らみの破壊力を目の当たりにして空也の精神は崩壊寸前だった。クーヤに変身しているときに意識しないようにするだけでも、健全な男子高校生としては多大な精神力を要する。そんな空也がナチュラル美少女のそれを意識しないでいられるはずが無かった。

「私だって空也と仲良しだもん。はーなーれーろー」

空いてあるほうの腕を取って、二人を引き離そうとする唯は涙目になっている。まるで子供のようだった。とても哀れで口にするのは憚られるが、ナズナと比べると非常にはつきりと感じられた。

「かーっ！ 傍観者を貫こうとしてたが、もう見てられん。公共の場でいちちゃついでんじゃねーっ！」

苦虫を噛み潰したような顔をした男が怒りの咆哮とともに現れた。空也は体を硬くした。ナズナと唯も同じような姿勢のまま固まっている。

「両手に華で脳内までお花畑か？ 色ボケが！ ここはお前の私有地じゃねーんだよ。若いからって、何でも許されると思ったたら大間違いだ！ 見えんところでやれ。見えんところで」

ビシッと黒スーツと白衣を着こなした無精ひげの男。その名はスノッブ。

この場にいて欲しくないランキング、貫禄の殿堂入りは伊達ではない。

「これだけ言っても離れるつもりはナシか？ ん？」

片眉を跳ね上げて舐めるようにナズナを見つめるさまは、まるで時代劇に登場する悪代官のようだ。

ナズナはぱつと空也から離れると、

「べ、別にちよつとからかったただけだから。ちんまい子犬がいてうるさかったから」

スノッブに対して弁解じみた言い訳をした。

「あの二人って、どういう関係なの？」

狼狽するナズナを見て冷静さを取り戻した唯が空也の腕を放して小声で言った。

それは空也も以前から気になっていたことだった。

ナズナに尋ねてみても、いつもばつが悪そうにはぐらかされてしまふし、スノッブに至っては端から真面目に答える気がなさそうなのだった。

今だってお互いに悪態をぶつけ合っているが、二人とも全然嫌そうには見えない。険悪な雰囲気は微塵も感じ取れないし、どちらかというと仲が良さそうに見える。

それはまるでディスプレイ越しに眺める映像。臨場感は紛れもなく本物だが、決して立ち入ることのできない壁が存在しているようだった。

「さあ？」

空也は他人事のように曖昧な返事をするしかなかった。

「そうなんだ」

唯の声はどこか安心したような響きを持っていた。

ナズナとスノッブは二人で何かやりとりをしているようだが、しばらく前から空也には二人の声が聞こえなくなっていた。どうやら二

人だけでダイレクトメッセージを交換し合っているらしい。

ナズナはたまに顔を赤らめて空也のほうをちらちらとうかがっている。身振り手振りが良く見えるだけに、嫌な想像が鎌首をもたげてくる。空也とナズナの会話はスノップに筒抜けだが、スノップはナズナと秘密の会話を交わしている。

二人きりのプライベートな会話が漏れることは基本的にはありえない。第三者が知っているとすれば、それはどちらかがログの公開を了承した場合に限られる。空也はナズナとの会話をスノップに知られたくない。だから、必然的にナズナから……つまりナズナはそれだけスノップに気を許しているということだった。

「ねえ？ 二人で抜け出さない？」

唯の声がした。唯はナズナとスノップの方を見つめたまま表情にも変化はない。

秘密の会話だった。

ナズナはスノップと二人だけの世界に没入してしまっている。

だから、たぶん気づかれることはない。自分がいなくなったところでナズナは気にも留めない。自虐的な思いに空也は囚われていた。

「エスパーマミーって漫画なんだけど……その、続きが気になってアレクサンドリア図書館の場所わかる？」

「わかるけど……」

空也は迷っていた。ナズナはスノップとの会話を切り上げるつもりはなさそうだが、それでも空也はこの場に留まりたいと考えてしまっていた。

「いいじゃん。二人は二人で仲良くやるって。そんなつらそうな顔してるの、これ以上見たくない」

唯は空也の手を取って歩き始めた。後ろ髪を引かれる思いはしたが、離れていく空也を止める声はかからない。ナズナと一瞬目が合ったから、気づいていないはずは無いと思う。

「そんな引つ張るなよ。わかったから」

空也はいらだちを隠せない。唯の手を振り払ってしまう。これでは

八つ当たりだ。自己嫌悪に陥る。だが、唯は驚いた様子も見せずに微笑んでいる。

「……悪い」

「ん。何のこと？ 案内してくれるんだよね？ 違うの？」

勘の良い幼なじみのことだ。きつと半分くらいは空也の気持ちに気がついている。その上でとぼけたふりをしてきている。空也は唯の手を取り直した。

「そうだよ」

悪戯っぽく笑い走り始める。急に引つ張られた唯は声をあげた。

「何だよー。変だよー。待って！ 待ってっばっ！」

視界から消えるまで結局一度たりとも引き止められることはなかった。けれども、空也は気にしないことに決めた。

お人よしの幼なじみの期待に応えることがいまの空也にできることで、やるべきことだった。

90s nostalgia ?

「おーっ！ 青春、青春！」

空也と唯が消えた先をスノップは手をかざして見送った。

「感じわっる」

ナズナは地面をつま先で蹴った。砂ばかりが舞い上がる。傍目はためからでもへそを曲げているのは明らかだろうが、スノップに対して隠すこともないと思う。

「行きたいんなら行きなよ。いつも言ってるだろ？ ナズナの好きにしていって。自分から残るって言ったくせに」

スノップはへらへらとしまりの無い顔をして笑っている。

空也も空也だ。止めなかったからといって、黙って行くのは無い。行つて欲しくなかったから、目で合図を送っていたのだ。それくらい察して欲しい。

「まさか本気で好きなの？ やめときなつて。ありや、ろくでもないガキだぜ。ギブ&テイク。空也には夢を見させてあげて、僕は夢を叶える。そういう話。ミイラになつた美人局つもたせなんてお笑い草にもなりやしないよ？」

「ミイラ取りがミイラになるって言いたいの？ 感じわっる」

空也のことよりも自分には優先すべき目的がある。最初から仲良くなるつもりは無かった。あくまでビジネスライクな関係を貫き通すつもりだ。頭ではわかつている。それなのに、何故かいらいらがつのる自分の心が、ナズナには全く理解不能だった。

「にらむなつて。折角美人なんだしさ」

背後に回ったスノップの腕が肩越しに伸びてきて、ナズナの体を優しく抱きすくめた。少しだけくたびれた男の人の匂いがする。嗅ぎ慣れた匂いだつた。

「ねえ。やたら引つつくのやめてくれない？ 私、もう子供じゃないよ？」

「わかつてる。わかつてる」

口ではそう言うが、スノツプは離れるつもりはないようだ。ざらざらとした無精ひげが頬に刺さりチクチクとむずがゆい。

「もう。わかつてないでしょ」

「わかつてるよー。いい匂いがするし、女らしくなってる」

「うわっ。セクハラ。おっさん化激しいよ、最近」

スノツプは苦い顔をした。太りやすくなったと嘆いていたのを思い出した。少し傷つけてしまったようだ。

物心がつく前から溺愛されてきたから知っている。スノツプはナズナが本気で嫌がることは絶対にしない。三つ子の魂百まで、とはよく言ったもので、いまさら嫌いになんてなれなかった。

「お兄ちゃんと結婚するー、て懷いてくれてた時が懐かしい。悲しいよ、おじさんは」

よよよとしなを作って泣き真似をするスノツプは、やはり鬱陶しいかもしれないとナズナは思い直した。

「いつの話よ、それ。時効よ、時効。いつまでも引きずってんな」

ナズナがスノツプの腕を振り解いて抜け出すと、スノツプは微妙に寂しそうな表情を浮かべた。一回りも年が離れているのに、そうとは思えないほどたまに幼い顔を見せる。ナズナはなんだか楽しくなつてきて、スノツプの胸に飛び込んだ。

「もう少しだけ、スノツプだけのお姫様でいてあげるからね」

腰の後ろに手を回し微笑みかけると、スノツプは決まりが悪そうに頭をかいた。

「そんなこと言わずにずっと側にいてくれよ。あれはやめとけ。あの場面で女と二人で行っちまうようなやつにナズナは任せられんよ。わりとマジで」

「だからなんでそこで空也が出てくるのよ。怒るよ。わりとマジで」
ナズナがジトつとにらむと、スノツプは笑いながらナズナの頭をぽんぽんと撫でた。丸きり子ども扱いされているが、ナズナは気持ちよく甘えさせてもらうことにした。

「それにしても……ナズナ、もしかして少し太った？」

「太ってないよ。なんで？」

「あー……太ってないのか。そうか。おかしいと言った。忘れてくれ」

スノップは目を逸らしてなんとなく調子が悪そうな感じた。

「何か隠してるでしょ？ 隠し事は無しにして」

ナズナは笑いながらスノップの体を引き寄せて逃げられないようにする。

「ちょ。ばか。ナズナ。そんなにしたら」

「何焦ってるの？ うりうりー」

慌てふためくスノップの反応が予想外に面白くて、ナズナは体を摺り寄せた。その結果、ナズナは気づかされてしまった。スノップが隠していた秘密に。正直後悔した。言葉が見つからない。顔が火照ってくる。

「だから言ったのに。引っ付きすぎだ、ばか。ナズナのことはそういう目で見えてないつもりだけど、俺も男だからな」

「ご、ごめん。私そんなつもりじゃ。でも、そんな。これって。そういうことなの？ そんな。だって私だよ。お風呂だって一緒に入ったことあるし。これって私のせい？ 平気！ 平気だから！ 悪いのは私だし」

「あー。もういいから。とりあえず離れて。ずっとこのままだとツライ」

スノップにたしなめられて、ナズナは少しか我を取り戻した。スノップの言うとおりだ。恥ずかしいのはむしろスノップのほうだ。スノップから距離を取って深呼吸する。

注目してはいけないと思っていてもありありと主張するその存在感はとも無視できない。視線が誘導される。男の人は興奮するとそうなるとは知っていたけれど……スノップに何と言って声をかければいいのか。ナズナにはわからなかった。

「あんま気にすんな。俺もナズナ相手にこんななんとは思ってな

かったから。これから気をつけような。お互いに。それで、この話はおしまいにして、これまで通りにやってくれとありがたい」

ナズナはぶんぶん頭を振ってうなずいた。

しかし、当分忘れることはできそうになかった。

アレクサンドリア図書館。

その象牙色の列柱の壮麗さに魅せられ立ち尽くすものは後を経たなかったらしい。古代ギリシア時代のドーリア建築様式を想起させると言われているが、詳しいことは空也にはわからない。スノップに言わせると色々間違っているらしいが、それで建物の美しさそのものが損なわれるわけでも無いので、空也は気にならなかった。

「パルテノン神殿？」

最もありきたりな感想を口にする唯だった。しかし、初めて訪れた時の空也の感想はもっとひどいものだったので、とても馬鹿にはできない。宇宙を感じる、と電波なことを言ってしまった。それもスノップの前で。スノップの反応は推して知るべし。思い出したくも無かった。

館内は空調が行き届いていて、すこぶる快適な環境が保たれている。空也の背丈よりもはるかに大きな書架が並んでいるが、それらをひとまず無視して、奥のエレベーターから地下に潜る。

膨大な書籍、映像、音楽、ゲーム。

それらは参照回数を元にしてソートされている。つまり、人気のあるものが自動的に上層に配置される仕組みだ。ただし、年齢制限のあるものは下層に配置される。十八禁仕様のものは地下十八階から気になりながらも空也は未だ足を踏み入れたことがない。

地下七階に着いた。エスパーマミーの二巻を本棚から抜き出す。一度ブックマークしてしまえば、あとはわざわざ足を運ばなくても借りることができる。

空也から本を受け取った唯はぱらぱらと数ページめくると、すぐにそれを閉じた。

「さて、と。空也に聞いてみたいことがあったの。実は」

「なんだよ。改まって。もしかしてナズナのこと？ それともまさかスノップ？」

空也が思いつく限りはそれくらいしかないのだが、唯は静かに首を振った。

「空也はこの本読んだことあるんだよね？」

「ああ。うん。いや……どうだったかな。内容までは覚えてないかも……」

不穏な空気を感じた空也は曖昧に言葉を濁した。閲覧履歴には空也の名前が残っているはずだ。見ればわかる。そんなことをわざわざ尋ねる唯の真意を量りかねていた。

「クラスの友達から借りたって言ったよね。でも、それにしても変なの。エスパーマミーの閲覧履歴に残っているのは三人の名前だけ全部は見えてないんだけどね。過去三ヶ月間の記録にはそれだけだった。誰の名前があったと思う？」

空也は咄嗟に答えられない。空也とナズナとスノップの名前が記録されている。それは知っている。しかし、答えるべきか否かの判断がつかない。唯の疑惑は晴れていなかった。そして、その種は芽吹き、すすくと成長していた。

空也とクーヤが繋がる。

それだけは何としても阻止しなければならぬ。

「空也とナズナとスノップ、だよ。これって変だよ。単純に考えて一人足りないよね。私に貸してくれた友達の名前が無いの。どうしてかな？」

唯の中ですでに結論は出ているのかもしれない。最後の確認作業を行っている。そんな感じに思える。空也は類似の場面を見たことがあった。エスパーマミーに追い詰められた犯人。その心境がこれほどまでに胸に迫って感じられるとは。空也は自白させられ、白目を向いたゾンビとして復活する。現実と空想が絶妙に混ざり合う。打ち切りを回避しなければ！

「記録を残さないようにすることもできるんだよ。他人に知られたくない趣味もあるよね。たぶん、そのせいじゃないかな?」

嘘はついていない。やろうと思えばできるのだ。エスパーマミーに年齢制限はついていないが、暴力シーンやグロテスクな表現が含まれているので、それなりに説得力のある答えだった。

「ふーん。そう。空也がそう言うなら、そういうことにしておこっか」

笑う唯の目は全く納得しているようには見えない。

空也も誤魔化しきれたとは思っていない。

「今度、学校でクーヤに会ったらおんなじこと聞くから。それまでに騙されてもいいなって思える答えを用意しておいてね。矛盾があったら突いちゃうから」

「俺にそれを言っても仕方ないんじゃないかなあ。貸してくれた友達に言わないと」

空也は慎重に言葉を選んだ。うかつな返事をしようものなら、自分でクーヤその人だと認めたことになりそうだった。

「そうだよな。あはは。わたし何言ってるんだろ」

「ははは。唯はお茶目さんだなあ」

白々しい笑い声の二重奏が館内に響き渡った。

90s nostalgia ?

美少女の浸透と拡散。

初めは楽しいだけで良かった。

物珍しさも手伝って、全てが良い方向に回っていた。

しかし、人々の間に美少女が浸透していくにつれて、ある種の根源的な疑問が沸きあがった。

美少女とは何であるか？ またそれに付随する萌えとは？

美少女を世界に敷衍ふえんするにあたり、突き当たったその形而上学的な難問。

それは偶像である。

それはアイコンである。

それは幸福の形である。

それは願望充足である。

それは紳士淑女の嗜みである。

それは空想の産物である。

それは神であり、天使であり、悪魔であり、妖精であり、靈魂であり、ホムンクルスであり、異性愛であり、同性愛であり、隣人愛であり、少女性愛であり、揺り籠から墓場までつきまとうものであり、喜びであり、怒りであり、哀しみであり、楽しみであり、知性であり、愚かさでもあった。

連日連夜、喧々諤々けんけんがくがくと議論は盛り上がりを見せた。

しかし、それだけだった。

人々は疲れていた。答えの見つからない問題に、それとは裏腹に世界中に拡散していく美少女に。

そして、崩壊が始まった。

Ⅰ、ジニアの日誌より

ドクタ

いつものように昼食を求めて購買部へ向かうクーヤを呼び止めたのは、全身で優等生を体現しているかのような男だった。背景に華麗な百合の花束が見えるのは、もちろんクーヤの錯覚だが、それを見せつけられているのはクーヤだけではないようだ。通行人が霧の彼方に霞んでいく強烈な存在感。太陽に近づきすぎたものは絶命する。クーヤはイカロスにはなりたくないが、さりとて名前を呼ばれて無視するわけにもいかない。

「授業が終わったとたん、教室から出て行くから慌てて追いかけてきたんだ。これからお昼？」

「ええ。購買部でパンでも買ってこようかと」

クーヤが営業スマイル全開で答えると、男は嬉しそうに笑う。その爽やかな笑みの向こう側には大蛇が潜んでいてもおかしくない。なにしろ第一級危険人物だ。アリサとはなるべく関わり合いにならないほうが良いと、クーヤの勘が告げている。

「もし良かったらさ。お昼一緒に食べない？ お弁当作ってきたんだ」

さっと取り出された包みは運動会で目にするような大きさだ。中身は重箱で、色とりどりのおかずが詰められていることまで想像できる。購買部のもつさりしたパンと重箱弁当をうっかり秤にかけてしまったのは痛恨のミスだった。アリサが作ったのなら、そつなく美味いものが出てくるような気がする。購買部に罪は無いが、後ろ髪も引かれない。

「ええー。そんな悪いですよ」

口では否定しつつも、クーヤの足はもはや購買部には向いていない。「一人では食べきれないしさ。遠慮しないで」

謙遜は美德だが、何事も過ぎたるは及ばざるがごとしだ。クーヤはお呼ばれすることに決めた。アリサの三步後ろに位置取りをする。古文書に載っていた。男を籠絡するための四十八手。自衛のつもり

で読破したが、まさか実行に移すときがこようとは。

「あれ？ どうしてそんな後ろを歩いてるの？」

素で突っ込まれた。クーヤとしては笑うしかない。インチキ本だったらしい。気を取り直してアリサの隣を歩くことにする。

「良妻プレイです。気にしないでください」

「そう。なんだかよくわからないけど、楽しそうだね」

楽しそうなのはお前だろ、とクーヤは突っ込みを入れそうになる。見た目に騙された男の哀れな末路を想像してクーヤは同情した。

しかし、クーヤはそこではたと気づいた。

たぶん、おそらく、まだ確信は持てないが、アリサはクーヤのことを。

自慢にはならないが、クーヤは男受けする容姿をしている。

男の気持ちなら手に取るようにわかる。なにしろ同性だ。それゆえに良心の呵責に苛まれた。食欲に任せて安請け合いをしてしまったような気がした。

後ろめたさに後押しされた部分が無かったとは言えない。しかし、アリサの願いをできるだけ叶えてやりたい。それもクーヤの嘘偽りの無い本心だった。

「折角だから、屋上に行きましょう」

クーヤはアリサの手を取った。

少し戸惑ったような、それでいて嬉しそうなアリサの顔がなぜか強く印象に残った。

クーヤは深く考えないようにした。しかし、もう一度アリサの顔をのぞき見る勇氣は持てなかった。

ちなみに包みの中身は予想通り重箱弁当だった。和洋折衷のおかずはどれも絶品だった。

何だか申し訳ない気持ちになったクーヤだった。

「ねー。クーヤ。噂になってるよ。二人でお弁当広げてたって」

放課後の教室には西日が差し込んでいるが、まばらに人が残ってい

る。反論しようとクーヤが口を開こうとしたら、ポツキーを突っ込まれた。

「あー。しゃべるのはあまりオススメできないかなあ。噂はしょせん噂。けれど本人が話すことは噂じゃないからねえ。おんなじこと聞くって言ったけど、聞けなくなっちゃったじゃない。隠れて何かやってるのは別にいんだけどね。迂闊すぎるよ。そんなんじゃ、第二、第三の探偵さんが現れて、今に収拾つかなくなるよ。ゾンビにはなりたくないでしょ？」

唯はポツキーをクーヤの口にぐいぐいと押し込んでくる。

「クーヤがどうしたいのか全然わかんない。私、忠告したよね？」

相互不可侵条約の話。女子の間では暗黙の了解事項なの。クーヤも女子、だよな？」

あからさまに昼食時のことを話題にしているのに、アリサの名前は一度も出さない。

クーヤは素直に感心していた。唯の口ぶりだと、噂は大分広がって一人歩きを始めていそうだ。ポツキーと一緒にある程度の事情も飲み込めた。

「その点は大丈夫。私、全然その気ないから」

何しろ相手は男だ。色恋沙汰に発展する可能性は万に一つも無い。

「その気も無いのに相手してるの？ 周りからどういう目で見られるか、気づいてないでしょ？ 面倒くさいことになるよ。絶対」

「ただの友達だよ？」

「相手はそうは思ってくれないってこと」

唯は首を横に振ってため息をついた。机に手について立ち上がる。

「トイレいこっか？」

有無を言わせぬ唯の迫力にクーヤはうなずくしかなかった。

個室に押し込められた。

言うまでもなく女子トイレの個室だ。唯が後ろ手で鍵をかけるのが見えた。即席の密室空間。逃げ場はない。

「可愛い女の子はね。それだけで標的になるんだよ。そこんどこわかってる？」

唯の人差し指がクーヤの顎を下から持ち上げる。

「わかってるって」

責められる理由が理由だけにクーヤは強く出られない。クーヤにだつてアリサを騙しているという罪悪感はある。だが、クーヤにはクーヤの言い分がある。それを説明できないのがもどかしい。

「わかってないよ。相手が誰のことを指しているか、言ってみて」

「……アリサ」

唯の質問の意味がわからない。噂になるような行動はアリサとしかとっていない。噂は唯の耳にも入っているはずだ。わざわざ確認するようなことなのだろうか。

「だからわかってないって言ったの。違うよ。面倒なのはアリサじゃない」

唯はそこで言葉を切つてクーヤに密着すると耳元で囁いた。

「面倒なのはほかの女子、だよ。このままだと嫌がらせされるよ」

「い、嫌がらせ？」

答える代わりに唯の手が伸びてきた。未知の感覚がクーヤを襲う。

「そ。嫌がらせ」

唯は微笑みながらクーヤの胸を揉む。

クーヤは驚きと不安がない交ぜになつて声が出ない。体をよじらせて逃げようとするが、壁に押しつけられていているうえに、唯にびつたりと張りつかれて思うように動けない。

「私だつてクーヤには悪戯したくなるもん」

熱い吐息を絡ませながら、唯の右手はクーヤの敏感なところを探り出そうと蠢いている。その手に合わせて複雑に形状を変える自分の胸の膨らみを眺めていると、クーヤは倒錯的な感情に支配されそうになる。

「ん……やあ、やめっ」

「やめないよ。そんなかわいい声出されてやめられると思う？　ね、

服脱がすね」

クーヤの返事をまたずにブラウスのボタンに指がかかった。唯の腕をつかんで振りほどこうとするが、思ったよりも力が入らない。簡単に組み敷かれてしまう。

もがくうちにボタンは次々とはずされていく。純白のブラジャーに包まれた豊かな胸が外気に触れてヒヤッとする。

「だ……ダメだって」

「うん。ダメだね。でもやめない」

唯の中指と人差し指が下着の上から器用にクーヤの胸の突起を挟み込んだ。

「んんんっ！ やあ」

声にならない悲鳴が喉から漏れた。その大きさに愕然としてクーヤは片手で口を塞ぐ。そのせいで下半身の防備がおろそかになったのを見逃さず、唯の左手がスカートの中に忍び込んできた。クーヤは両手で押しとどめる。

「やだ。やめよ。ユイ。ねえ。やめてよ」

「クーヤのこと気になっている子だっていると思うよ。こういうことしたいって」

首筋に吸いつかれた。そのまま鎖骨の上のくぼみにかけてゆっくりと唇で愛撫される。

クーヤは恥ずかしさと混乱でぐちゃぐちゃだった。

昼食後に飲んだ薬の効果が持続しているせいなのか、体が元に戻る予兆は感じられない。しかし、唯に触れられるたびに予期しない反応を返す自分の肉体がクーヤは恐ろしくなってきた。クーヤの、つまり女の子の人格が顕在化して、肉体まで支配し始めているかのようだった。

「ねえ。おっぱいやわらかいね。自分でしたことある？」

「そ、そんなのあるわけない」

唯は下着の中に指を滑り込ませて、クーヤの胸を直接触り始めた。足に力が入らず生まれたての小鹿のように震えてしまう。そしてつ

いにスカートの中への侵入を許した。

「もうやだよ。やめてよ。どうしてこんなことするの？」

必死に搾り出した声はかすれていた。

「私ね。クーヤ見てて思ったの。たぶんどっちでもいいんだって」

「どっち、うんっ。でもいいって」

内ももを撫でられてこそばゆい。肉体の変化をかつてないほど意識させられているのに、体は全然戻ってくれない。それよりもクーヤは下腹にたまり始めたもどかしさのほうに気になり始めていた。身を委ねてしまいたくなる甘い誘惑。

「女の子が相手でもいいかなって。そういうこと」

唯の手がクーヤの秘密に触れる。クーヤの感覚ではそこには何も無いはずだったが、口からは艶を帯びた熱いものがひとりでに漏れ出した。

クーヤは恐ろしくなっただけを突き飛ばした。だが、唯は体を捻って衝撃をずらし、ぞっとするほど妖しく微笑む。

「ね。ホントやめて。女の子同士でそういうことする気になれないから。唯の気持ちは尊重するし、唯が女の子を好きでもかまわないけど、私は応えられないの。これ以上すると強姦だよ。唯のこと嫌いになりたくない」

クーヤは意を決してかなり強く出たつもりだったが、実際に出すことができたのは蚊の鳴くような声だった。きつと目尻に涙もたまっている。悲しさで悔しさでいっぱいだった。

唯はクーヤのパンツに指をかけたままでその反応を楽しんでいるかのように笑っていたが

「うん。やめるね」

と、それまでの言動が嘘のようにあっさりとクーヤの体を解放した。「ふえ？」

塞き止めていた涙が安心を上乗せされたせいで少し漏れた。止めようと思っても止められない。

「あー。もう。泣かない。泣かない。よしよし。いい子いい子」

自分より頭半分小さな唯に抱きしめられて撫でられてしまう。

身の危険は去ったようだが、クーヤの混乱はますます混濁の度合いを深めていく。

「自重しないと。いじめられるよ？ 女の敵は女って聞いたことくらいあるでしょ？ 確かめたらちゃんと女の子の体だし。どうなってるの？ いい加減教えてよ」

クーヤは事態の急変についていけず、話すべき内容も思いつかず、けれども一つだけ確かなことに思い当たった。

「だ、だましたな」

「それはお互い様、だよな？ クーヤは騙されやすいんだから気を付けなよ」

唯は話しながらも、テキパキとクーヤの乱れた衣服を直していく。

「誰が敵で誰が味方かくらいいは見極めないと。なんかキナ臭いよ、あの二人」

「ナズナとスノッブのこと？ まさか」

「それにアリサも、かな。アリサはまだわからないけど要注意。ところでクーヤは隠す気あるの？ それならそれで私も知らないふりを続けるつもり。別に大した問題じゃないからね。それは。ちなみに私はいつでもクーヤの味方だよ」

最悪の出会いを果たした唯がナズナとスノッブの二人に悪感情を持つのはうなずける。しかしアリサとなると話は別だ。唯とアリサには接点が無いように思える。幼なじみの深く落ち着いた瞳にはいったい何が映っているのだろうか。

「一次ソースに当たってみるまでは信じたくなかったけど。こりや時間の問題かな」

困ったように呟いた唯の横顔から推察すると、事態はクーヤの思っているよりもずっと深刻なのかもしれない。

「ところで、どうやったらおっぱいって大きくなるの？」

とぼけたことを言いながら、唯は自分の薄い胸を両手で押さえている。確かに起伏の乏しい体をしている。

「なんか失礼なこと考えてない？ クーヤは顔に出すぎだよ」

「……ユイは勘が良すぎ、だよ」

意味ありげに相好を崩した唯を見て、クーヤは嘆息するしかなかった。

90s nostalgia ?

そして悪い予感というのは得てして当たるものである。

「クーヤという不屈き者がいるというのはこのクラスで間違いありませんこと！」

教室の扉の許容速度。その限界を見た気がした。

ふんぞり返って仁王立ちしている少女が探しているのは、ばつちり名前を呼ばれていることからまず自分しかないと思うのだが、クーヤは絶対に名乗り出たくなかった。

凍てつくような青い瞳が教室の中を睥睨^{へいげい}している。目の覚めるような鮮やかな金髪。日本人離れた容姿は圧倒的な質感をたたえていて、全くもってミスキャスト。全身から主役のオーラを発散している。お近づきになるのも恐れ多い。平穏とは無縁、生まれながらのトラブルメーカー。それが爆弾を抱えてやってきたようなものだった。

不幸なクラスメートが、そばにいたという理由だけで捕まえられたクーヤは祈る。安寧^{あんねい}を。決して自分の名前を告げてくれるな、と。だがそれは期待するだけ無駄だった。問い合わせ先の顔色を見れば一目瞭然。いかにも簡単に白状してしまいそうだった。クーヤの念波よりも少女の眼光のほうがはるかに強い。

「アリサ公認ファンクラブ、会員ナンバー一番のミズハナさんだね。害虫駆除には情け容赦ないらしいよ。困ったね。逃げていい？」

小声で教えてくれるとともに薄情なことを口にした唯にクーヤは力なく首を横に振った。面倒くさそうなため息が聞こえたが、彼女は席を立つようなことはしなかった。

つつがなく情報を仕入れ終えたらしいミズハナが一步一步ゆっくりと近づいてくる。

その迫力に押されるようにして人が避けていく。ミズハナからクーヤまで伸びる見事な導線ができた。クーヤは振り返ってみた。

当然ながら誰もいない。

クーヤの席の正面でミズハナは立ち止まった。

傲然^{ごうぜん}と見下ろされているというのに、反抗しようという気力すらわかない。

絶対的強者の威厳というものがあるとするならば、いま感じているものがまさにそれだった。

「クーヤというのはあなたですね」

ミズハナは片手を腰に当てて、優雅とさえ思える仕草で人差し指を突き立てた。

しかし指されたのはクーヤでは無かった。まっすぐ指を向けられているのは唯だった。

「いいえ。違います」

指された唯は笑顔で冷静に即答した。

ミズハナは固まっている。

腰に当てた腕の角度、相対する体、わずかにそらした顎、蔑みに満ちた目つき、唇の動き、声の抑揚、全てが調和し、計算されつくしていた。誰が見ても完璧だった。最後の最後、それ以外は。

クラスのそこかしこから押し殺した笑い声が漏れる。

ミズハナは一度目を閉じて、そのあと、先ほどと全く同じ動きを繰り返した。

「クーヤというのはあなたですね！」

若干声が裏返っていて、顔が赤くなっているところ以外は完璧だった。

笑い声の発生源が増えたような気がする。

「……そうですね、あなた誰ですか？」

「下賤^{げせん}なやからに名乗る名など持ち合わせていませんわ。と言いたところですが、あえて名乗りましょう。ミズハナ、と申します。

以後、お見知りおきを」

大恥をかいたにも関わらず、ミズハナは威風堂々。芝居がかった仕草を何事も無かったかのように続行する。

相手にしたくないと考えていたクーヤだったが、意外と心配することなさそうだと思い直した。

「それで高貴なミズハナさんがいったいどのようなご用件でしょうか？」

「それはご自分の胸に聞いてみるのがよろしくてよ。思い当たる節がおりでしょう」

「それが全くございません。なにしろミズハナさんにお会いしたのはいまが初めてなのですよ。あろうはずがないではありませんか」
ミズハナの調子に合わせて、クーヤも声の調子を変えてみた。ミズハナの眉毛はぴくぴく、鼻はひくひく動いている。わかりやすい人だった。

「なんという恥知らずな人なのでしょう！ あなたのような人がいては、風紀の乱れの元になります。調べはついているのですよっ！

衆人環視の前で罪状を読み上げられたのですか！ 懺悔さんげする機会を与えようという恩情を踏みにじられて、私は大変心苦しく思っています。本当に心当たりがないとおっしゃるおつもりですか！」

「ミズハナさんがいらっしゃった時点でアレだよ」

ミズハナに怒りに満ちた眼差しを向けられて、唯は肩をすくめて見せた。

「ご友人も認めておられるではありませんか。言い逃れはできませんことよ」

しかし、ミズハナに意に介した様子は無い。逆に落ち着いたようだ。自身の正当性に自信が持てたらしい。

「ご飯食べたことですか？ もしかして」

「その通りです。どのような申し開きをしようと許すつもりはありませんが、一応聞いてあげないこともないですわ」

「えーと。そうですね。ミズハナさんがお弁当作って誘えばホイホイついてくると思いますよ」

ミズハナの顔色が朱色に染まる。

「そ、そういうことを言っているわけではありませんわ。何を言いだ

すんですか。まったく。これだから下賤げせんのものは」

ミズハナはうつむいてもじもじし始めた。

あと一押しで退けられそうだ。そう思っていたクーヤだったが

「おじようさまー。おじようさまー。ミズハナおじようさまー。どこですかー」

廊下から聞こえてきた声が予想外すぎて、頭の中で組み立てていた台詞がガラガラと音を立てて瓦解した。

息せき切って現れたのはメイドだった。学生服を着ているのだが、雰囲気はまさにメイドなのだった。メイドが服を着て歩いていると、あんな感じになるのではないか、と思わせる何かがその少女にはあった。

「ああ。ここにいらつしゃったのですね。また一般人に迷惑をかけて。ダメですよ。ミズハナさまに触れていいのは私だけなんですから」

忙しく現れたメイドはそのままの勢いでミズハナの腕を取って引きずっていく。

「このメイド！ 離しなさい！ 私は大事な話をしているのです。聞いているのですか？ デメイド！」

「ええ。ええ。聞いておりますとも」

メイドと呼ばれた少女は罵られながらも嬉しそうにミズハナを運んでいく。そのまま来た道を誰に遮られることも無く、ミズハナはフェードアウトしていく。

「下々のみなさま。お騒がせいたしました。ミズハナお嬢様とメイドはこれにて失礼いたします」

自らメイドと名乗った少女は敷居のところで一礼した。そしてそのままミズハナを連れて姿を消した。

「はーなーすーのーですー」

ミズハナの悲しげな叫び声が教室のクーヤのところまで届いた。ドップラー効果のおかげで確実に遠ざかっていることが知れた。

「なんていうか……凄く濃い人たち」

「……クーヤがそれを言うんだ」

「え？ え？ 変なこと、言ったかな？」

唯はうるんそうな目をしてミズハナたちの消えた先を、そしてクーヤを見つめていたが

「うっん。ぜんぜん！ 私もクーヤとおんなじ意見だよ」

と、にこやかに言い放った。

「それで、アリサさんはミズハナさんのことをどう思ってるんですか？」

重箱并当に箸を伸ばしつつ、クーヤはアリサ本人に直撃してみることにした。

「そういうことを聞くのはどうかと思いますよ、わたしは」

同じく箸を伸ばしている唯が答える。旗色が悪いと見てクーヤは唯を巻き込むことにしたのだが、彼女を連れてきてもアリサは特に何も言わなかった。

「特別な感情はないかなあ。よく知らない人だしね。学年も違うし、涼しい顔をしてアリサは何気に酷いことを言う。」

空は快晴。校庭の桜は花を散らし、青々とした新緑が風にさざめいている。心地良い陽気に誘われるようにして、クーヤの箸はドンドン進む。アリサの料理の腕前はなかなかのものだった。最初は乗り気でなかった唯も、なし崩し的に連日クーヤとともに屋上に足を運んでいた。

「面白い人だとは思うよ。魅力的なんじゃない？ ミズハナさんのことが好きな人の話もちらはら聞くし」

「そうですか」

クーヤが相槌を打つと、アリサは何か言いたそうな顔をしてクーヤの顔をちらちらとうかがっている。クーヤとしては、何を言うわけにもいかずに助けを求めて視線を流した。唯の目は明らかにあきれていた。

「……まあたまには私も直球投げてみますか。あんまり得意じゃな

いんですけど。そういうキャラでもないんだけどなあ」

唯はぼやくと、たっぷり一呼吸置いた。

「アリサさんはクーヤのことが好きなんですか？」

アリサ沈黙。

クーヤも沈黙。

唯は一人でお茶を啜っている。

「そ、それを聞くのはどうかと思うよ」

「クーヤの真似をしてみただけだよ」

硬直からやつとの思いで立ち直ったクーヤだったが、二の句が告げられなかった。針のむしろに座らされているようだった。

「クーヤはデリカシー無さ過ぎ。相手の気持ち考えて無さ過ぎだよ。イヤでしょ。そういうこと聞かれたら。自分のいないところだったら、なおさらだと思うけど」

唯は痛いところをズバズバと的確についてくる。

「……僕は好きだな」

黙って話を聞いていたアリサがぼそつと呟いた。

「は？」

「あ、いや。クーヤが好きとかじゃないよ！ それは全然違うから！」

二人分の視線を一身に浴びてあわてて訂正を入れるアリサ。

恥ずかしいやつだった。穴があったら埋めてやりたい。そして臭いものには蓋をするのだ。平穏な女子高生ライフを満喫するためにアリサには犠牲になってもらう。それがクーヤの望みだった。

「自分のことを密かに好きになってくれてる人がいたら、それは嬉しいなって。そういうことだから。別の意味はないから！」

アリサのせいでクーヤまで恥ずかしくなってきた。

唯は地雷を設置するだけ設置して、あとは知らないふりをしている。クーヤが恨みがましく見てもどここふく風だ。

気まずい空気に耐えられなくなってきたクーヤは屋上の出口に目をやった。すると天の助けのように扉が一人でに押し開かれた。やけ

に荒々しく乱暴だったのは、この際気にしないことにした。妙な空気を打ち破ってくれるなら誰でもよかった。

扉の奥から現れた少女は制服をはためかせて凛々しい姿を衆目に晒している。一度目にすれば忘れたくても忘れられない。クーヤは厳しい現実を直視できなかった。話題のミスハナその人だった。

ミスハナはつかつかと大股で歩み寄ってきて、ビシッとクーヤに人差し指を突きつけると

「勝負ですわ！」

と開口一番、意味不明なことを口走った。

ぱかんとしている一同を無視して、ミスハナは屋上の外縁まで進み、両腕を組んで胸を張った。ミスハナの背後に巨大スクリーンが出現する。

「あ、放送されてるみたいだよ。これ」

唯の手元に浮かぶミニスクリーンには、ミスハナを正面からとらえた映像が流れていた。

「全校生徒のみなさま！」

巨大スクリーンにはミスハナの勇姿が大写しになっている。

「生徒会名誉会長のミスハナです。本日はお知らせしたいことがあつて参りました。賢明なる皆さまにおかれましては、すでにお気づきになっておられる方もいらっしゃるものと存じます」

スクリーン上では右から左へ次から次へと文章が流れていく。

「お知らせして何だ？」「会長じゃなくて名誉会長w」「この人だれ？」「情弱おつ」「生徒会名誉会長のミスハナさんだつて」「だから誰だよ」「情弱乙」「うぜえw」「ミスハナさんなめんなよ」「またお前かwww」などなど。誰でも自由に書き込みできるようだ。

クーヤは頭が痛くなってきた。

「この四月、私がとあるクラブを立ち上げたのは衆知の事実だと思います。美しきものは共有すべき財産である。そのシンプルで素晴らしい理念に共感してくださった皆さまのおかげもあって、創部以

来、門戸を叩くものはあとを絶ちません。応援のお便りも多数いただいております。全てが順風満帆。私は皆さまの良心を信頼し、また皆さまはそれによく応えてくださいました。立ちほだかる障害などあるはずありません」

ミズハナはそこでいったん演説を止めて、クーヤたちに向かって視線を飛ばした。ミズハナの視線に追従するようにスクリーンの映像も流れていく。お弁当を囲む三人の姿が容赦なくスクリーンに映し出されたが、映像はすぐにミズハナの姿に切り替わった。

「しかし美的感覚。それは個人の主観によるものです。そこで私は考えました。誰にでも明快にわかりうる基準を設けることを。私はここに宣言します。第一回、美人コンテストの開催を！」

校内のあちこちから歓声が響いた。

クーヤは「私怨おつ」とこっさり書き込んだ。しかし、クーヤの叫びは画面を埋め尽くさんばかりの文字の奔流に吞まれて儚く消えてしまふのだった。

ダークブラウンの湖面に白い渦が広がっていくのを眺めながら、空也はため息をついた。

「なんだか大変そうだね」

「そうなんだよ」

空也とナズナは恒例のお茶会を開いていた。服装は前回と同じく学校の制服だ。続きとやり直しをナズナが強硬に主張したからだ。ナズナには何か譲れないこだわりがあるらしい。空也は不思議に思ったが、反対する理由も無かった。

「それで、出場するんだよね？ コンテスト」

確認するように聞かれて空也は返事に迷った。

ナズナの中ではクーヤが出場することは決定事項のようだが、空也に出るつもりはない。

「自薦、他薦は問わずだからエントリーはされてるみたいだけど…」

…」

「あ。マジで？ なんかやらしー」

ナズナは揶揄^{やぶ}するように言う。

「ミズハナさんもお気の毒に。自分が争っているのが男だと知ったらどんな顔をすることやら」

「だーかーらー。出ないって。最終的に出るかどうかは自分で決められるから」

「出たほうが良いと思うな、私は。というよりは出て欲しい」

ナズナは苺のショートケーキにフォークを入れつつ、空也のほうを見ないでそんなことを言う。

「どうして？」

「面白そうだから、じゃダメかな？ ホントは別の理由があったりして」

にひひつと笑いながら、切り分けたケーキを口に運ぶ。バランスを

失ってケーキがぱたりと倒れた。

「教えてくれないんでしょ。どうせ」

「そんなこともないけど……ねえ、なんか機嫌悪くない？　なんか気に障るようなこと言った？」

「……いつも通りだと思うけど」

空也はショートケーキの上の苺をフォークで突き刺した。

二人で黙々とケーキを食べ続ける。

『なんかキナ臭いよ、あの二人』

もつと話したいことはたくさんあったはずなのに、唯の忠告が頭の片隅にこびりついて離れない。そのせいでどこかぎこちなくなってしまう。

「空也が考えていること当ててあげよつか？」

ナズナは最後まで残しておいた苺をフォークの先で弄ぶ。

「たぶん、だけど……私たちのこと、だよ。話してないことはあるよ。隠し事してるの。口止めされてるから教えられないけど」

ナズナは空也のほうを決して見ようとしない。

「コンテストに出て欲しい理由はさ。クーヤの晴れ姿なら見てみたいじゃない。私も出ようかどうか迷ってるんだけど、空也が出るなら出てもいいかなって」

「ナズナの学校でもあるんだ」

「あー……うん。そう。どこでもあるんじゃない？　そういうイベントって」

ナズナの目は泳いでいるが、空也はそれ以上突っ込んだことを聞けなかった。

ナズナの後ろに付きまとうスノップの影は気になる。けれども、あまりしつこくすると嫌われてしまうかもしれない。空也はナズナが自分とスノップを天秤にかけるところを想像しかけて、しかし急いでその不吉な想像を打ち消した。

現状維持。

それが一番良いような気がした。

「ところで空也。そろそろだと思っから準備してね」

「準備？」

「ケーキ美味しかったでしょ？」

ナズナは悪戯つ子そのものの目をして笑っている。

空也の疑問が解ける前にそれは起こった。全身が燃えるように熱かった。細胞の一つ一つが収縮しているようだった。脂汗が滲み出てくる。

「空也がいけないんだよ。私の頼みを聞いてくれないから」

「……な、何を」

自分の口から聞きなれた、しかし自分のものではない声が聞こえて空也は口を押さえた。声が一オクターブ近くも高かった。さらに股間と胸の辺りがむずむずしてきた。なんとなく自分の体に起きていることがわかり始めて、空也は股間に手を当ててみた。あるべきものが小さくなって体の内側に入り込もうとしていた。服の上からではわかりにくいが胸も大きくなりつつある。

「スノップをお願いしたの。空也の意志とは関係なしに女の子になっちゃうようにって」

「な、ナズナのバカ。スノップのアホ」

体の熱は嘘のように引いていた。その代わりに空也は完全にクーヤになってしまっていた。戻ろうと念じてみても、全く戻れそうに無かった。

「だって、こうでもしないとクーヤは会ってくれないでしょ。女の子同士でお茶会したかったんだ」

「女の子同士って。俺は男だ！」

「細かいこと気にしないーい。ねえねえクーヤ。これ着てみて。絶対似合うから」

ナズナがテーブルに広げて見せたのは、フリルやレースがふんだんにあしらわれた可愛らしいメイド服だった。男としての大事な一線を越えてしまいそうな危うさ。空也は思わず腰が引けた。できることなら穩便に回避したいところだった。

「あ。まさか逃げようとか考えてる？ 私がコスプレしてるの見て、空也は毎回楽しんでたよね。それなのに空也はコスプレしてくれないんだ。悲しい。海溝深くに沈んで立ち直れないかもしれない。そんなに薄情だとは思わなかった。悲しみの中で泣き暮らせと言うのですか。む、むごい。むごすぎる」

「……ナズナって人生楽しそうでいいね」
空也は渋々メイド服を受け取った。

「なんだかんだ言いながら着てくれるから空也って大好き」
社交辞令だとわかっていても、笑顔で言われると悪い気はしない空也だった。

手早く着替えて戻った空也が目にしたのは、同じくメイド服に着替え終わったナズナと、その横で嬉しそうにしているスノップ。見なかったことにして帰リたかった。

「なんかごめん。今回は本気で謝る」

ナズナに深々と頭を下げられては、空也は怒るに怒れない。

「えー。いいじゃんか。俺だけのけ者にしなくても。ナズナの言うとおり協力してやっただろ。こんな面白そうなイベントに現れないと思うほうがどうかしてると思うぜ。俺を誰だと思ってる。期待を裏切らない男、スノップ。だろ？」

「……調子乗りすぎ。これ以上、トサカにくること言わないでね。いくら私でも我慢できなくなるかもしれないから」

ナズナに叱られても、スノップはまるで聞こえていないかのように振舞っている。三人分のカップを並べて、かいがいしくポッドから紅茶を注いだ。

「美少女に囲まれてお茶会。男の夢だね。空也ならわかるよな」

「……どこから突っ込めば。俺は男だし、美少女として答えるなら『わからない』と言うべきなのか」

「こまけーこたぁいいんだよ。ナズナだって言ってただろ。メイド服、二人とも似合ってる。最高だ！」

空也はため息しか出てこない。見るとナズナも同じようにため息をついていた。二人で顔を見合わせて苦笑した。

「その二人だけでわかりあってます、みたいな態度。普段なら許せるところだが、何故か許せてしまうな。ぶっちゃけるとかなりタイプだ」

「……お前、アホだろ。いや、アホなのは前から知ってたけど」

「ふふふ。いまなら何を言われてもご褒美に聞こえるぞ。罵りたければ罵るがいいさ。そんなことで止められると思ったのなら大間違いだ！」

スノツプは眼鏡のフレームに指を当てて格好をつけている。空也は諦めて大人しく席に着いた。

「しかし、それにしても化けたなあ。クラスの男子どもが羨ましいね」

しみじみと呟きながら、ジロジロと品定めをするように眺められて、空也は自分の体を守るように抱いた。なんとなく隠したかった。

「スノツプ。いい加減にしたら？ セクハラだよ」

「セクハラって。コイツ男だぞ？」

「でもスノツプがクーヤを見る目は男を見る目じゃないように思うんだけど？ 私の気のせい？」

ナズナに凶星を指されて言葉に詰まるスノツプを見て、空也は助かったと思った。

「まあ空也もたまに私のこと、そういう風に見てる気がするけど」全然助かっていなかった。見事に飛び火していた。

「って、冗談だよ。二人とも何黙っちゃってるの？」

ナズナは一人で楽しそうに笑っているが、男二人はぎこちない笑みを浮かべることはできない。

「生理的なもんなんですよ。私にはわからないけど」

軽快な語り口で傷口に塩を塗りこめてくる。

空也はスノツプに目だけでサインを送った。スノツプも即座にサインを返してきた。芸術的なアイコンタクトが繋がった。一瞬の間に

力強い結束が生まれた。

「スノップは俺の美少女っぷりを確かめてただけだと思うな。ほら、薬を提供したのもスノップだろ。だから色々気になるところがあつたんだよ。きつと」

「そう。よくわかつてるじゃないか。空也が女のふりをして学校生活をしているのが、信じられなかったからな。おかしいところを探してたんだが、ちょっとやそつとじゃ見当たらないって感心してたんだ」

「えー。なんか怪しいんだけど。二人が仲良くしてるところ初めて見たよ、私」

ナズナはいかがわしいものを見る目をして二人を見ている。

空也は諦めない。そしてスノップも諦めない。男の沽券に関わる問題だからだ。共同戦線はどちらかが脱落した時点で突破されてしまう。それだけは避けなければならない。

「スノップ。立ちな！」

「お、おう。なんだかわからんが付き合うぜ！」

空也とスノップ、二人で並び立つ。

スノップの頭が随分高い位置にあつて変な感じだが、自分が小さくなっているせいで空也はすぐに気がついた。見下ろしているスノップと目が合った。スノップも決意に燃えている。問題なさそうだった。

「スノップ。おっぱいでもどこでも好きなところ触れ！ エロいことなんか何も無いんだって見せつけてやろうぜ！」

「おう！ 任せ……って、おい！ そりゃ無いぜ！ それはいくらなんでも……」

言いよどむスノップ。

興味津々で事態の推移を見つめているナズナ。

空也は名案だと思うのだが、何故かスノップは躊躇している。

「何を恥ずかしがっているんだ！ 男同士だろ。浅はかな考えを改めさせてやるんだろ！ 戸惑う理由なんてないはずだ。スノップ、

聞いているのか。スノップ！」

「そういう問題じゃないような……だって、お前、心はともかく体は完全に女になってるんだよな？」

「あん？ わかんないやつだな。何が問題なんだよ？」

スノップは頭をぽりぽりとかいて、空也の後ろに回った。腋の下から手を回して、空也の両胸を優しくつかむと遠慮がちに揉み始めた。「どうだ。見たか！ これでも言いたいことがあるか？」

「いや、その。スノップが恥ずかしそうなんだけど。すごく」

ナズナに言われて、空也はスノップの顔を仰ぎ見た。両目を瞑っている。まるで苦行に耐える修行僧のようだった。

「な、なんつー顔してんだ……」

「頭ではわかっていてもどうにもならんことはある。裏切るようですまん。正直言つと、前屈みになりそうだ。不本意だ。すまない」

「なら、早く離せよ！ いつまでも揉んでんじゃねー！」

空也はスノップの手を振り払って、思いつき突き飛ばした。怒りに任せて股間を蹴り上げる。両手で急所を押さえて内股に崩れ落ちるスノップ。びくびくと痙攣している。

「あ、悪い。思わずやつちまった。スノップ、大丈夫？ じゃないよな。マジごめん」

「お、お前というやつは……」

うめき声を上げるスノップの腰をトントンと叩いてやる。

「そんなに痛いものなの？」

「空也、説明して差し上げる。俺は限界だ」

スノップは顔を伏せたまま荒い息を吐いている。

「説明しろと言われても……神々の黄昏を感じずにはいられない瞬間、かな？」

「要するに世界の終わりってことね」

「そう。それはラグナロク。って、詩的に言えば良いってもんでもないだろ」

突っ込みながら立ち上がったスノップは青い顔をしているが、それ

なりに元気だった。

気持ちを新たに、三人でテーブルを囲む。

「なんか色々あったような気がするが、俺が言いたいのコンテストには出るってことだ。その話をするために来たんだ」

紅茶をちびちびと啜りながらスノップが切り出した。足を組んで格好をつけているが、いつもの余裕はどこにも感じられなかった。だから空也の気持ちも自然と大きくなる。

「イヤだ。見世物になるつもりはない」

「美少女は学園生活の華だぞ。自信がないのか？ 無様に敗れ去るそれを恐れているようにしか見えないね」

「仮にそうだったとしてどうだって言うんだよ。メリットがない。男に好かれても嬉しくないぞ」

空也とスノップの間で火花が散った。空也は絶対に譲らないつもりだが、スノップにも折れる様子は見られない。

「メリット、あるよ。自信ないけど」

ナズナが控えめに片手を上げて発言した。

「お似合いのカップルってあるじゃない。あれよあれ。コンテストで優勝すれば、アリサとも釣り合いが取れるんじゃない？ クーヤが男だとは夢にも思われなくなるだろうし、いいことづくめだと思う」

あまりに建設的な意見に空也はぐうの音も出ない。スノップはスノップで微妙そうな顔をしている。スノップの目論見を粉碎したナズナに乾杯！ 空也は拍手喝采してあげたい気分だった。

「ナズナちゃんは空気が読めない子だね……」

「空也はどうしても出たくない？」

スノップのぼやきを完全スルーして、ナズナは意志の確認を迫ってくる。正攻法でこられると、空也としても断りにくい。まっすぐ期待に満ちた目を向けられるとなおさらだ。

「どうしてもってわけじゃないけど、男に好かれてどうこうっていうのはちょっと……ナズナだって同性に言い寄られたら困るだろ？」

「私？ 別にクーヤに…… あー、ややこしいな。女の子のクーヤに言い寄られても困らないよ。抱きつかれてもイヤじゃないし」

ナズナは本気で意味がわからないといった様子で小首を傾げた。

「空也。諦める。相手が悪い。根本的なところで話が通じてない」

「自分だけ何でもわかってるみたいなふりして。スノップだって全然わかってないでしょ。ホントのところは」

「空也の名誉にかけてわかってると思うぞ。不名誉なことだから言えないが」

ナズナは何か言いたげな顔をしてスノップをにらんだ。スノップは取り合わない。空也が収拾をつけるしかなさそうだった。

「出ることにするよ。なんか出たほうが良いような気がしてきた。

確かにそうだ。男同士だと思っているのは俺だけだもん。男と女の友情は成立する。何かの本で読んだ」

「友情だって。良かったね。ナズナ」

どこからどう見ても裏がありそうな黒い笑顔をスノップ。

「かんじわつる。友情から発展することだってあるんだから」

「ナズナって女の子が好きなの？」

「そんなことないけど？」

ナズナの顔に疑問符が浮かぶ。自分もきつと同じような顔をしているはずだ、と空也は思った。

「ハイハイハイ。そこまで。空也はコンテストに出る。大切なことなので復唱します。空也はコンテストに出る。ハイ、みなさん一緒に」

「「空也はコンテストに出る」」

スノップは満足げにうなずくと、懐から小さな機械を取り出した。アンテナがピンと立っている。

「携帯電話を改造したんだ。おもしれーんだぜ。クーヤ、立ってみな」

言われるままに立ち上がると、スノップは機械を空也に向けてボタンを操作した。

「ふむふむ。二千か。まあまあだな」

「へー。凄いね。千五百が境目だから充分なんじゃない？　可愛いな、とは思ってたけど」

ナズナも一緒になってスノップの手元を覗き込んでいる。

一人だけ事情が飲み込めず、気になってしかたがない。空也は二人の元へ駆け寄った。

しかし空也の期待を裏切るように、スノップの持つ機械には「2000」と数字が表示されているだけだった。まるで意味がわからない。

「これな。美少女力を測定する機械なんだ。クーヤの美少女力は客観的に見ると二千。試してみるか？　サンプルはそこにいる娘でいいだろ」

「サンプルって……まあいいけど」

スノップに教えられたとおり、ナズナに向けて機械を操作すると、数字の表示がぐんぐん上昇した。三千を超えて、ファンファーレとともに数字がストップ。

「読み上げてみ？」

「三千七百、だな」

「あははー。また上がってるのか。参ったな」

口ではそう言いながらも、ナズナは頬を赤らめてまんざらでもなさそうだった。

空也は割とショックだった。

ナズナと自分を見比べてみる。

確かにナズナは可愛い。しかし、数字にして二倍近くも差があるようには思えない。自分に向けて機械を操作する。数字は急降下。二千で止まった。何度やっても変化しない。

「あれ？　もしかして自分が可愛いとか思っちゃってた？　ナズナと並んでも遜色ないとか？　まさかそんなこといくらなんでも思っていないよね？　クーヤちゃん」

「スノップやめなよ。空也もそんなに気にすることないよ。千五百

超えてたら美少女の範囲に入るんだから。こんなのただの数字じゃん。人は見た目じゃないよ」

空也はナズナに再度機械を向けた。

ファンファーレ。表示は三千七百。

自分に向ける……二千。

「私だって、昔は低かったんだから。大丈夫。これからだよ」

「ナズナは一桁の年齢の時には二千超えてたけどな」

スノップの慌てて口を押さえる仕草はいかにもわざとらしかった。

「だからスノップやめなよ。クーヤ傷ついてるじゃない」

これまでスノップに腹が立つことは何度もあったが、ここまで凹まされたのは初めてだった。ナズナの優しさが逆に痛かった。

「舞い上がってるバカにはこれくらいでちょうどいいんだって。ミズハナさんとやらも、どうせ三千くらいはあるだろ。唯ちゃんだって？ あの娘も二千は超えてるはずだ。測ってないが、それくらいはわかる。長年美少女を見続けてきたからな。ナズナだってそう思うだろ？ クーヤと唯のどちらが可愛いかな。正直にどうぞ」

「それは……」

ナズナの困ったような目が全てを物語っていた。それでも空也は認めたくなかった。

「スノップ！ この機械貸してくれ。ナズナが可愛いのは百歩譲って良しとしよう。でもサンプルは二つじゃないか。俺がそれなりに可愛いと思う娘を測らしてくれ。頼む」

「もとからそのつもりだ。コンテストに出るからには勝たないとな。敵を知り己を知れば百戦危うからず、と大昔の兵法書にも載っている。存分に測りたまえよ」

スノップは腕を組んで大仰にうなずいた。

「やった。空也から見ても私って可愛いんだ。やった」

小さくガッツポーズを取ったナズナの姿は、しかし空也の目には入っていなかった。

翌日からクーヤは唯、ミズハナ、ダメイドの美少女力をかき集めた。
唯……二千五百。

ミズハナ……三千二百。

ダメイド……二千三百。

結果は燦々たる有様だった。
さんさん

惨敗、というほかなかった。
さんばい ミズハナはおるか他の二人にも水を空

けられていた。スノツプの見立ては正しかったのだ。

そしてクーヤは悟った。

自分はいわゆる「知らない娘」だということを。

もしも商品化されてグッズが出ようものなら、一人だけバーゲンセールのカゴに突っ込まれ、それでも売れ残って、連日のように値下げの札が重ね貼りされる運命なのだ。

暴落、ストツプ安、商品価値なし。おそろしいレツテルだった。

その日、クーヤは少しだけ泣いた。

90s nostalgia ??

時間は過去から現在に、そして未来へ向かって不可逆的に流れている。

過去の選択の結果として現在が存在する。現在の選択の結果として未来が決定される。

無数の選択肢。無限の未来。

選択によって収束していく世界。

漏斗に注がれる力オティックな情報。それを選別するフィルター。ろ過された無色透明な過去は、しかし、固有の情報を保持したまままできらめく砂のように沈殿していく。

それは過去の可能性にほかならず、過去もまた無限の可能性を秘めていることにほかならない。

存在と時間の等方性について……。

ドクター、

ジニアの日記より

渡された測定器を唯はためつすがめつ眺めていたが、実際に何度か操作して机に置いた。

「で、内緒で二人に会ってたあげく私に相談するわけね」

あきれたように言いながらも、唯はどこか楽しそうだった。

クーヤはあんパンの包装を破いて一口大にちぎった。目立ち過ぎるという理由で屋上での昼食会は無期限停止中だった。あの一件——ミズハナのコンテスト開催宣言——以来、アリサとの関係は急によそそしい他人行儀なものになってしまった。何日もまともに話をしていない。

「それでどう思う？」

「どうって……まあまとも？ ミズハナさんはこの学校じゃ一番可愛いでしょ。私も嫌いじゃないよ、ミズハナさん。遠くで見てる分には楽しい人だし。ちょっとアホっぽいけど。ダメイドさんはミズハナさんの影に隠れて目立たないだけで、レベル自体は高いし」

「……唯は？」

「私？ 私は……そうだなあ。自分で自分のこと可愛いとか言っちゃうのってバカっぽくてやなんだけど……クーヤよりは可愛いんじゃない？ 測定を信じるなら」

冷静そのもので言われると、それはそれで凹まされるクーヤだった。「女の子に勝てなくてもいいじゃん。というか、クーヤに負けたら私の立場ないんですけど。あー、良かった。美少女力低くなくて」

「ナスナが三千七百というのは？」

「うん？ まあ、見た目は可愛いと思うよ。見た目は。認めたくないけど」

唯も順番に異論はないらしい。残念ながら測定の正確さは疑いようが無かった。

クーヤは遠くに座っているアリサに測定器を向けた。

数字が表示される。三千五百。

「へー。男子も測れるんだ。今度、測らせてよ」

「アイツってカッコいいんだな。いまさらながら」

「……無視すんなし。別に数字が低かったからって、全然かまわないんだけど。むしろ競争倍率低いほうが何かといいと思うよ」

「いいことないだろ？」

「そこは無視しなよ」

額をこづかれた。わけがわからなかった。

「そんな顔しない。なんだか私がいじめるみたいじゃない」

「そうなの？ 全然そんな感じはしないよ」

クーヤが聞き返すと、唯は難しい顔をして考え込んだ。

「クーヤがクーヤだってことはわかってるんだけど……目の前にいるのはどこからどう見ても女の子なわけ。とつてもやりにくいの。」

知らない人と話してるみたいで」

「そんなもん？」

「そんなもんです」

言われてみれば、確かに男で会う時とは微妙に態度が異なっているような気がする。クーヤとして接しているせいかもしれない。

ところで、クーヤもたまに唯のことが全くわからなくなることがある。それも、自分が女の子を演じているせいなのだろうか。少しだけ考えてみたが、すぐにその考えは頭から追い出した。現時点では男として学校生活を過ごすことは考えられない以上、その仮定は無意味に思えたからだ。

「なんか手っ取り早く美少女力を上げる方法って知らない？」

「私が教えて欲しいくらい。それにしてもなんで、わざわざミスハナさんに勝とうとしてるの？ 負けたほうが後腐れないよ。アリサからもスパツと手を引けば万事解決。その方が大過なく学生生活を送れるって」

「それは……」

「まあどうせナズナにいいところ見せたいだけなんでしょうけど」
クーヤが何か言う前に、唯は一人で納得してふてくされた。当たっているだけに言い返せない。長い付き合いの中で性格を熟知されていた。

「だからその顔やめてよ。ホントに苦手なの。というか、私って女の子苦手だったんだ。結構シヨック……」

唯は頭を抱えてうずくまった。

「ネガティブキャンペーンとかどうかな？」

「悪い噂を流すの？ ミズハナさんの？ あんまり意味ないんじゃない？ ミズハナさんが人気なのって、あのキャラクターあってでしょ。影で暗躍とか似合うタイプかなあ。ダメイドさんならありえるかも」

「よくそこまでわかるね。ちょっと感心した」

「あー、うん。そうだね。そうかも。嫌なんだけどなあ。自分のそ

ういうところ」

どうにも歯切れが悪い。

クーヤがまじまじと見つめていると、それに気づいた唯は目を丸くした。

「なに？　もしかしてご飯つぶとかついてる？」

わたわたと口の周りを拭っている。

「ついてないよ。気になってたのはもつと別のこと。誉めたつもりだったの。それなのに不服そうだったから」

「それはちよつと違う、かな。小ずるくて腹黒いの。自分より可愛い女の子って大嫌い。いなくなれて思っちゃう。数字出たじゃない？　私は二千五百。それって内面も加味されてるのかなって。ミズハナさんとか……ナズナとか。その、やっぱり可愛いから」

唯は笑顔を見せているが、心の底から笑えているかどうかくらいは、いくら鈍いクーヤでもわかることだった。

「唯のいいところってさ。ちよつとわかりにくいっていうか……奥ゆかしい？　は、違うか。慎重深い、も違うな。目端が利く、のは嫌なんだっけ？　小動物みたいなのは……どうだろ？　マニアックかも」

「褒めるのか貶すのかはつきりしてよ」

「ユニーク！　ユニークなのが良いと思うよ。一筋縄ではいかないうところとかチャームポイント！」

「そうですか。クーヤの気持ちはよくわかった」

唯はやれやれとため息をついた。唯の長所なんていくらでも知っているはずなのに、いざ言葉にしようとすると、適切な言葉が出てこない。クーヤは困り果ててしまった。

「……ありがとう」

「は？」

唯の唇から滑り落ちた眩きは、小さすぎてクーヤの耳は拾いきれなかった。

「なんでもない」

唯は照れくさそうに顔を背けた。

「なんでもないって……」

「クーヤの言うことも一理あるなって思ったの。個性を大事にしよ
うって。それだけ」

唯は少し恥ずかしそうに笑顔を見せた。

切り換えの早さも唯の数ある美点の一つだった。

「よし！ ネガティブキャンペーンでも何でもやってやろうじゃないの。火の無いところにだって煙は立てられる。馬鹿と煙はなんと
やらって聞いわ。親和性は高いはずよ」

「……言い出しておいてなんだけど、止めた方がいい気がしてきた」
「だいじょーぶだって」

唯の何かに火をつけてしまったらしい。真剣な顔をして自分の世界
に没頭している。既にクーヤのことは目に入っていないようだ。

「怪我しないようにね」

「何言ってるの？ クーヤも計画に入ってるよ」

唯は当たり前のように言い切った。

全ての授業が終了した。二人は校内で適当に時間をつぶし、人氣が
無くなってきたところで、ミズハナの教室に潜入した。唯は一直線
に教室の中を突っ切って、誰か——おそらくミズハナの机の前——
で立ち止まった。

「これが？」

「そう。ミズハナさんの机だよ」

答えながら唯はしゃがみこむと、躊躇無く机の中に手を突っ込んで
漁り始めた。

「うわぁ。信じられないことするね」

「別に何をしようってモンでもないから。あー、うん。いたいた」
立ち上がった唯の手には何も握られていない。

クーヤは首を捻る。

「可視化するね」

ぼうつと淡い光を放ちながら唯の手のひらに現れたのは白いネズミだった。妙に長い耳をしているせいで、ウサギのようにも見える。唯の体を駆け上って肩に収まった。おねだりをするように彼女の頬に体をすり寄せている。

「何それ？　というか、いつの間に？　突っ込みどころ満載なんだけど……」

「昼休みの間に放っておいたの。追跡の秘密兵器よ。わかってると思うけど、ソフトウェアで生き物じゃないから。その辺は大丈夫」ネズミの首根っこを捕まえてキスをする。そして放り投げる。ネズミは空中で体を入れかえて着地すると、一目散に走り始めた。転々としたネズミの足跡が繋がって光の筋になっていく。すぐにネズミの姿は見えなくなった。

「うまくリンクを辿り始めた。これでミズハナさんの私生活をのぞく準備は完了。クーヤ、どうする？　行く？　それともやめる？」

「行かないって言ったらどうするの？　一応聞くけど」

「一人で行く。決まってるじゃない」

「だよね。付きあうよ」

学園生活を送る上でミズハナの存在は無視できない。それならば、弱みの一つでも握っておいたほうが良さそうな気がする。実際、ミズハナのせいでアリサとの関係はぎくしゃくしている。実はクーヤはアリサのことが嫌いではなかった。あくまで同性の友人としてだが。

「それにしても、唯の知らない面をドンドン見せられて困惑ぎみなんだけど」

「知り合ったばっかなのに変なこと言うのね。いいじゃない。男の前で猫被ってる女より」

「それは……」

「もしかして、またナズナ？　いまのはそういう意味じゃないって。猫被ってるのはクーヤのことだよ」

けらけらと笑い声を上げる唯を見て、クーヤはひとまず安心した。

90s nostalgia ??

帰宅途中に寄り道をする。

学生にはありふれた行動だが、ルートは無限に存在する。出発点と到達点を結ぶ最短コースを調べることに意味は無い。それは既に確立されたルートで、時間としては一瞬で行き来が可能だからだ。それにもしも自宅に入られてしまったならネズミごときではセキュリティを突破できると思えない。

時間と距離の関係も同様にほとんど意味をなさない。速度が大き過ぎるせいだ。

ネズミの足跡を頼りにミズハナを追跡する。たどり着いた先は、古い西洋風の街だった。

ミニチュアマップを呼び出すと、精巧な三次元のマップが中空に浮かび出てきた。観光案内が始まりそうだったので、二次元簡略表示に切りかえた。

坂の街だった。

クーヤたちが立っているのは街の中腹あたりのようだ。遠くに海岸に打ち寄せる白波が見えた。

「なんだかいかにもそれっぽくて嫌な感じがする」

「ミズハナさん、ここに住んでるのかな？」

「それはどうだろ。学校から直帰してるってこと？ それにプライベート空間のセキュリティを破れるほど高性能じゃないよ、私のネズミ」

石畳の上を転々とネズミの足跡が続いている。路地に入り見えなくなっているが、坂の上には古い洋館がそびえ立っているのが目に入った。

「登るか。それとも降りるか」

唯は立ち止まったまま考え込んでいる。

「降りてどうするの。賑やかそうなのは確かにアッチだけど、足跡

は上を目指してる。素直に登ろう」

「クーヤ。ちゃんとマップ見た？」

言われて、マップを再確認する。港があつて市場が開かれているのは低地。屋敷がぼつぼつと建っているのは高地。どう考えても目指すべきは上で間違いなさそうだ。

「ミズハナさんがいそうなのは上だろ？」

「面白そうなのは下じゃない？ 年中泳げるみたいだよ」

「だから？」

「わかった。登ろう。私もミズハナさんは上にいると思うな」

唯はどこかげんなりとした様子で歩き始めた。

確かに坂は長い。登りきるには骨が折れる。しかし、道標が上を指しているのだから諦めるしかない。クーヤだつて登らずに済ませられるならそうしたかつた。

進み始めてしばらくすると、クーヤは奇妙なことに気がついた。手入れされた街路樹や明滅する信号など、街並みは生活観にあふれている。ところが大通りを進んでいるにも関わらず誰ともすれ違わない。細い路地を覗いてみても結果は同じだつた。犬や猫が我が物顔で闊歩している分、余計おかしく感じられた。

まるで人間だけが抜け落ちたようだつた。似た雰囲気を感じる場所をクーヤは訪れたことがある。ナズナやスノップと出会う前の僅かな時間、90s nostalgiaに漂っていた空気と酷似していた。

「なんだか寂しいところだね」

誰ともなしに唯が呟いた。

管理が行き届いたゴーストタウン。無色に漂白された透明人間の街。ぞつとしない想像だつた。

草生した屋敷の前に出た。ネズミの足跡はそこ中へと続いている。クーヤは呼び鈴を鳴らした。それなりに大きな音が辺り一帯に響き渡った。

「普通、押すかな……」

「だって、誰もいなさそうだし」

クーヤはそう言いながら、本心では別のことを考えていた。探索を打ち切って帰りたくなっていた。嫌な予感がひしひしとしていた。心のどこかで、鉄柵門の向こうの重そうな玄関扉を開いて誰かが出てきてくれることを願っていたのかもしれない。

屋敷からは誰も出てこない。

鉄柵門に触れると、意外なほどあっさりとは開いた。

ドアノブを回す。玄関扉にも鍵はかかっていた。クーヤは一瞬躊躇したが、結局は開けることにした。

室内は明るく清潔に保たれていた。埃ひとつ落ちていない。物音ひとつしなかった。外観からはわからなかったことが、一つだけ明らかになった。屋敷には地下室が存在していた。ネズミの足跡は階段を下っていた。そして、その先はやけに薄暗く、見通しが悪かった。

「ミズハナさん、実は吸血鬼だったりして」

「私たちは生贄に捧げられる可愛そうな少女ってわけね」

地下へと続く階段の前で立ち止まったクーヤだったが、唯には帰る気が全然無さそうだった。そのまま降りることにした。クーヤも段々と楽しくなってきた。驚くべき秘密が隠されているかもしれない。期待に胸が高鳴っていた。

はたして地下室には黒い棺が横たわっていた。壁にかかったランプの頼りない光が室内を照らしている。クーヤも唯も止まらない。嬉々として棺の蓋に手をかけた。ミズハナの秘密にたどり着いた。クーヤは勝利を確信した。せーの、で蓋を持ち上げた。

「あれ？」

「これ、なに？」

二人は顔を見合わせた。棺の中には唯が放ったネズミ。それとひとかけらのチーズ。それだけだった。ネズミは一心不乱にチーズに齧りついている。

背後でボタンと音がした。扉がひとりでに閉まっていた。慌てて駆け寄るが、扉は押しても引いても開かなかった。

「……やられた」

唯は額を押さえて天を仰いでいる。どうやら尾行は失敗したようだ。まんまと閉じ込められてしまったらしい。

二人で手分けして出口を探すか、どこにも見つからない。それほど大きくも無い部屋だ。まもなく調べ終わった。

徒労感にへたり込んだ。冷たい地面の感触は気持ちよいものではなかったが、そんなことは気にならないくらいに期待はずれだった。唯はネズミの尻尾をつかんでぶらぶらと振っている。餌につられて罠に誘い込まれたネズミはクーヤたちだった。皮肉が利いていた。

一時間ほど経ったが、クーヤたちは放置されたままだった。

最初のうちこそ諦めずに部屋の中をネズミの一匹すら見逃さないほど念を入れて調べていた唯も、とうとう根を上げて座り込んだ。

二人とも黙りこくったままだ。

唯の心情はよくわからないが、なんだか暗い顔をしている気がする。クーヤはクーヤで微妙な問題を抱えていた。

朝食後と昼食後の一日二回。決まった時間にスノップから渡された薬を飲んでいるクーヤだったが、そろそろその効果が切れる時間だった。

唯にはばれている節はあるが、それでも確定させてしまうのは気が引けるし、もしもの時に言い逃れできなくなる。薬そのものは制服に忍ばせているが、唯の前で飲むことには抵抗があった。

しかし、男の姿に戻るよりはマシな気がする。

クーヤは唯に背中を向けて、こっそりと薬を飲み込んだ。

「何飲んでるの？」

背中にも目でもついているのではないだろうか。クーヤは本気で疑った。

「じよ、常備薬」

「嘘ついてもわかるんだよ。特にクーヤの嘘は。それにどこも体悪

くないよね」

「栄養剤なんだ。お腹の足しになるかなって」

「私にもちようだい」

唯の目はクーヤの手の中にある小瓶に注がれている。上手い言い訳がいつでも流れるようにすらすらと出てくるなら苦労はしない。考えている間に、さっと小瓶をさらわれた。

「どっちがオススメ？ あー、やっぱり良いや。クーヤが赤なら、私は青にしよう」と

クーヤの返事を待たずに、唯は青いカプセルを口の中に放り込んだ。「味はしないのね。こんなんでもホントに栄養あるの？」

どうせ飲むなら赤いカプセルにして欲しかった。それなら女である唯には無害のはずだ。しかし、青いカプセルを元々女である唯が飲むとどうなるのか。クーヤは男に戻りたい時に青いカプセルを試したことはあるが、同じような変化が体に現れるのだろうか。実はクーヤも知らなかった。

三分が過ぎ、五分が過ぎても唯は何も言っていない。

見かけだけでは判断できないが、特に変わった様子も無いようだ。

「クーヤ。つかぬことをお聞きしますが、よろしいでしょうか？」
急に畏まって唯が隣に座った。

「もしかして、さっきの薬。栄養剤ではなかったのではなくて？」

逃げようとしたクーヤの肩をガシッと掴んで、地面に縫い付けた力は女のものとは思えないほど強かった。

「怒らないから言ってみて。ホントは何の薬だったかを」

「か、勝手に飲むからだろ。常備薬だって言っただじゃないか」

「それならそうと言ってよ。常備薬で栄養剤だと言うから飲んだのに」

唯は涙目になっている。すわりが悪いのか、頻繁に腰の位置を変えている。恐らく急に生えた股間のものの扱いに難儀しているのだろう。

「もうやだ。何なのこれ。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪いー。」

クーヤ何とかしてよー。あ、そうだ。赤いやつ飲めばいいんだよね。そうだよな」

再び伸びた唯の手を、今度こそクーヤは押しとどめた。

「飲み過ぎると体のバランスが狂って戻れなくなるかもしれないって。時間が来れば戻れるから、それまで我慢して」

「我慢つて。どれくらい？」

早ければ早いほど嬉しい。唯の目はそう言っていた。

期待には答えたいし、嘘をつくのは簡単だが、裏切りの失望は期待の大きさに反比例する。クーヤは迷ったが、ありのままを伝えることにした。

「……六時間くらい、かな？」

空気がこれ以上重くならないように明るく微笑んで言ってみた。

効果は無かった。唯は世界の終わりに吹き鳴らされる喇叭の音でも聞いたかのように膝を抱えた。効きすぎる薬が恨めしかった。

「今日中には戻れないってことなのね。あんまりよ」

「私の立場は……」

「クーヤは女の子だからわからないんだよ。男と女は違うの。私は男の気持ちなんかわかりたくないもん。クーヤのばかりっ！」

胸倉をつかまれてカクンカクンと揺られる。

そういえば昔から予想外の事態に直面すると前後不覚に陥る癖があったなあ、とクーヤは思った。

「人が大変なことになってるのに、なんで嬉しそうなのよ。というか、クーヤは可愛い女の子になって、私は見た目が変わらないってどういうことなのっ!? おかしくない!？」

「そこ!?! そこのの? 突っ込むとこ」

「うるさーいっ!」

前後に大きく揺すられてクーヤは気持ちが悪くなってきた。唯は自分が男になっているのを忘れているに違いない。力の加減をしてくれない。クーヤはいまにも落ちそうだった。

「ギブ! ギブ! 力、強くなってるから。私、女の子だから!」

唯はきよとんとしているが、とりあえず前後に振るのはやめてくれた。クーヤは唯の手首を取って、自分から引き剥がした。

「そんなに焦らなくても大丈夫だって言ってるだろ。なんだよ。男になっただくらいで」

「くらいって。くらいって……そんなに単純にできてないもん」

「あー、もうわかった。わかったから。悪かったよ」

クーヤは言い捨てて唯から離れると、膝を立ててドカンと座った。太ももはおろかパンツまで見える姿勢だが、どうせ側には唯しかない。半ば自棄になっていた。

「……クーヤ、パンツ見えてるよ」

「知ってる」

当てこすりをしたいわけではなかった。一方的に唯を悪者にして責めたいわけでもない。しかし女のように振る舞いたくもなかった。自分でも矛盾していると思うが、クーヤは気持ちの行き場を失っていた。

薄暗い部屋に長い間、閉じ込められているせいで精神が参ってきていた。

「クーヤ、パンツ見えてる……」

「だから知ってる」

「知ってるなら閉じてよ」

唯は懇願するように言った。本気で恥ずかしそうだ。クーヤは全然恥ずかしくないのに。全く意味がわからなかった。

「クーヤ、お願いだから。気になるっていうか、変っていうか……おかしいの。わけわかんないよ」

「おかしいって？ 何言ってるんだ？」

クーヤが聞いても、唯はぎゅっと目をつぶってイヤイヤをするだけで答えない。

まさか副作用？

クーヤは何とも無かったが、もしかすると個人差があるのかもしれない。心配になったクーヤは唯の元へ駆け寄った。

「唯、どこか痛むのか？ できることないか？」

手を取ると温かった。唯はびくつと震えた。いよいよ心配になってきた。

「だ、大丈夫だから。平気だから。たぶんそういうんじゃない」

「何言ってるんだ。そんなにつらそうな顔して。隠さないでいいから。力になるよ」

手を握って唯の前髪をかき上げた。ヒツ、と唯が息を飲むのが聞こえた。額と額をくつつける。体温が高いような気がする。

「クーヤ、離れて。話すから。離れて」

唯の慌てぶりは尋常ではない。しかし、話す気になってくれたのは前進だ。クーヤは大人しく従った。

「なんて、いうのかな。クーヤが可愛いって。そう言えばいいの、かな。たぶん、そう。男の目で見ると、たぶんクーヤが可愛いんだと思う。女の時はそんなこと思わなかったの。自分の方が、その…

…美少女力高かったし」

「それで？」

「それでって……全部言わす気？ ちょっと酷いよ」

「言ってくれないとわからない」

「だから、パンツが気になって気になって仕方なかったの！ これでもいい！ いまだってクーヤのこと抱きしめたいの我慢してるの！

もうダメだ、私」

聞き終わると同時に押し倒されてしまった。

あれ？ もしかして、これはヤバイんじゃないか。とクーヤは思った。

「どうしたらいい？ ねえ、どうしたら」

「とにかく落ち着いて。落ち着こう。焦ってもいいことはないってまず落ち着くのが大事。まずはそれから！」

落ち着け、落ち着け、と繰り返しながら、クーヤ自身は焦りまくっていた。

唯を悩ませている原因は明白だ。煩惱の虜になってしまったのだ。

無意識が情欲の牙を突きたてると命じているに違いない。対象は何を隠そう、この私。クーヤだった。

「クーヤ。苦しいよお」

「だー。落ち着けというに！」

抵抗むなしくぎゅっと抱きしめられてしまった。唯自身は自分の状態を把握しきれていないらしい。それが救いだっただ。しかし、いつまでも悠長なことは言っていられない。クーヤは諦めて実力行使に出ることにした。

「ぐえっ！」

ひき潰されたカエルのようなうめき声を上げて唯は倒れた。ほうほうの態だが抜け出すことができた。だがクーヤの側の代償も大きかった。唯の煩惱を握りつぶしてやった。右手が光っていた。

「落ち着けー。落ち着けー」

唯のため、そして自分のために念仏をあげることにした。

うずくまっている姿は見慣れた幼なじみだが、心には獣が巢食っていた。まさしく貞操の危機だった。花を散らすには早過ぎる。大きかった。自分のものよりも大きいかもしれない。様々な思いがクーヤの中で交錯していた。心臓が早鐘のように鳴っていた。

「ひどいよ、クーヤあ」

怨念のこもった眼差しを向けられてクーヤはたじろいだ。唯は地面に臥したままだ。目尻に涙をためている。

「ゆ、唯が悪いんじゃないかっ！ 目が、目がヤバかった。アレは本気の目だった。怖すぎ！」

「そんなこと言われてもわかんないよ！ 説明してよ。説明！ 人のち…… 大事なところ潰しておいて、そんな言い方ひどい！」

「じゃあどうしたら良かったんだよ！ あのまま抱かれてたら唯は襲っただろ！ 最後までしたくなっただろ！」

「そんなことしないもん！ クーヤのバカ！」

正座してにらまれるが、怯むわけにはいかない。思い出したくもないが、興奮した男性特有のそれを押しつけられた恐怖は簡単に薄れ

るものではなかった。しかし、説明したくない。説明すれば何か解決するのだろうか。わからない。唯のことを傷つける？ わからない。自分は男？ それとも女？ わからない。何もかもわからなかった。クーヤは発狂しそうだった。

クーヤは唯から距離を取って座った。座り方にも細心の注意を払った。

唯のほうからは何も言っていない。

クーヤのほうからも言うことはない。

時間だけが過ぎていく。

冷静になってくると、自分も反省するべき点があったように思える。けれども自分から歩み寄るのは何となく癪だった。ひとまず脇に置いておくことにした。

閉じ込められているから気が滅入ってくるのだ。

クーヤは駄目だろうとは思いつつ扉を引いてみた。軽い。頑強に閉じられていたのが嘘のように簡単に開いた。

「クーヤ？」

「なんか、開いてるんだけど……」

扉の外に犯人がいる、ということも無かった。クーヤは首を傾げながら地下室を抜け出した。

「上、調べる？」

「ううん。帰ろう」

クーヤが尋ねると、唯は力なく答えた。

外は日が落ちてとつくに暗くなっていた。

四という数字は死を連想させられるので縁起が悪いという話を聞いたことがある。

その時クーヤは迷信深い人間もいたものだ、と一笑に付した。

現在、クーヤは死者の呪いについて思いを馳せている。

現実逃避だった。

瀟洒な白いクロスが敷かれたテーブルについた人間の数は四人だった。

認めたくない現実。目を覆いたくなる連日。

男女比は三対一。

クーヤ自身をどちらに数えるべきか。それは目の前の男の顔を見れば一目瞭然だった。

白衣アンドスーツはいつにも増して上機嫌。

「ハーレム。ついにハーレムが完成した。選り取りみどりじゃないか。これが世に言うモテ期なのか。クーヤ、よくやった。誉めてつかわす」

「……バカなの？ この人」

唯のうるんげな視線に晒されたくらいではスノップの笑顔は崩れない。

クーヤと、そしておそらくナズナも諦めているが、まともに顔をつき合わせるのが初めての唯がスノップの人物像を掴みきれていないとしても、何の不思議も無かった。

「唯ちゃんだね。二人から色々話は聞いてるよ。噂通りだね」

スノップはニコニコしながら並べたティーカップにお茶を淹れている。

一度、直に会って話がしてみたい。

唯に頼まれては嫌とも言えず、クーヤはそれとなくスノップを誘ってみた。断って欲しいというのが顔に出ていたのかもしれない。ス

ノツプは迷うことなく誘いに乗った。スノツプ経由ですぐにナズナへも話が伝わった。とんとん拍子だった。

「どんな噂ですか？ 気になります」

「クーヤの親友だって聞いているよ。毎日どこでも一緒なんだって？」

「デタラメ言うなよ。そんなこと一言だって言っただろ」

「ひひひっ。隠すな隠すな。裏は取れているのだよ」

クーヤは誓ってそんな話をスノツプにした覚えがなかった。ナズナにもしたことがない。いったいどこから漏れたのだろうか。スノツプの言動は不可解だった。かまをかけられただけかもしれない。

「ナズナだって、クーヤのことには興味あるんだから」

「そーですね」

ナズナは表情一つ変えずに紅茶にミルクを注いでいる。角砂糖を一つ摘まんで落とし込んだ。

「さて、冗談はこれぐらいにして。何か聞きたいことでも？」

スノツプはまるで唯を挑発するかのように意地の悪い笑みを浮かべた。

「何が目的なんですか？」

「目的ねえ」

考えるそぶりを見せながら流し目を向けられる。

「目的というほどのものはないかな。クーヤからかうの面白いじゃん。可愛いし」

「……嘘ばっかり」

ナズナがぼそつと呟いた。

「あ！ まさかの裏切り。これは一本取られちゃったかなあ」

「まともに相手しても疲れるだけです。言いたいことしか言わないんですから」

バスケットからクッキーを摘まんでかじっている。目が合った。ナズナは一瞬固まって視線を逸らした。

「唯ちゃん、で良かった？ きみも出るの？ コンテスト」

「出ませんよ。クーヤの応援してます。全面的に」

口を挟むタイミングを計っているが、牽制球の投げ合いが激しくてなかなかスタートが切れない。腹の探りあいには苦手なクーヤだった。「じゃあ僕たち仲良くできそうだね。クーヤを応援してるのは僕も同じだよ」

スノップのにやけ面を横から張り飛ばしてやりたい衝動に駆られる。クーヤでさえそうなのだから、面と向かって話をしている唯の心中を慮ると同情を禁じえない。

「スノップさんってモテないでしょ」

唯は満面の笑顔で言い放った。急角度でえぐりこむように肝臓を打つべし。と、専属トレーナーに教え込まれでもしたのだろうか。さしものスノップも顔を引きつらせている。

「言動がイチイチ気持ち悪いんですよ。髭ぐらい剃ったらどうですか？ ナズナさんは優しいから指摘しないかもしれませんが……ちよつとアレですよ。それに美少女力って何ですか？ 女の子を数字でしか見れないなんて最低です」

「ふ、ふふん。乳臭いガキが何を言いやがりますか」

「その乳臭いガキの美少女力、知ってますか？ 二千五百ですよ。二千五百。もう一度はつきりきっかり言いましょうか？ 二千五百です」

トドメとばかりに叩きつけて、ティーカップを口元に運ぶ姿は貴婦人のように優雅だった。

ナズナが驚嘆交じりの吐息を上げた。

「感心しないで加勢してよっ！ 狂犬だよ、あの娘」

「えー。やだよ。悪いのは自分から咬まれにいつてるスノップじやん。それに昔言ってたじゃない。一度幼女に罵られて踏まれてみたいて。また一つ夢がかなったってことで」

「……平然と捏造するのやめれ。ナズナが言うと嘘に聞こえないだろ」

スノップは水のように紅茶をがぶ飲みしている。

口出ししなくて正解だったかもしれない。唯が味方で良かったとク

「ヤは思った。」

「あまり期待しないで聞きます。美少女力を簡単に上げる方法はありませんか？」

「それを知ってどーするの。所詮数字だよ。あんなもんは」

投げやりに言うのと、クッキーを三枚重ねて口に放り込んだ。ぼりぼりと音を立てて噛み砕いている。

「俺が言うのもなんだけどね。結局は人の好みだからね。一定の指標にしかないんだ。俺の敷いたレールの上を走らせるの？ クーヤに」

唯を黙らせるにはそれで充分だった。

スノップは興味が失せたのか、ポットからどばどばと紅茶を注いで、ナズナからシュガーポットを回してもらっている。

試されている。

流されるままにコンテストに出場することを決め、そしていま再び流されようとしている。しかし、クーヤはあえて乗ろうと思った。レールの上だろうとなんだだろうと、進むのは自分の意思だ。スタンバイミ。線路が途切れていたら歩けば良いのだ。

「スノップが敷いた錆びついたレールなんて一日あれば走破してやるよ」

クーヤが言うときスノップは形の良い眉を上げて不敵な笑みを浮かべた。

「いつになくやる気じゃないか。やるからには徹底的にやるぞ。美少女の真髄を体に叩きこまれてもいいんだな？ 男の尊厳を失うことになるぞ」

「脅して止めさせようとしても無駄だから。もう決めた」

クーヤが宣言すると、スノップは満足げにうなずいた。

「そうと決まればナズナ！ 教えてやれ。美少女の真髄を！」

「はっ？ 私？ なんで私？ 意味わかんないんだけど」

「美少女力一番高いのはナズナだろ。なにか秘訣があるはずだ。ちなみに俺も詳しくは知らん。辱めを受けさせてやればいいんじゃない

いか。たぶん」

「そんな……」

困ったようにちらちらと視線をよこされる。

クーヤもナズナにそんなふうに見られると赤面しそうになってしま
う。

「なんでもいいけど、やるなら早くやれば」

唯が言った。なぜか不満そうだった。

「唯もやるんだよ。一人より二人のほうが楽しいって」

「わ、私はいいよ。いまのままで充分だって」

クーヤは唯の右手を取った。示し合わせたように反対からナズナが
左手を押さえた。

「旅は道連れって言うしね」

引きずるようにして、三人で歩き始める。

「あ、あれ。俺は？」

「スノップは男だから関係ないでしょ」

ナズナに冷たく言い切られてはスノップも引き下がるしかないらしい。
い。

「納得いかねーっ！」

スノップの魂の慟哭は完全に無視された。

クーヤの目の前にはまな板と包丁。そばにはじゃがいもとたまねぎ、
にんじんが鎮座ましましている。

「ナズナ、これは……」

聞かなくてもなんとなく想像はつくが、まさかということも考えら
れる。視界の端にコンロがあって、鍋も置かれてあって、各種調味
料も目に入っているから、ほぼ選択肢は無いに等しいが、それでも
聞かずにはいられない。

「クーヤは裸エプロンにする？」

そういう選択肢もあったか。思わずクーヤは感心してしまった。状
況から料理を、材料からレシピを類推するのは浅はかだったらしい。

「……この人っていつもこんななの？」

何か言いたそうな顔をしつつも、唯は早速じゃがいもの皮をむき始めている。

「あーっ！ ストップ、ストップ。唯さんがやったら意味ないし。」

それに裸エプロン見れないし」

「こだわりますね」

「こだわりますよ？」

唯はためいきをついて、包丁をまな板のうえに置いた。

どこまで本気かわからない笑顔でナズナから白いエプロンを渡される。

裸は流石に恥ずかしいが、裸で無ければ恥ずかしくない。

クーヤはそう思って、下着の上からエプロンをつけてみた。

「マニアック」

「毒されすぎだよ。さすがに」

嬉しそうなナズナと呆れ顔の唯に囲まれてクーヤは後悔した。

もしかすると下着のほう恥ずかしいかもしれない。

しかし、この場にいるのは自分を含めて女性だけだ。男目線で自分を鑑賞する人間は自分以外にはいない。そうやって自分を納得させることにした。

「ほらほら。これ見て。凄いや。二千三百だつて。スノップが言うこともたまには役にたつね」

ナズナの手には美少女力測定機が握られている。表示を見ると確かに数値は上昇していた。機械の精度を疑いたくなくなった。

「いやー。こんなので上がるとは思わなかった。結構いい加減ね、これ」

笑いながら言うナズナを信用しても良いのだろうか。クーヤは不安になる。

「料理の腕には自信あるんだ。任せて」

腕まくりをしてやる気をみせつけてくれるが、聞きたいのはそういうことではない。美少女力と料理にいかなる関連があるというのだ

ろつか。見当もつかなかった。

「疑ってるでしょ」

半眼でにらまれて慌てて首をふる。

「花嫁修業してみましょ。私にもわからないんだって」

投げ渡されたじやがいもはクーヤの手の中にすっぽりと納まった。

視線を感じる。それも一人や二人ではない。朝から誰かとすれ違うたびに顔を見られてる気がして、クーヤは落ち着かなかった。

左手の人差し指に巻かれた絆創膏は特訓の証。ナズナの料理教室、名誉の負傷。全く自慢にはならないが、本格的に料理をするのは初めてだった。出来上がった料理――肉じゃが――を試食してみると思いのほか美味しくできていた。しかし、唯は何故か微妙な顔をしていた。味に文句はないと言っていたから、なおさら不思議だった。じゃがいもを咀嚼しながら、全く別のことに思いをめぐらしているように見えた。

ナズナに言うとも怒るだろうが、当初クーヤは彼女の特訓をほとんど信用していなかった。料理スキルを磨くことが美少女力の上昇に繋がるとは、思ってもみなかった。ところが、現実はどうだろう。注目の的だ。クーヤは改めて自分の美少女力を測定してみることにした。期待に胸が躍る。

……二千五十。

めまいがしそうだった。

「……こんなはずでは」

「クーヤ、馬鹿やつてる場合じゃないよ」

いつの間にそこにいたのだろう。背後から唯が手元を覗き込んでいた。急いで数字を隠そうとするが、見られたあとで隠しても意味がない。しかし、唯の表情はクーヤの痴態を見ても暗く沈んだままだ。明らかに様子がおかしい。

「かなりマズイことになってる。私がドジ踏んだせいだ。ごめん」

「ちよつと何？ どうしたの？」

クーヤが問いかけても、唯はうつむいたまま答えようとしない。教室のどこから押し殺した笑い声が聞こえたような気がした。実際には聞こえるはずがない。聞かせたくないことを聞こえないよう

にする配慮くらいは誰でも持ち合わせている。だから、それは錯覚だ。しかし、漏れ出た悪意は空気感染する。何よりも、泣きそうな唯の顔がクーヤの直感の正しさを雄弁に物語っていた。

「ここでは話せないことなんだね？」

「……うん」

クーヤは唯の手を取った。濃密に膨れ上がった悪意を肌で感じる。どこか二人きりになれるところはないだろうか。それはひとまず後から考えることにして、教室から飛び出した。とにかくそこにいたくなかった。

階段を下りて避難場所を探す。保健室に逃げ込むことにした。理由は適当にでっちあげれば良い。養護教諭に「気分が優れないそうです」と告げると、一瞥しただけでベッドを指し示した。ひと目で訳ありだと見抜いたのだろう。日和見主義とも言えるが、余計な詮索をされないのはありがたかった。

カーテンを閉め切ってベッドに並んで腰をかけると、唯は少しだけ持ち直したようだ。外界からは完全に遮断された。

「話してくれる？」

「うん」

唯はぼつりとうなずいた。中空にスクリーンが浮かび上がった。動画の再生が始まった。画面全体が薄暗いため、はっきりとは見えないうが、二人の少女が絡み合っているのが確認できた。地下室に閉じ込められたクーヤと唯だった。しかし、それは姿かたちこそ似ているが、決して二人ではありえなかった。言った覚えの無い卑猥な言葉が乱舞していた。

音声のサンプリングと編集。手法は容易に想像できた。見るに堪えなくなつてクーヤは再生を停止した。

「クーヤあ」

唯が泣いていた。細い肩を震わせて、声を押し殺して、それでも涙は止められなくて……そんな彼女にかけてやれる言葉をクーヤは持ち合わせていなかった。ただ肩を抱いて好きなだけ泣かせてやるく

らしいしかなかった。

こうしている間にも悪意は拡散していく。一度流れ出してしまえば、犯人をつかまえたところで意味が無い。二次、三次放流者……その先まで。永遠にいたちごっこを続けることになる。

自分は女のなりをしているが、それはあくまで仮の姿だ。影響はコンテンツで不利になるくらいで、それほど痛くない。唯は違う。傷つけられれば、生身の体が血を流すのだ。犯人が許せない以上に迂闊な自分が許せなかった。

犯人の目星はついていた。

だが、クーヤは迷う。これ以上騒ぎを大きくするべきなのだろうか。「クーヤ？」

「大丈夫。なんとかするから」

一人でやろう。可及的速やかに。誰にも気取られることなく。

翌日、唯は学校を休んだ。

音信不通。

クーヤが思っていたよりもずっと唯が負わされた傷は大きかった、ということなのだろう。話し相手は皆無。清々しいまでにはぶられていた。延焼の危険を冒してまで、クーヤに話しかけようとする猛者はいない。異様な雰囲気を感じ取ったのか。そわそわしていたアリサには個人的に釘を指しておいた。

空いた時間はスノップから渡されたゲームをしてつぶしていた。空欄が目立つようになってきていた。恐らく交換をしていないせいだ。ナズナの中ではどういう位置づけなのだろうか。ふと気になった。そう言えばアリサもプレイしていると言っていたような気がする。

……関係ないことを考えている。弱気になっている証拠だった。ウィルスのように増殖する動画を撃退する特効薬は無いものだろうか。

クーヤは上書き保存して電源を落とした。ゲームのようにセーブポイントまで戻って不都合なデータを書き換えることができれば、と

クーヤは思う。

懲りずにミズハナの身辺調査に乗り出す。

仮に成功したとしても、クーヤたちについた黒いイメージを払拭できるとは思えない。何よりこれ以上泥仕合をする気にはなれない。

男であることを暴露する。

インパクトは抜群だが、スノッブとの賭けには敗北することになる。まるでナズナと唯を秤にかけているようだ。気分の悪くなる想像だった。

蜘蛛の巣に絡め取られたように身動きができなくなっている。

唯のことを頼りにしていたんだな。

教室でただ一つの空席を見つめながら、クーヤはひとり思う。

まずはクラスメイトのモブオを放課後、校舎裏に呼び出すことにした。手法は古典的に。靴箱に手紙を忍ばせた。モブオを選んだのは、ミズハナ初来襲の際に、何事もなく唯をクーヤと偽って教えた前科があったからだ。モブオは一人校舎裏でうきうきしていたが、クーヤの姿を認めるやいなや露骨に顔をしかめた。予想通りいいやつだった。無記名で手紙を出したのは正解だった。

「なんだ。よりによっていらないうかよ」

モブオは悪態をつきながらも、色々教えてくれた。

男子の間で動画はどんどん広がっているが、一部を除いて悪ノリしているだけだということ。ユイがクーヤのために、一人で防波堤を築いていたということ。動画の出所はおそらくミズハナのところだろうということ。ネガティブキャンペーン自体は成功かどうか怪しいということ。少なくとも男子の間では、好評を博しているということ。百合カップルはおいしいらしい。

「ミズハナ陣営についても面白くないんだよね。下馬評だといまのところミズハナの圧勝だぜ。対抗馬というよりは穴扱いなんだよ、クーヤさんは。なんか変だし。まあ俺は面白ければ何でもいいんだけど。というわけで、今度みんなで飯いこうぜ。アリサと比べられ

るとツライけどさ。君ら二人ともそこそこ人気あるよ」

モブ才は予想以上にいいやつだった。

「個人的にお付き合いたいでもいいぜ」

「遠慮しておきます」

「あー、やっぱり男は顔なのか。ちくしょー」

本気で悔しがっているが、おそろくノリで言っているだけだろう。

一瞬あとには、晴れやかな笑顔を見せる。自分が女なら惚れていたかもしれない。

「お付き合いは無理ですけど、全部終わったら一緒に泳ぎにでもいきましようか？」

「そんなこと言うとか期待しちゃうよ、おれ」

鼻を鳴らしながら言うモブ才は、どこまでも冗談みたいな男だった。彼のことは信用してもいいのかもしれない。

「案外話せるやつだな。クーヤさんは。友達にも根回ししとくね。」

あんまりはしやぎすぎないようにつて。モチロン下心こみで」

とにかく味方は一人でも多いほうが良い。クーヤは曖昧に笑っておくことにした。本来の性別は口が裂けても言わないほうが賢明だろう。

何を勘違いしたのか、モブ才は楽しそうに笑っている。

「ところで、君たちは実際のところあの通りなの？ その……同性愛者？ いや、別に君らがそうだったとしても、どうだってわけじゃないんだけど。ほら、夢は広がるじゃん。みんなが一番気になつてるところはそこだと思うんだよ。君たち異常に仲いいしさ。妄想されて気分悪いとは思っけどさ。その……ここだけの話、教えてくれない？」

「それは下種の勘ぐりというやつですよ」

「下種でゲス」

クーヤの白い目に晒されても、さして気にならないようだ。どこでも誰とでもこの調子なら、警戒心を持たれることもなさそうだ。羨ましい性格だった。

「真面目に聞くけど、ユイさんが休んでたのってアレのせいなの？
答えたくなければ答えなくてもいいよ。普通に失礼だからな」

「……わからない」

「そっか」

モブ才は声の調子を落とした。

「なんか、ありがとうございます。突然相談したみたいになってしまつて」

「ああ。気にしないでいいよ。俺は学校生活が楽しければ、それでいい人だから。クーヤさんが言つたように下種なんだよ。噂話とか好きだしね」

初めて真面目な顔をして語るモブ才は、どこか気恥ずかしげに見えた。

「余計なお世話だとは思うんだけど、ユイさんのことをなんとかできるのはきみしかいないと思う」

そんなことは言われなくてもわかつているつもりだったが、モブ才の誠実さにクーヤは背中を後押しされたように感じた。

唯に会いに行こう。

素直にそう思えた。

「誰にも言つなよ。このこと。俺のクラスでの立場が悪くなるから」
「ええ」

クーヤは右手を差し出していた。どういうわけか、自然とそうしなくなったのだった。モブ才は軽く触れるようにクーヤの右手を取つた。そして恥ずかしそうにしながら、足早に去っていった。

心強い味方ができたような気がしたクーヤだった。

家の前まではすんなり来ることができた。しかし、そこで空也は冷静になった。勢いのまま呼び鈴を鳴らせれば良かったのに、はたと気づいてしまった。

理由が無い。

空也が唯と最後に会ったのはアレキサンドリア図書館だ。

本当は毎日のように学校で顔をあわせているが、表向きは会っていないし、彼女の窮状も知らないことになっている。クーヤは空也なのだから、気にすることはないのかもしれない。だが、空也は呼ばれもしないのに彼女の家を訪ねたことは無かった。無駄に緊張していた。

大義名分とまではいなくても、口実くらいは欲しい空也だった。彼女の欠席理由すらも空也は知らない。状況的に流出した動画のせいだとは思っているが、ただの風邪だという可能性もなきにしもあらず。

いつそお見舞いということにしてしまおうか。それなら、不審がられることもない。しかし、どこからその情報を手に入れたのか。考え始めるときりが無かった。手のひらに変な汗をかき始めていた。「人んちの前で何やってんの？」

突然声をかけられて、空也は驚きのあまり声を上げそうになった。寸前で飲み込む。臙脂色のジャージを着込んだ唯が立っていた。胸に名札が縫い付けられている。中学時代のジャージだった。

「なにつて。なにつて、唯こそ何やってんだよ！」

「走ってた」

若干息が上がっているし、顔もさくら色に染まっているから嘘ではなさそうだ。

「むしゃくしゃしてたから。走って気でも紛らわそうかと思って」

「そうじゃなくて！ 学校休んで何してんだよ！」

「だから走ってたって言ってるじゃない。空也、どうしたの？ 何かあった？」

唯は本気で意味がわからないといった感じで首を傾げている。

「心配するだろ！ あんなふうに、その……泣いて。次の日学校来なかったら！」

「あー……ああっ！ そうか。そうだったね。うーん。色々言いたいことはあるけど……いいや、それは」

そう言っても何でもないように笑われてしまうと、空也としては立つ瀬が無いのだった。杞憂だったと喜ぶべきなのかもしれない。しかし、本当に前日泣いていたのと同じ人間なのかと疑うほどの立ち直りの早さだった。

「とりあえず、上がってく？」

あっけに取られたままうなずくしかなかった。

そして、部屋に通された空也は焦りまくっていた。

唯はいない。汗をかいたからシャワーを浴びると言い残して出て行った。

空也自身も正確には覚えていないが、中学に上がったところから唯の部屋には入ったことがなかったような気がする。数年の間に部屋の中は様変わりしていて、とにかく落ち着かなかった。ベッド横の棚に座ったデイベアが、丸い黒い目を光らせて空也を見張っているように思える。

いたたまれない気持ちになって目を逸らすと、壁に飾られたハート型のボードに何枚も写真が貼ってあるのが目に入った。そこには見慣れた人物の姿が並んでいた。様々な角度から取られたクーヤの写真だった。手書きで「WANTED!」「GUILTY!」と、書き殴られている。見なかったことにした。

こんなことなら、いっそのことクーヤとして来たほうが良かったのではないか。ぬいぐるみにしても、ボードの写真にしても話が弾みそうな気がする。弾ませてどうする。そもそも彼女の顔を見られた

段階で空也の目的は八割以上達成できたようなものだった。それなのに思考停止に陥っている間に気がつけば窮地に追い込まれていた。「お前ならご主人さまの気持ちくらい簡単にわかるんだろうな」

小熊の両手を持って上下に動かしてみる。答えるはずもないが、なかなか愛嬌のある表情をしているように思えた。

「……人の部屋で楽しそうになにやってんだか」

「な、なにもしてませんよ。無罪です。音も無く入ってくるなよ。心臓に悪いだろ」

「自分の部屋に入るのにノックはしないでしょ」

濡れた髪をタオルで拭きながら、唯はベッドの上に座った。ほのかに漂うシャンプーの香りが空也の鼻腔をくすぐる。うつすらと色づいた薄い肩や、ショートパンツから伸びるこれまた薄い太ももに、空也はどきまぎしてしまう。

「今日の空也、ちょっとおかしくない？」

バックジューズにストローを挿して啜えた彼女の濡れた唇にまで、変に意識が向きそうになる。意識しないようにすればするほど、意識してしまう悪循環に陥って空也はダメになりそうだった。

「おかしいのは唯だろ。なんでそんなにケロっとしてるんだよ」

「ケロっとしてるように見える？ これでもはらわた煮えくり返ってるんだけど」

ちゅぱつとストローから口を離して、握りつぶした容器をゴミ箱に向かつて投げ捨てた。

「犯人は許せないよ。絶対に復讐してやるんだ。泣き喚いて靴の裏を舐めさせて、土下座しても許してやらない。後悔してもしきれないくらい後悔させてやる」

部屋の一点を見つめて、淡々と表情を凍らせて語る彼女はそれだけに恐ろしかった。

「……冗談だよ。まさか本気にした？」

「……まさか」

「そうだよ。そうだと思った」

精一杯の笑顔を見せる彼女にそれ以上詳しく聞く気にはなれない。空也は別の話題がないものかと、部屋の中を見回した。

「ねえ。あの写真の女の子のこと、どう思う？ クラスで仲よくないんだ」

とぼけようとしても、部屋のなかに飾られてある写真は一種類だけしか見当たらない。彼女の視線も同じところに突き刺さっている。

「へー。なかなか可愛い子だね」

「そうだよ。そう言うと思った。私、彼女のが好きみたいなんだ」

穏やかな微笑を浮かべて、おどけたように言う。

「いいんじゃない？ 仲いいんだろ？」

「うん。そうなんだけど。彼女も私のことを大事にしてくれてるって思うんだけど。たぶん、私の好きと彼女の好きは違うような気がするんだ」

唯の顔を見る勇気が空也には持てない。彼女の中では空也とクーヤが明確に区別されているのだろうか。それとも同一人物とは考えていないのだろうか。

「困らせたいんじゃないの。彼女には面と向かって言えないこともあるんだよ。空也になら言えるんだけど。自分でもわけわかんないなあ」と

そこで、改めて空也は彼女のほうに向き直った。綺麗だった。

一瞬でも目を離すと壊れてしまいそうな繊細さに息を呑んだ。空也の知らない唯がそこにいた。

「空也？」

「ああ。うん……それは困ったね」

「何よそれ。馬鹿にしてる？」

クスクスと笑う唯に合わせて、空也もぎこちなく笑った。まるで魔法にかけられたみたいだった。まさか幼なじみに見惚れてしまうなんて。一生の不覚。気の迷いとは思えなかった。

「なんか元気出てきた。前にこうやって二人で話したのいつだったかな。昔に戻れたみたいで嬉しい」

「そうですか」

空也は若干複雑な心境だったが、唯の調子が戻ったならそれで良いと思えた。

「うん。だから『クーヤ』呼んでくれる？ 彼女に話したいことがあるの。『空也』ならできるよね」

微妙にイントネーションを変えて発音する。

「それは……」

「私もめんどくさいことは言いたくないの。空也は彼女を呼んだら帰っていいから。なんならトイレ貸そうか？ 空也、トイレから抜け出すの得意だったよね」

「ああ。もう。わかったよ。トイレでマジックショー見せてやればいいんだろ。タネも仕掛けもあるから詮索するなよ」

空也はやケクソぎみに言い捨てて部屋を飛び出し、律儀にトイレに籠もり錠剤を飲み込むと、三分間クッキングも驚きの早さで唯の元へ舞い戻った。

「どうも！ 呼ばれたみたいなので来てみました！」

「お見舞いありがとう。まさか来てくれるなんて思わなかったからびっくりしちゃった」

あまりに白々しい棒読み加減に、あきれを通り越してただただ感心するほかないクーヤだったが、それよりも彼女の脇に置かれているもののほうが気になった。大きな白い鳩が一羽、鳥かこのなかで暇そうに首を振っていた。特に目を引くのは脚に取り付けられた細長い筒だ。

「懲りないね、唯は」

すぐに察しがついた。ネズミから鳩へグレードアップしているが、唯は何か仕掛けるつもりなのだ。

「何か勘違いしてるみたいだけど……送りつけられたのよ、コレ。昨日の夜に。贈り主もわかって、ミズハナさんなんだよね」

「ミズハナさんが？ 怪し過ぎる」

「私もそう思う。だから、一日かけて調べてみた。でも全然だめ。なんにもわからなかった。脚の筒に手紙が入ってたんだけど」

それは招待状だった。

ミズハナを追ってたどり着いたリゾート地への呼び出し。ユイだけではなく、クーヤも招待されていた。必ず二人で、と書き添えられている。

「どうしようか？」

「行きたいんだよね？ 聞くってことは」

唯は答えない。

学校を一日休んでまで調べていたほどだ。受け取ったその時から誘いに乗るつもりだったに違いない。一度痛い目を見たくらいで……いや痛い目を見たからこそ、雪辱を果たしたいはずだ。クーヤも同じ気持ちだった。

だから、クーヤは唯の手を両手で包んだ。

「私もやられたままだと悔しい。行こう」

「なんか今日のクーヤはクーヤじゃないみたい。女の子のほうがいいよ。絶対」

唯はきらきらとした目をしている。空也には一度たりとも向けられたことのない眼差しだった。まさか男としてのプライドを女の自分に傷つけられる日が来るとは夢にも思わなかった。クーヤは嬉しいような悲しいような微妙な心境だった。

「それで、私が男の子になるの。初めてはクーヤがいいな」

「危険な妄想をするのはやめてくれ。男に抱かれる気は無いから」

「じゃあ、女同士だったら良い？」

「それは……いや、やっぱり駄目だろ」

「そっか。そうだよな」

唯は心底残念そうに呟いた。

前回と異なり、到着時にはガイドが待ち構えていた。

スーツで身を固めたダメイドだった。

彼女は杓子定規に案内を申し出てからは一切口を開こうとせず坂を下り始めた。

クーヤはマップを確認する。前回から大きな変化があったようには見られない。もしかすると、クーヤでは気づけない変化があるのかもしれないが、そんな微小な違いまで気にし始めたらきりがない。マップ上には自分たちの位置が赤く示されている。

それを信用するなら向かう先には市場、そしてその先には海が広がっているはずだ。

「クーヤ、どう思う？」

「機嫌悪そうだね」

「そういうことじゃなくて」

「???」

「言うなれば、私たちは被害者なわけじゃない。全面戦争、宣戦布告するつもりなのかな」「それは……もしそのつもりなら、こちらに有効な手が無いのがわかってるのに向こうから接触してくるかな？」

「無条件降伏を迫るつもりなのかも」

「だったら、どうしようか」

「……クーヤに任せる」

「そっか。了解」

ダメイドの後ろについてまわりながら、二人はこそそこそと内緒話をする。なにしろ敵地のど真ん中だ。用心してもし過ぎることはない。それすらも傍受されている可能性は考えられるが、その時はその時だ。

それに公表する側にもリスクは付きまとう。毒をもって毒を制す、

という考えかたもあるにはあるが、汚点は汚点として記録される。

そこから先は泥試合で汚物のぶつけ合いだ。

それを避けたいのは彼女たちも同じはずだ、とクーヤは思う。

考え事をしている間に奇妙な市場に着いた。

初めは何がおかしいのか判断に迷うクーヤだった。けれども、歩くにつれて漠然とわかり始めてきた。

道の先に軒を連ねる店の数々。その数メートル前まで来ると、ポツプアップウィンドウが自然と浮かび上がり、商品や食事のメニューなどが提示される。しかし、クーヤたちが通り過ぎると、何事も無かったかのように静けさを取り戻す。

それらには目もくれず歩き続けるダメイド。

人の気配というものが皆無だった。屋敷の周りは人がいなくてもおかしくはないが、市場で全く人がいないというのは少し変だった。

けれどもダメイドは特に気にしていない様子なので、ここではそれが当たり前なのだろう。

寂れた市場を抜けた先には見渡す限り青い海が広がっていた。

水平線の彼方まで見通せる。空に向かっていきよきよきと入道雲が生えていた。

音もなく流れていきそうな細かな砂の上に鮮やかな金髪の少女が立っていた。

白いワンピースを着ている。小さな足を包むサンダルは睡蓮の花をイメージしたワンポイントが可愛い。

目深に麦藁帽子を被っているので顔は見えないが、まずミスハナで間違いないだろう。

「お嬢さま。お連れしました」

「ごくろうさま」

少女は帽子を脱ぐと、クーヤたちに向かって深々と一礼した。上げた顔を見ればやはりミスハナだった。

クーヤは内心少し身構えた。ミスハナの顔に陰が寄っていたからだ。
「ダメイド。あなた、説明していませんね」

「おつしやられる意味がわかりませんわ」

ミスハナの目が釣りあがった。射殺さんばかりにダメイドを睨みつけている。

「それではごきげんよう。あとは私抜きでお楽しみください」

役目は果たしたとばかりに逃げようとしたダメイドのスーツの襟首をミスハナは後ろからぐいと引き寄せた。

「待ちなさい」

「お嬢さま、首が、絞まって……います、わ」

「絞まっているではありません。これは絞めているのです」

まるで窒息せよと念じているかのようだ。

事情が知れないことには迂闊に動けない。それは唯も同じだった。二人して成り行きを見守ることしかできない。その間にもミスハナはダメイドへの責め苦を強めていく。

クーヤが気の毒に思い始めたところで、ダメイドが口を開いた。

「わかり……ました。わかりましたから、放して……ください。このままでは窒息してしまいます！」

「ようやく自分の立場というものを理解したようですね」

解放されたダメイドはゲホゲホと咽びながら喉をさすっている。

それを横目に、ミスハナはクーヤたちの方に向き直った。

「見苦しいところをお見せして申し訳ありません」

頭を下げて謝罪を述べる。

心の底から悪いことをしたと思っっているようで、ミスハナの顔には陳謝の気持ちがありありと表れていた。それだけにクーヤにはわからない。自分たちを陥れた人物と目の前に立つ人間のイメージが乖離していた。

「話は全て聞かせてもらいましたわ」

「聞かせて……無理やり吐かされたような気がします」

「あなたが正直に話そうとしないからでしょう。まあいいわ。少し黙ってなさい」

ダメイドを制して、ミスハナが事情を詳しく説明し始めた。

ミズハナの話によると、ここはミズハナのプライベートビーチらしい。

普通なら入ることはできないが、前回二人はダメイドの手引きによって誘い込まれたということだった。さらに地下室での一連の映像を校内にばら撒いたのも彼女だった。ミズハナはそんな内幕まで包み隠さず教えてくれた。

「本当に申し訳ないことをしたと思っています。飼い犬のしつけはきちんとしているつもりでしたが、こんなことになってしまつて。できれば穏便にことをすませてはいただけませんか？」

「……私はお嬢さまのことを思つて致しましたのに」

愚痴るダメイドのすねをミズハナは無言で蹴った。

「あう」

「黙つていろと言つたはずです。あなたが話すとややこしくなりますわ」

ミズハナにきつく叱りつけられてダメイドは涙目になっていた。

「擁護するわけではありませんが、悪意ある加工を行ったのはうちのものではありません。彼女が流したものを他の誰かがさらに加工したのでしょう。しかし、そうなることくらい予想できそうなものです。完全にこちらの落ち度です。どうすれば許していただけますでしょうか」

クーヤは唯の様子をうかがい見た。事の真相はわかった。あとは彼女のさじ加減に任せたかった。傷ついたのは彼女だからだ。クーヤが決められることではないと思つた。

「元の動画、見せてもらえますか。ダメイドさんが流したやつ」

「それはかまいませんが、その……ここで？」

「はい」

無表情で言う唯を訝しがりながらも、ミズハナはうなずいた。

中空にスクリーンが浮かび、映像が流れ始めた。それには全く手が入っていなかった。ありのままの二人が映し出されていた。音声はほとんど拾えておらず、それは聞きようによつては変な風に聞こえ

ないこともないという具合だった。

「あの……あのですね。お二人は凄く仲が良さそうに見えたんです。コンテストにはマイナスになるでしょうが、冷やかすくらいの軽い気持ちだったんです」

「ダメイド、黙りなさい」

映像の中の二人を客観的に見せられると、まるでギャグのようだった。クーヤは毒気を抜かれた気分だった。

「償いは、してもらいます」

映像が終わると唯は静かに告げた。

プロモーションムービーを撮ることになった。

わけがわからないクーヤだったが、それで手打ちにすることに決まった。全ては唯の一存だ。誰も口出できるはずが無かった。

クーヤ、唯のタッグとミズハナ、ダメイドのタッグでガチバトルをする。

種目はビーチバレー。

そういう煽り文句だ。けれども実際は唯、ミズハナ、ダメイドの三人は完全に引き立て役に徹することが事前に取り決められた。

「ひーん。こんなのってあんまりです」

布面積が小さく色々なところが危ないマイクロビキニを着せられたダメイドが膝を抱えて悲鳴を上げた。

ダメイドのスタイルは悪くない。あの格好で飛んだり跳ねたりしなければならぬとは、悲惨の一言だ。

「諦めなさい。自分で蒔いた種です」

抜群のプロポジションを誇るミズハナは競泳水着を着ている。

ビキニや柄のついたワンピースなども試してみたが、最終的にはそこへ落ち着いた。理由は何を着ても目立ってしまうから、という何とも悔しい話だった。

準備運動に余念が無い唯は一人だけスクール水着だ。

胸元にはデカデカとユイの二文字。学校指定のものだから目立たないと思っっているのかもしれないが、貧相な体には良く似合っていた。「何か失礼なこと考えてない？」

「そ、そんなことないってば。いやだなあ」

相変わらずの勘の良さにクーヤは内心舌を巻いた。

「なんかよくわかんねーけど、俺なんかでいいの？」

「はい。よろしく願います」

撮影役にはモブオを呼び寄せた。

彼には撮影のコンセプトだけを話して、詳しいことは話していない。ビキニを着たクーヤの胸元をちらちらと見ているのは丸わかりなのだが、騙している分くらいはサービスしてやってもいいかな、とクーヤは思う。

「私のなら堂々と見てもいいですよ」

「あつ……や。違うんだ。これはその。なんていうか……」

クーヤもナズナにやられたから気持ちはよくわかる。慌てなくてもいいのに、と思う。なにしろクーヤは見られて減るものなど最初から持ち合わせていないのだから。

「おう。じゃあお言葉に甘えてたまに見させてもらうよ。バッチリ脳裏に焼きつけておくれ。絶対に消去しないからな」

胸を張って自慢するように言うのはなんだかおかしかった。

ネットを挟んでミズハナたちと対峙する。

あとで編集を挟むのでゲームそのものは小細工なしで進めることに決めた。二セット先取の三セットマッチ。各セットは二十一点目を先に決めたほうがものにする。両手で体を隠すようにしているダメイドはおそらく戦力にならない。唯による復讐劇の幕開けを予感させた。

本人のたつての希望により、ゲーム開始のサーブは唯から始めることに決まった。

高々とボールを投げ上げると、跳びあがり、全身を鞭のようにしならせ思いつきりボールを叩きつけた。

「死ねっ！」と謎の掛け声を上げて気迫を込めていたような気がするが、クーヤは聞かなかったことにした。

剛速球がダメイドの顔面目がけて迫る。唯は小柄だが、運動神経は研ぎ澄まされている。並の女子なら二対一で勝負をしても唯が勝ちそうな気がする。ダメイドが反応できると思えない。つくづく恐ろしい女だった。

ダメイドは恐怖に顔をひきつらせている。そんな彼女の元に颯爽とかけつける影があった。コートの反対側にいたはずのミスハナだ。唯の目論見を看破したのだらう。余裕の笑みを浮かべて、ボールをレシーブする。

「ダメイド。上げなさいっ！」

「は、はい」

へなへなと打ち上げられたボールを勢いよくスパイクする。狙いすましたようにコートの隅へと突き刺さった。

「おー。すげー」

審判役も兼ねたモブオが拍手をおくる。

「ちっ」

ボールを拾い上げながら唯は舌打ちをする。

クーヤは悟った。これは実質唯とミスハナの一騎打ちになる。ユイの弾丸サーブを安々とレシーブして得点まで決めて見せたミスハナにクーヤが太刀打ちできるとはとても思えなかった。

ならばクーヤのやるべきことは一つだった。

殺伐とした空気になるべく画面越しに伝わらないように可愛いらしい少女を演じるのだ。それが唯に求められていることでもあると、自分を納得させる。クーヤが主役というのは建前で、ゲームの暗部を隠すために配置されたコマだということを瞬時に理解した。

サーブ権がミスハナ側に移った。コントロール重視の素晴らしいサーブが飛んできた。クーヤに取れないこともない、そして唯からは遠い絶妙なサーブだった。クーヤが駆け寄ってレシーブすると、唯から非常に打ちやすいトスが上がった。ジャンプして敵陣、二人の

間に打ち込むと、ダメイドがミスして点が入った。

「なかなかやりますわね」

できた人だった。唯の要求通りに不自然なくクーヤに華を持たせる。わかっていても普通はできない。生徒会名誉会長を自称するだけのことはあった。

ミズハナは殺意の衝動に溢れた唯のスパイクを難なくレシーブし、適度に点数を稼ぎつつ、時には味方のミスを誘発する。全てはゲーム展開が単調にならないように演出するためだ。

一セット目はクーヤたちが取り、二セット目はミズハナたちが取った。

ほとんどミズハナが一人でゲームをコントロールしていた。二セット目の途中からは唯もセットを奪われないように、露骨なダメイド狙いをやめてゲームに集中していた。それにも関わらず、結果を変えられることはできなかった。

「あの人、何なの？ おかしくない？」

玉の汗を浮かべて、肩で息をしながら毒づく唯に水分補給のためのボトルを渡してやる。

クーヤもミズハナの運動能力の高さには驚いていた。ユイがスポーツでこれほど手玉に取られているのを見たのは初めてだった。

「唯の要望を素直に聞いてくれてアレだもんね。ポテンシャル高過ぎ」

「クーヤ、相談したいことがあるんだけど」

耳打ちされてクーヤは目を見開いた。「本気？」と尋ねると、唯ははつきりとうなずいた。元々唯の気が晴ればそれでいいのだから、クーヤに反対する気は起きなかったが、さすがに耳を疑った。

「好きにしていよいよ」

クーヤが言っと、唯はミズハナに向かって叫んだ。

「最終セットはヤラセなしでお願いします！」

ミズハナは一瞬目を丸くしていたが、彼女が本気で言っているのがわかると、嬉しそうに笑った。

「いいですけど……勝ってしまいますわよ？」

「勝つのはクーヤです！ クーヤは実力の三割ほどしか出してません！」

「ええ！？」

唯に背中を押されるが、そんな話は見たことも聞いたこともなかった。どんなに頑張っても自分が彼女のように動けるとは思えない。ましてや相手はミズハナだ。実力勝負で倒せる理屈があるなら、すぐに教えて欲しい。

「ばか。結果はどうでもいいのよ。どうせあとで編集するし。クーヤが主役なんだから、ここはハツタリでも何でもかましてインパクトを植えつける場面じゃない」

囁かれてクーヤにもやっとな事情が飲み込めた。それなら話は簡単だった。

「いよいよ私の真の力を見せるときが来たようですね。あまりに単調で退屈していたところですよ。圧倒的な実力の違いというやつを教えてさしあげましょう」

「クーヤ。それじゃ悪役だよ……」

何はともあれ運命の第三セットが開始された。

「あー、私も行きたかったなー。みんなで楽しく遊んでたなら誘つてよ。飛んで火にいる夏の虫とは私のことなのにー」

「ナズナは関係ないじゃん。学校違うし」

「そーだけどさー。一人だけ男を呼ぶくらいなら、私を呼んでくれてもいいじゃない。もしくはアリサさんとかさ。どうでもいい脇役面のモブオ？ とかいう人よりは、アリサさんと呼んだほうがみんなやる気出たはずだよ。唯さんもそう思うでしょ」

「アリサさんはダメだって。ミスハナさんが発情しちゃうから。それに遊んでたわけでもないし」

身を乗り出すようにして聞き入っていたナズナだったが、話を最後まで聞き終えると急に不貞腐れ始めた。

「クーヤの学校生活は楽しそうでいいなー。ロマンスにあふれててそれに引き換え私は……籠の中の鳥みたい？ 話し相手になつてくれるのはスノツブくらいだしさー」

「スノツブのこと嫌いなんだ。意外」

「好きとか嫌いとかじゃないの。スノツブはなんていうか……なんと言うんだろ？ 変態だし。嫌いじゃないんだけどね」

ナズナは紅茶に角砂糖を二つ落とし込んでスプーンでかき混ぜている。

テーブルを三人で囲んでいるのはいつも通りだがメンバーが異なっていた。

それに空也の性別も。

唯と二人でいることが不自然にならないようにするためにはクーヤでいるしかないのだが、そのせいで一日の大半を女の姿で過ごすことが多くなってきた。それに伴って空也の体にも変化が生じていた。薬の持続時間が徐々に長くなっている。そのうち完全に女になつてしまいそうな気さえしてくる。性別が完全に逆転したときに

自分はどうなってしまうのか。そんなことを空也はたまに夢想する。

「それで、結局どうなったの？ 試合の結果は」

「負けたよ。完敗」

「クーヤがあそこまで役に立たないとは、さすがに私も思わなかったよ」

「役立たずって……まあそうだけど、そんな言い方しなくても」

制限を解除されたミズハナは水を得た魚のようにコートを縦横無尽に走り回った。

クーヤがどうこうと言うよりはミズハナが化け物すぎた。

その姿はさながら鬼神のようだった。

カーブ、シュート、スライダー、そして驚異的な速度のストレート。一人だけバレーボールをしていなかった。

事実、唯も全く歯が立たなかった。当然ながら、第三セット目は全てお蔵入りだ。

ノーカットでミズハナのプロモーションムービーができてしまうのだから、手の施しようがなかった。

「パレオをヒラヒラさせて、これ見よがしにおっぱい揺らしながらやってたのは、どこの誰ですか」

「……水着を選んだのは唯だろ」

「だって、プロモ的にはアレが良いと思ったんだもん。仕方ないじゃない」

「それで、問題の映像は？」

「まだ、完全にはできてないんだけど」

一分半に編集したプロモーションムービーを流してやると、ナズナは瞳を輝かせながら見入っていた。シュートバージョンとロングバージョンの二種類を用意する予定で、完成していないのはロングバージョンのほうだ。

ちなみに監修はモブオ。

是非自分にやらせて欲しいとせがむだけあって、素晴らしいものを仕上げてくる。

「これは、なかなか」

どこから現れたのか、スノップがナズナの隣でムービーを鑑賞していた。

「エロいな。クーヤが一番エロい。本能への訴求力^{そきゅうりょく}がずば抜けている。でき上がったらあとで俺にも回してくれ。一人でじっくり楽しみたい」

三人の痛い視線がスノップを突き刺している。

「いやいやいや！　じっくり楽しむって変な意味じゃないから。何を想像してんだ、お前ら。落ち着けよ！」

「落ち着くのはお前だ」

クーヤはスノップの頭をしばいた。

「自覚ないのか。まさか」

スノップは驚きをあらわにして、クーヤと映像の間を何度も見返している。

「言っている意味がわからない」

「そうか。ならいいや。クーヤもだいたいぶ美少女が板についてきたみたいで俺は嬉しいよ。このまま邁進してくれ」

肩をぽんぽんと叩かれた。

何か裏がありそうな機嫌の良さだった。やけにあっさりしているし、理性的であるようにさえ感じる。

一言であらわすと、およそスノップらしくなかった。

「スノップ？」

「なんだ、変な顔して。見つめられても何もないぞ。美少女に熱い視線を向けられるのは嫌いじゃないが」

ふざけている声にもどことなく覇気が無いように感じる。

「いや、何でもない」

けれども、クーヤは深く詮索しなかった。

スノップにはスノップの事情があるのだろう。クーヤが聞いてもうまくはぐらかされそうな気がする。

「来週にはスピーチと投票があるんだろ。いよいよ本番だ。まあ頑

張りたまえよ」

スノップはそれだけ言うと、あっさりと姿を消した。

「二人ともごめん。私も用事あったんだ。あとは二人で好きにしたいから」

別れの挨拶をする間も惜しむようにナズナも慌ただしく席をはずした。まるで用事があったというよりは、新しく用事ができたようだった。

「行かしちゃっていいの？」

「追えないんだ。実は」

「そうなんだ」

唯はクーヤの言葉を咀嚼^{そしゃく}するように二人の消えた先を見つめていた。

「待ってスノップ！ スノップ、待っててば」

「おー、なんだ。どこにも行きやしないぞ」

ナズナがスノップを追いかけて来てみれば、彼はユグドラシルのふもとに立って、回転する塔を眺めていた。

進入禁止区域のぎりぎり手前だ。

ユグドラシルの回転に巻き込まれると危険なので、半径三百メートル以内は立ち入りが固く禁じられている。

ナズナはこれまでユグドラシルにここまで近づいたことはなかった。なんとなく嫌な気分になるし、悪寒^{おかん}のようなものを感じるからだ。

スノップはしゃがみこんで地面を掘り返すと、楕円^{だえん}形の何かを取り上げた。鶏の卵くらいの大きさだった。ナズナは気分が悪くなってきた。その黒ずんだ卵を見ると、全身が総毛立つようだった。

「ナズナ、これが何かわかるか？」

「知らない」

即答したが、どこかで見た覚えのあるような気がする。しかし、いくら記憶を洗いざらい探してみても、一向に思い出せなかった。

「そつだよな」

スノップは片手で何度かお手玉すると、白衣のポケットの中にそれ

を押し込んだ。

「もう長くないんだ。ここは。もうすぐ終わりが来る。あいつに賭けてみたんだが、どうやら間に合いそうに無い」

スノップが何か画策していたことは知っていたが、ナズナが頼まれていたのは空也の気を引くことだけで、具体的には何一つ知らされていなかった。ただ、なんとなく強迫的にそれをしなければなら無いという意識は常に存在していた。

「ユグドラシルのコントロールが切れかかっている今なら、ナズナにもわかるんじゃないか？ 自分の生まれた意味が」

スノップはいつもどこか飄々としていて、捉えどころの無い男だと思っていた。今でもその雰囲気は失われていない。けれども、何か重要な話をしているということはナズナにもわかった。

「知らない」

知りたくなかった、というのがナズナの本音だ。

スノップの切れ長の瞳に射すくめられたようだった。ナズナをまるで品定めするように見ている。冷酷な瞳だった。

何か恐ろしい真実を告げられるような気がして、ナズナはスノップに背を向けた。

「ナズナ！」

腕をつかまれて引き止められた。頭の奥がガンガンと鳴っていた。

ユグドラシルの軋みが反響しているようだった。

何故自分がこんな目に会わなければならないのか。

平常運転。いつもの日常。クーヤたちのお茶会。

どこにもおかしな予兆は無かったはずだ。楽しくおしゃべりして、

それが永遠に繰り返すのだと思っていた。

「何も知らないままで消えて欲しくないんだ」

「消える？ ユグドラシルが？」

意図的にスノップの言葉を履き違えた。

ぐらぐらと地盤が揺らいだように足元がふらついた。スノップが恐ろしいくらいに真剣な顔をしている。頭痛がひどくなって、涙があ

ふれそうだった。

「消えるのは……お前なんだ。ナズナ」

「冗談、キツイよ」

笑い飛ばそうとしたが、とてもそんな雰囲気ではなかった。

……笑えない。

「冗談じゃないからな」

逆にスノップは笑っていた。悪魔が乗り移ったような酷薄な笑みだった。乾ききった感情の残滓がわずかに垣間見える。そんな顔をしていた。

「これは懺悔ざんげなんだ」

「そんなの聞きたくない！」

ナズナは耳を塞いで立ち去ろうとした。けれどもスノップが許してくれない。憐憫れんぴんを含んだ眼差しから逃れたい一心でスノップの頬を叩いた。

「あ……」

「気にしないでいい。殴られてもしかたないことを俺はしている。わがままにつき合わせてすまない」

スノップは腫れた頬を押さえることもなく無感動に告げた。

「謝ってもらいたくなんか無いよ……」

ナズナは言葉が続かなかった。スノップが泣いているように見えたからだ。彼の胸中は計り知れない。だが、嘘を吐いているようにも見えなかった。

「本当なの？」

「ああ。だから最後まで聞いて欲しい。もう時間が残されて無いんだ。お前には」

ナズナの人生で一番長い夜が始まった。

良貨は悪貨を駆逐する。

匿名でばら撒いたクーヤのプロモーションムービーは瞬く間に広まった。

それはまるで山の奥地から染み出した清流が広がりながら海に流れ込むようだった。クオリティの高さで圧倒されて悪質な動画は自然と淘汰された。

思わぬ副産物もあった。

クーヤとミズハナの対立という構図は依然として残っていたが、それはもはや純粋なゲームとしての対立でしかなかった。健闘を称えあつて握手をするシーンを盛り込んだのが功を奏した形だ。ミズハナからアリサファンクラブに誘われるほど気に入られてしまったクーヤだったが、それは固辞しておいた。クーヤはアリサに対して恋愛感情等は全く持ち合わせていない。それをいくら説明してみても、ミズハナは納得してくれなかった。

「好きでもない男とお弁当を広げたりするはずがありませんわ！」それが彼女の言い分だった。

クーヤとしても正体をばらすわけには行かないので、それ以上説得するのは諦めた。

プロモーションの甲斐もあつてクーヤの人気はうなぎのぼりだ。

ミズハナと同じく珍獣扱いされているらしい——モブオが教えてくれた——のは気に食わなかったが、美少女力も二千五百まで上昇した。

ミズハナには及ぶべくもないが、唯には並んだ。

これでコンテストの優勝も夢ではなくなってきた。

必死に隠しているが、クーヤは小躍りしそうなくらい嬉しかった。一瞬でも気を抜くと笑みがこぼれ落ちてしまう。

「だらしな顔しちゃって」

「ひよ、ひよんなこほないお」

唯にほつぺたを両手で引つ張られて横に伸ばされた。咳払いをひとつして、顔を戻そうと努力してみる。直りそうになかった。

「あー、はいはい。クーヤは可愛い、可愛い。愛され系で良かったね」

唯も日に日に元気になって、憎まれ口を叩くようになっていた。

まるで全ての歯車がはまったように、何もかもが順調に進んでいた。ただ一つ気がかりなのは、何日も前からアリサの姿が見えないことだ。

モブオに聞いてみたが、どこからも情報は流れてこないらしい。

気にはなるが、それは気にしても仕方の無いことだと気持ちを切りかえる。どうせやるなら全力で勝ちを目指す。悔いは残したくなかった。

コンテストのスピーチ、そして投票日が迫っていた。

薔薇色の学園生活を謳歌するためには、不動の地位を築き上げておいて損はないはずだ。

男は度胸、女は愛嬌。

両方兼ね備えた自分が負ける未来などあるはずがない。

クーヤは何度も自分に言い聞かせる。

生まれ持った才気、カリスマ性でミスハナに優れていると思えるほどクーヤは自惚れてはいなかった。

唯と二人で何度も原稿を練り直し、スピーチの練習にも膨大な時間を費やした。

嫌な顔ひとつせず付き合ってくれた彼女に理由を聞いてみた。

「私のクーヤがあんなのに負けるなんて許せない」

素敵過ぎる答えだった。

「これはクーヤ一人の戦いじゃない。何でも自分の思い通りになると思ってるあのお嬢さまに、ぜーったい敗北の味を教えてあげるんだから！」

「何でも思い通りになると思ってるのは唯なんじゃ……」

クーヤの突っ込みは華麗にスルーされた。

そして準備万端、首尾は上々。

ついに決戦の舞台にクーヤは上った。

ミズハナのスピーチは既に終わり、会場は程好い熱気に包まれている。

前座は終わり、真打の登場だ。

と、意気込んだのも束の間、壇上に立った瞬間、クーヤは真っ白になってしまった。

クーヤはこれまでの人生で衆目に晒される、という経験をしたことが無かった。

無数の目にとらえられた瞬間全てが吹き飛んだ。

飽きるほど繰り返し脳に刷り込んだはずの原稿は最初の一文すらも思い浮かばず、声帯はストライキを起こした暴徒のように動いてくれない。目の前が真っ暗になって脳裏にちらつくのはゲームオーバーの二文字だけだ。

聴衆のざわめきも遠く、とても復帰できそうになかった。

入学からこれまでの日々が走馬灯のように脳裏を駆け巡る。

女のふりをして全校生徒を騙し通してみせると誓ったのが、まるで昨日のことのように蘇った。そんなことを思い出すくらいなら原稿の内容を思い出して欲しかった。

「クーヤさん、頑張ってー」

ひどくやる気の無い声援が観衆の中から飛んできた。

顔を上げると、カンペと書かれた立て札をモブオが振っているのが目に入った。カンペの三文字以外は何も書かれていない。即席で用意したのがバレバレだった。周りからは失笑が漏れていた。

けれども、いくら笑われようが一向にモブオはやめる気が無いようだった。立て札にもたれかかりながら「がんばれー。がんばれー」とアンニュイな声援が続いていた。

クーヤは不覚にも感動させられてしまった。そして冷静になることもできた。原稿を完璧に思い出した。

そこから先は、自分でも驚くほど簡単にスピーチを終えることができた。

「クーヤ、なかなか良かったよ」

「ま、俺のおかげだけど」

舞台裏では唯のほかにモブオも待ち構えていた。興奮しているのか、モブオは少し顔が赤かった。

「デートしようよ。クーヤさん。一回でいいから」

「どさくさに紛れて変なこと言っなっ！」

クーヤも興奮していた。一度くらいモブオとデートしてやっても良いかもしれないと本気で思えた。

「ユイさんでもいいよ」

「間に合ってます」

クーヤの肩を唯はぐいっつと抱き寄せた。モブオの前でそんな大胆な行動を取ってしまうくらいには彼女も気が高ぶっているらしい。

「あはは。君たちホントに仲いいね」

モブオは楽しそうに笑いながら、少しだけ残念そうな顔をした。投票結果は即日開票された。

コンテストの速報を携えてクーヤは90's nostalgiaを訪れていた。

優勝こそ逃したものの、十二分に満足のいく結果を残すことができた。

スノッブの鼻を明かすことができる。

それはそれで愉快なことだが、それよりも協力してくれたナズナに一言お礼を言いたかった。

けれども彼女には会えなかった。

いつも笑顔で迎えてくれた彼女はどこにもいなかった。

アレクサンドリア図書館のほうまで探しに行ってみたが、それも徒労に終わった。

最後に残ったのは、どう考えても彼女が近寄りそうに無い場所だけ

だった。

一縷の望みをかけて、クーヤはそこへ向かうことにした。

「遅かったな」

ユグドラシルを眺めたままでスノップが言った。

何の感情も籠っていない恐ろしいほど透き通った声だった。

そしてクーヤは気がついた。

クーヤの眼前にそびえる巨塔はもはや動いていなかった。

いったいいつから？

クーヤが最後に目にしたときは、不安定によるめきながらそれでも回り続けていたはずだ。具体的にいつ止まってしまったのか。その瞬間を見逃したことだけは確かだった。

ユグドラシルは傾いたまま、まるで恨み言を漏らすかのようにクーヤを見下ろしていた。

遅れて駆けつけた唯もただならぬ気配を感じたのか、黙りこんだままクーヤの後ろに立ち尽くしていた。

「賭けは俺の負けでいいよ。実際俺は負けたんだがな」

スノップは乾いた笑い声を上げた。ひどく神経質な響きだった。

ただひたすらに笑い続け、それすらも疲れたのか、息が続かなくなるとようやくクーヤのほうを振り向いた。

「やれるものが無くなったから賭けが成立しなくなった。と言ったほうが正確かな。無くなるんだ、ここ」

「無くなる？」

「そう。何もかも無くなる。ユグドラシルもアレクサンドリア図書館も、そしてナズナもいなくなった」

「全然話が見えない。スノップ、いつもの冗談なんだろう」

「……ナズナと同じことを言うんだな」

スノップは苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。

そして無造作にポケットに手をつ突っ込むと、真っ黒な卵型の何かを取り出した。

よく見えるように掲げて見せられても、クーヤには全く見覚えがな

かった。

スノップはゆつくりとそれをクーヤに向かって放り投げた。手のひらの上で何度かお手玉したが、なんとか落とさずにすんだ。間近で見てもそれが何なのかは依然としてわからなかった。しかし妙にずしりとしていた。不吉な重さだった。体を底冷えさせるような冷気を発しているように思える。

「それ、美少女の元なんだ。ユグドラシルが毎日放出してただろ？ 美少女を供給し続けるためにここはあったんだ。クーヤは何回か拾いに行ったことあるよな」

スノップは一息つくと口の端を歪めた。

「お前はずっと一緒にいたのに気づかなかったんだ。結局のところ」「この人何を言ってるの？」

スノップの言っていることが理解できないのはクーヤも同じだった。できない、というよりはしたくなかったのかもしれない。

理解を拒否していた。当然その可能性が頭をかすめたことは何度もあった。けれども、考えないようにしていた。

「ナズナが生まれたのはいつだと思う？」

「いつって……十五年前だろ」

「そうだな。そして俺とナズナは兄妹だ。そういうことになっている。驚いたか？ 当然血は繋がっていない。義理の妹さ。ナズナは最後まで信じていた」

「やめるよ。笑えない冗談を言うのは」

クーヤは笑おうとした。そしてスノップは笑っていた。

「結局のところ最後まで信じていたわけだ。お前も。彼女だけは特別だって。信じたくなかったんだよな。こんなものは現の幻に過ぎないなんて」

「ナズナもグルになつて騙してるんだろ」

受け入れられない現実を受け入れないでやり過ごす。それが可能な時代にクーヤたちは生きていたはずだ。

「ユグドラシルが昔なんて呼ばれていたか知っているか？ バブル

の塔だよ。神の不興を買って破壊された古のバベルの塔をもじったんだな。愛されなかった人魚姫は泡になるしかないそうだな。なかなか洒落てるだろ？」

「スノップ、いい加減種明かししてくれよ。つまらない冗談に付き合わされる身にもなれ」

クーヤは笑うしかない。スノップも笑うしかないようだ。

「ナズナは美少女だった。そして愛されない少女は泡になった。ここを訪れる人間は三人だけだ。それだと全然足りない。それが答えだ」

スノップは笑った。笑い続けた。そしてひとしきり笑い終わると姿を消した。

残されたクーヤは体の内側から大事な何かが抜け落ちていくのを感じていた。

ナズナに二度と会えない。そう思うと膝が笑いだしそうだった。

「クーヤ！ しっかりして！」

崩れ落ちそうな体を抱きとめられた。

「私には全然何がなんだからわからないけど、アイツがいけ好かないやつってことだけははっきりしたわ。三秒待つから、その間に復活して説明！」

意志のこもった強い瞳をしていた。

混乱という泥沼に浸されかけたクーヤを救い上げる理性の輝きだった。

「三秒って……短すぎないか？」

「クーヤならそれで復活できるでしょ。それ以上は待てない。時間は有限よ。というわけで説明して」

「ナズナのこと嫌いじゃないのか？」

「嫌いよ。だから何？ それが何？ 重要なことなの？」

矢継ぎ早に質問が飛んでくる。

クーヤが答えられないでいると、唯の手がクーヤの胸に添えられた。そしてそのままわしわしと揉み始めた。

「ちよつと、唯！ こんな時に何考えてるの？ ちょ、やめ」

「説明してくれないんだつたらやめない」

「や、やめっ！ 説明するから！」

油断も隙もあつたものではなかった。

「空也が女の子になつて理由だつて私は聞いて無いんだから。賭けとかユグドラシルとかバブルの塔とか」

クーヤは重要と思われることだけを端折^{はしよ}つて唯に伝えた。

クーヤにも全容は見通せていないことはそれでわかってもらえたが、唯は難しそうな顔をして考え込んでいる。

「アリサってナズナさんだね」

確認するように呟いた。

「アリサがナズナ？ そんな……」

「クーヤにやたら馴れ馴れしかったし、料理の味付けが一緒だったし、数日前から休んでたし、美少女力も高かったし……何か思い当たる節はない？ 腹立つけど、二人だけの思い出とか何でもいいから思い出して」

空也とナズナの思い出。

二人だけの。

クーヤはスノップからもらったゲームを起動した。

彼女との思い出らしい思い出といえば、それしか思い当たらなかった。

彼女が覚えていて欲しいと言った記念の数字。

「……9784150115319」

「何それ？ ってわかった。クーヤはアレクサンドリア図書館に行つて、その番号を打ち込んでみて」

「どういうことだよ」

「行けばわかるから。それにしても腹立つわ。お前ら全員死ねばいいのに」

「唯さん？」

「わかつたら早く行つて来い。私は私で別の用事を済ましたら、行つてあげるから」

唯は既に走り始めていた。

クーヤもわけがわからないなりに地面を蹴った。止まってしまったらそこで全てが終わってしまうような気がして走り出さずにはいられなかった。

アレクサンドリア図書館に着いた。

唯の指示通りに番号を検索すると、一冊の書籍がヒットした。

ドクター、ジニアの日誌。

地下九十五階に寄贈されていた。貸し出し件数はゼロ。とにかく読んでみないことには何もわからない。

クーヤは一心不乱に地下深くに潜っていく。

年齢認証の警告が鳴っているが、どうせ誰も見ていない。そんなものは無視するに限る。

気持ちばかりが急いて考えがまとまらない。

スノップのふざけた言動の真意が読めない。いつもふざけている印象が強い男だったが、さっきのあれは悪ふざけでは済まされないほど真剣みを帯びていた。

ナズナとスノップは義兄妹。愛されなかった美少女。人魚姫。現の幻。バブルの塔。

……そして全ては泡になる。

そんなことは信じられないし、認められなかった。やがてたどり着いた九十五階はガランとしていた。

書架はまばらにしか置かれておらず、それもすかすかに抜けがある状態だった。けれども、そのおかげで探す手間が大幅に省けた。目的の本はすぐに見つかった。

ドクター、ジニアの日誌。

クーヤはぱらぱらと拾い読みしていく。

そこには90s nostalgiaの成り立ちとその目的が詳細に記されていた。

断片化のせいで足場を失った人々のための地盤を改めて作ること。体験を共有すること。

その橋渡しは美少女が行う。

90s nostalgiaの維持には莫大な美少女力を消費する。訪れた人間たちが残していく楽しかったという思い出を糧にして美少女力は生成、供給される。

過去の残滓。

馬鹿げた計画だった。見向きもされずに打ち捨てられるはずだ。いかにも馬鹿なアイツが考えそうなことだった。

読み進めていくと、ページの隙間から封筒が抜け落ちた。

薄いピンク色をした、それでいて派手すぎない上品な封筒だった。開いてみると、丁寧に折りたたまれた便箋が入っていた。桜の花びらが散っていた。

ナズナからだった。

「空也がこの手紙を読んでいるということは、私の言ったことを覚えていてくれたってことだね。ありがとう。あの時はこの本のことなんか全然知らなかったの。ホントだよ。たぶん神様がこうなることを見越して秘密の数字を覚えてくれたんだと思う。スノッブから聞いているかもしれないけど一応言うね。私は人間じゃなかったみたい。自分でも信じられないけど、それが真実だって。嘘みたいでしょ？ 笑っちゃうよね。でもどうやら本当みたいなんだ。ユグドラシルが私のお母さんで、自分の体の維持のためには私に余計なエネルギーを渡す余裕が無いみたいなの。スノッブの妹だと思っていたのも設定。空也の気を引こうとしていたのも設定。ユイさんと張り合ってたのも設定。全部、全部、嘘だったの。自分なんかどこにもいなかった。空也は気づいてた？ 私と一緒に学校通ってたんだよ。そのうち誰だったかは気づくだろうから今は秘密にしておくね。私、まだ若いのに。ああ、それも設定か。ホントは半年も生きていないのか。でもいいや。若いってことにしておくね。若いのに、遺言書くことになるなんて思わなかったな。何を伝えたかったのかもわからないや。空也のことは……空也のこともみんなのことも好きだと思っただけで、それも全部仕組まれたことだったのか。なんか嫌になっちゃう。空也にどんな顔して会えばいいのかわからないで、それで遺言を書くことにしたはずだったんだけど、愚痴っぽくなっちゃった。こんなことを言いたかったんじゃないはずなのに。なんでだろ。楽しかったのに。ずっと楽しかったのに。こんなはずじゃなかったって言うのは甘えかな。現実が見えていなかったってことなのかな。もっと早く気づいていればなんとかできたのかな。私には何が必要だったんだろ。全然わかんないや。理不尽が突然押し寄せてきたみたいと感じてるのは私だけ？ ごめん。もう書けな

い。書いても書いても書き足りないもの。話したいことはいくらでもあるもの。だから……」

進むにつれて文字は乱れ、最終的には滲んでしまつて読めなくなつていた。

クーヤは手紙を丁寧に折りたたむと大切にしまった。

これは遺書なんかじゃない。遺書なんかには絶対にさせない。

クーヤは薬の入った瓶を取り出し、逆さまにして、赤色のカプセルをがむしゃらに握り締めてまとめて飲み込んだ。

「うーっす。邪魔するわよ」

何重にもセキュリティをかけて引きこもっている男の元を訪れるのは、さすがの唯でも骨が折れた。最後の扉を蹴り開けたときには貯金が底をついていた。今年の誕生日プレゼントは貧相になるだろうが、空也なら許してくれるに違いない。

セキュリティを突破している間に唯の手元には「ドクター、ジニアの日誌」のコピーが送られてきていた。ますます許せなかった。

「てめえの世界だろ。自分で落とし前つけて、そのあとで勝手に引きこもつてろよ」

スノツブは床に座つたまま答えようとしない。

思えば最初から二人のことはなんとなく気に食わなかった。

クーヤにそれとなく注意を促してみたことはあつたが、もっとハッキリと言つておくべきだった。

言えなかったのは、たぶん心のどこかでわかつていたからだ。

あの女は自分より格上だ。

だから、唯のそれは半分以上八つ当たりだった。

全部奪つて綺麗な思い出の中に逃げ込むなんて許せるわけがなかった。

「私はあんたみたいなのを見てると虫唾が走るの。何でもわかつたふりして、諦めた振りして、未練たらたらのかせに……わかるのよ！　こんなに綺麗に大切に生きてきて、最後の最後で投げ出すの！？」

痛い。

ひたすら痛かった。

臆病な自分をひた隠しにして罵倒する資格なんてあるはずもない。それがわかっていても唯は言わずにはいられない。

もしも口出ししなければ、もしかするとクーヤが自分のことだけを見てくれるようになる未来が待っているのかもしれない。

傷ついたクーヤの隣に座って、何食わぬ顔で慰めてやればいいのだ。それがわかるだけに痛すぎた。

虚ろな目をして人形相手に一人でカードを並べていたスノツブがゆっくりと顔を上げた。

「そうは言ってもね。どうしようもないもんはどうしようもないんだよ。それにしても、空也の前とは全然違うね。そっちが本性？」

「それならそれでもいい。私は一言文句を言いに来ただけだから」
嘘だ。

偽善だ。

誰が聞いてもわかるような見え透いた嘘で誰かの心を動かせるはずがない。

だから……だから唯は腹を括った。

「私は……私は諦めないっ！　いつか振り向かせて見せる。私のことなんか誰も見ていなくなつて構うもんか！　そうやって何年も隣に立ち続けてきたんだ。空也が誰のことを見ていたって関係ない。

お前はそこで永遠に片思いしてる！」

啖呵を切った。

一発ぶん殴つてやろうかと思つたが、さすがに自重した。相手はほとんど素性の知れない男だ。情け無い男のように思えるが、もしものときは怖い。

「それと……アレクサンドリア図書館。アレを残してくれていたことだけは感謝してる。エスパーマミー、私も大好き。じゃあね。もう会うこともないでしょうけど」

言いたいことは出し尽くした。

これで動きださないようなら、唯が彼に対してできることは何も無い。

そして唯には唯のやるべきことが、やらなければいけないことが残っていた。

負け犬に構っている暇はなかった。

ナズナは絶対に連れ戻す。

そして土下座させてやる。

愛されなかった人魚姫は泡になる？

ふざけるな！

愛されない女には愛されない女なりの矜持があるのだ。

進入禁止区域を越えてユグドラシルの直下に立ったクーヤは、その威容を始めて間近から眺めていた。遠目からではわからなかった綻びがそこかしこに見て取れる。

まるで朽ち果てる寸前、傷だらけの老木のような。

塔の中心、その動力部を目指す。

そのためにはまずは入り口を探さなければならない。そう覚悟していたが、それは意外とあっさり見つかった。普通に扉がついていた。正面に立つと音もなく左右に開いた。

中はがらんどうになっいて、壁に沿って二本の階段が螺旋を描いて絡まりあうようにしながら上へ上へと伸びていた。壁面にはびっしりとモザイク模様。それが光の当たる角度によって万華鏡のようにきらきらと姿を変える。漠然とした不安に襲われる気味の悪さだった。

一段飛ばしで階段を駆け上ると、乱暴な扱いに抗議するかのように歯抜けの旋律が軋み音を奏でる。

クーヤが招かれざる客であることは明らかだった。視覚と聴覚を幻惑されて、足場を踏み外しそうだった。

かなり登ってきたはずだが、霧がかかったように視界は見通せない。そのせいでどこまで登ればいいのか、まるで見当がつかない。

少しでも気を抜くと体はすぐに男に戻りそうになる。

そして野太い針で影を縫いつけられたようにその場から動けなくなるのだった。

時間の流れが外とは違うのかもしれない。

最初のうちはそう思ったが、どうやら違うらしい。

使用制限を考えずに、赤い錠剤を何粒も嚥下した。

体の内側で決定的な変化が起きているのを感じる。

ヤバイと思うが薬を飲むと嘘のように体が軽くなるせいでクーヤ

は止まらない。

ユグドラシルが拒否しているのはおそらく「空也」だ。その成り立ちを考えれば、その仮定は恐ろしいほどの的を射ているように思えてくる。

男人禁制の乙女の聖域。

それがユグドラシルなのだろう。

土足で踏み込んでくる男には拒絶反応を示す。

だから空也はクーヤになるしかない。

男に戻るという考えは半ば放棄した。そしてまた錠剤を取り出して重たくなる体に活を入れる。そんなことを何度も繰り返しているうちに視界が晴れてきた。

代償として自分が男であるという感覚、根本的なアイデンティティが崩壊していくように感じる。

終わりが見えてきた。

階段を上りきった先には祭壇が供えられていた。

古今東西和洋折衷。

宗教的要素のキメラ細工だ。

それらは調和しているとはお世辞にも言えない。

それにも関わらずクーヤは目が離せなかった。息苦しい。心臓を驚づかみにされたような圧迫感がある。

抽出された意匠は本来の意味を捻じ曲げられて翻訳され、融合して、呪術的性質を増強し合っているようにさえ思えてくる。

曼荼羅に描かれた伝説上の生き物たちが暗い眼をしてクーヤを見つめていた。

整然と並べられた銀の食器には何も載せられていない。

幾何学的に配置された燭台のろうそく。その灯火はいまにも消え去りそうだ。

そして中でもひととき異彩を放っているのが、中心にあつらえられ

た直径三十センチほどもあるうかという紅い水晶玉だ。

平均律で塗り潰された血の祭壇。

クーヤは直感的に理解した。

ここが世界の中心だ。

血水晶に手を触れると、ぬるりと生温かい脈動が伝わってきた。

神経回路が連結されていく。ユグドラシルはクーヤを取り込もうとしていた。それをどこか他人事のように彼女は見つめていた。

ユグドラシルは乾いていた。欲していた。求め続けていた。どれだけ求めても決して満たされない苦しさに張り裂けそうになっていた。貪欲に飢えて喘いでいた。

禁断の果実にくちづけするような甘い誘惑。

それに身を任せるのは危険だ。クーヤは寸前で思いとどまる。

ユグドラシルにエネルギーを供給しても、同化する必要は無い。

そう思った途端、ユグドラシルからの要求が激しさを増した。クーヤを細胞のひとつひとつまで分解、再構成して己の糧にしようとする。

意識が一瞬トビそうになった。

挟り取られた断片は宙を舞い、五月雨さみだれのように降り注ぐ。

全身を歓喜の雨に打たれながら、クーヤは濡れていた。体の心が燃えるように熱かった。快樂中枢を刺激されて小波のように広がる心地良さに震える。

ユグドラシルが蠢き始めた。

だが足りない。全然足りない。クーヤ一人の力ではユグドラシルを復活させるには到底至らない。膝がガクガクと震え、血水晶の前にひれ伏しそうになる。

カプセルを口にねじ込むが効果は無い。

オーバードース。

過剰摂取の結果、空也の体はクーヤに適應した。だからそれはクー

ヤにとって意味の無い行為に成り下がった。

瓶を虚空に投げ捨てた。

ユグドラシルの振動は微弱なままだ。

クーヤは自分の美少女力の低さがいまほど恨めしいと思ったことはなかった。もっと力があれば。付け焼刃でもなんでもいい。現状を打破するための力が欲しかった。

くじけそうな自分を鼓舞するようにクーヤは叫んだ。

そうでもないとのまれてしまいそうだった。スノッブが直面した現実には押しつぶされそうになる。

すがりつくようにして血水晶を抱きしめた。

強烈な衝動に突き動かされて、クーヤは喘ぎ声を漏らした。御しよ
うとすればするほどユグドラシルは強固に反発する。

「くっそお。どうしろってんだよ。これ以上なんも無いぞ！」

泣き言を言ったところで始まらない。

そんなことはわかっている。けれどもクーヤにはもはや打つ手が残されていなかった。

存在の全てをユグドラシルに委ね、混沌と無のクロスラインでナズ
ナと再会する。

それは絶望だ。暗黒に心が塗りつぶされていく。

「なんも無いってことは無いでしょ」

驚いて振り向くと、唯が微笑んでいた。両脇の下から体を支えられ
た。

「あんまり可愛い声出して喘いでるから、もう少し見てようかと思
ったけど、そんなに余裕無さそうだったから」

「ゆ、ゆいー」

「情け無い声出さない。なんかクーヤえろいよ」

クーヤは安心のあまり腰から崩れ落ちそうだった。

実は足の付け根のあたりが妙にむずむずしてきて、おかしい気分にな
りかけていた。唯が来るのがあと少し遅かったらと思うと、赤面
してしまう。

「服も濡れて体に張り付いてるし。まさか自分の体に欲情してた？」

「そ、そんなことあるわけないだろ！」

「そつだよね」

唯はそう言つと、血水晶に置かれたクーヤの手の上に自分の手のひらを重ねた。体にかかつていた重圧がふつと軽くなった。反対に唯は苦しそくに顔を歪めた。

「これは……キツイね。クーヤ、よく一人で耐えられたね」

「キツイ、よね。二人で乗り切ろう」

クーヤが感じているように唯も感じているのが手に取るようにわかった。五感が鋭敏に研ぎ澄まされていく。ときおり吐き出される唯の吐息が変に色っぽくて笑ってしまう。きっと自分も同じように怪しい姿態を晒しているのだと思うとますますおかしくなってくる。

「たぶん、俺もう戻れないよ。完全に体、変わっちゃった。何故だかわかるんだ」

「いいじゃん。私は気にならないよ。なんなら薬もらおうか？ 私
も変わっちゃおうか」

茶のみ話をするような気軽さで唯は笑う。

「薬は捨てたんだ。実は」

「そう」

ユグドラシルは回り始めていた。変速ギアを切りかえるように段階的に速度が上がっていく。クーヤは唯と両手を繋いで世界の中心でダンスを踊っているような気分だった。

景色が意味を失って線形に傾いていく。

それは緩やかな崩壊だった。唯もたぶんわかつている。

二人でも足りない。

体は軽くなった。ユグドラシルはぐにやぐにやと回転している。

しかし、依然として供給量は足りない。穴の開いたバケツに水を注いでいるような感覚。それを二人で共有している。唯が泣いていた。「クーヤ、泣いてるよ？」

泣いているのは自分だった。何が悲しくて、悔しくて泣いているの

かもわからない。

遅すぎた。手遅れだった。後悔の言葉ばかりが胸に飛び込んでくる。それは借り物の言葉たち。自分の外部感情。すなわち、ユグドラシルの。

「最期を看取りたい」

そうして引き寄せられたのが自分だった。

それがスタート地点。

そこから一歩たりとも進めていなかったということなのだろうか。

閉じた世界のウロボロス。

「クーヤ、最期まで付き合うよ。まだ何かできるはずだよ、私たちには」

血水晶を囲んで二人で崩壊のワルツを踊る。さながら神に見初められた純潔の巫女のように祈りを捧げる。

クーヤも唯も一心不乱に踊り続ける。

手段と目的の逆転。

感情の波に押し流されて全てが霞んでいく。何のために踊っているのか。踊るために踊らされているのか。

「あなたたちは馬鹿ですわー！ーっ！」

クーヤの片手を取るものがいた。唯の片手を握るものがいた。

そしてユグドラシルの回転が止まった。

「ミズ……ハナ、さん？」

「そうですね。呼ばれて来てみれば、主役のいないところで脇役二人が嬉しそうに何かしているではありませんか」

クーヤは唯と顔を見合わせた。唯はぶんぶんと首を振った。

「事情が飲み込めていないようですね。これを見なさい」

ミズハナの手元から特大スクリーンが浮かび上がった。そこには仲良く手を取り合う三人の姿が映し出されていた。リアルタイムで更新されている。

「無差別テロのようにばら撒かれていますわ。全く何を考えているのですか。こんなにも大掛かりに広告を打てば嫌でも目に入ります」

ミズハナに説明されても、クーヤは何がなんだかわからなかった。唯も目を丸くしている。

どうしてミズハナがこの場にいるのだろうか？

広告？

無差別テロ？

疑問が湯水のように湧き出てくる。

そんなクーヤの元にメッセージが届いた。スノップからだ。

「最期だからな。盛大に花火を打ち上げることにした。全財産をお前たちに賭ける。俺は明日から無一文だ。ハイリスクハイリターンは卒業したつもりだったんだが……まあいいさ。人が集まってきたらうちに何とかしろよ。……グッドラック」

「そついうことですね！」

何故かミズハナは偉そうにふんぞり返っていた。

「お、お嬢さま。一人で勝手に行かないでくださいませ。ダ……メイドにそこまでの、スペックは……ありませんわ」

ミズハナを追って、へろへろになったダメイドまでもが祭壇に姿を現した。

「あなたに合わせていたら日が暮れてしまつてしょう。それで、どうすればよろしいのですか？ まさか私を呼んでおいて、出番がないなどというのは許されませんことよ」

「ミズハナさん。どうして？」

「まどろっこしい方ですね。生徒会名誉会長の私に理由が必要ですか？」

当たり前顔をして、さんぜん燦然と輝く金髪をかき上げる。

「本当はコンテストで負けて悔しかったのですわ」

「ダメイド！ どうしてあなたは余計なことを言うのですか。だからあなたはいつまで経ってもダメイドなのです！」

一瞬ミズハナ本人が言ったのかと聞き紛うほどに見事な声真似を披露したダメイドの首を、窒息せよと言わんばかりにミズハナは締め付けている。

そんな二人の手を取って血水晶の前に導いた。

「ありがとう」

「色々借りがありますからね。それだけのことです」

全員で血水晶を取り囲むと、その上に手のひらを重ね合わせた。

ユグドラシルは脈動する。

心音がシンクロして生命の息吹を、産声を上げさせる。

鼓動がひとつ波打ったびに、新たな力が体の内側からあふれ出して、世界の色彩を変えていく。

ユグドラシルは再生する。

長い冬の時代を終えて、古い衣を脱ぎ捨てるように外郭を換装していく。

ユグドラシルは回らない。

大地にしっかりと根を伸ばし、太い幹を支えている。

それを遠くから眺めながら、スノップはひとり祝杯を上げた。

ささやかな前祝いだ。

グラスのシャンパンがしゅわしゅわと気持ちの良い音を弾けさせる。

「どうやら賭けには勝てそうだな」

スノップは白衣とスーツを脱ぎ捨てた。

ユグドラシルの行く末はクーヤたちに任せた。見届ける必要は無い。彼らは帰ってくるだろう。大切な彼女を引き連れて。

「高校生は食うからな。久々に腕を揮いますか」

スノップはひとりごちると、ユグドラシルに背を向けた。

祭壇の周りをあらゆる種類の文字が入り乱れ、二重螺旋を描きながら下から上へと流れていく。無秩序に並ぶように見える文字の奔流。その中にときおり意味を持つ単語が見え隠れするように感じるのは、クーヤの意識が恣意的に並べ直した幻だろうか。

クーヤたちは紅い光に包まれた。血水晶が発する閃光。目も眩むほどの鮮やかさは小さな太陽を思わせる。それが徐々に落ち着いた色調に変化していくと、血水晶から幾筋もの光の道が伸び始めた。それらは毛細血管のように広がりながら、ユグドラシルの表面を覆い

つくしていく。

ドクドクと脈打つ血水晶は文字通り、ユグドラシルの心臓部だ。クーヤの心臓も呼応するように脈打っている。

「不思議なところですね」

ミズハナが誰とはなしに呟くと

「ええ。本当に。ここはいつたい何なんですか？ 実は詳しいことは知らずに来たのです」

ダメイドは小さく笑い声を漏らした。

「クーヤ、説明してあげて」

「説明って言われても……」

唯ならクーヤ以上に上手くばかして説明できるだろうに、わざわざお鉢を回してきたのは、クーヤの反応を見て楽しむためだ。絶対にうに決まっている。クーヤがにらむと、目を合わせようとしない。

クーヤは仕方なく説明役を引き受けることにした。

「それならミズハナさんは何しにきたんですか？」

「『美少女急募！ 世界を救うのは君だ！』 これを見て私以上の適任者がいるとは思えませんでしたわ。それなのに、映されていたのは苦戦しているあなたたちの姿。見捨てておけますか。私にはできません」

ミズハナはアホだとクーヤは思った。

しかし、そんな彼女のおかげでユグドラシルは息を吹き返したのだ。感謝こそすれ笑う気にはなれなかった。

美少女力三千オーバーの天然美少女は、成り行きと片手間で世界を救う。

やはりミズハナは格が違った。

「外はいつたいていどうなっているのでしょうか」

ダメイドが言うと、それに応えるようにユグドラシルの壁面が外の様子を映し出した。

三百六十度の大パノラマ。

地上には見渡す限りの人の群れ。

「こういう時にはあの台詞を言うのが礼儀なのかな」

唯がとぼけたことを言っているが、ミズハナたちには全く意味が通じていないようだ。言いたいことはわかるが、クーヤはあえて無視することにした。

ユグドラシルの外観はいまや悠久の時を過ごした大樹のように変化していた。

瑞々しく生い茂る枝の先には、色とりどりの果実がぶら下がり、収穫の時を待ちわびていた。

突然クーヤの目の前に十一桁の数字が浮かび上がった。忘れてくても忘れられない数字だ。続けてあるポイントが指し示された。覚えのある場所だった。

ユグドラシルに笑われているような気がしてくる。みんなの手前、自分だけ抜け出すのは気が引けるクーヤだった。けれども、そんなクーヤの気持ちを見透かすように、ユグドラシルはカウントダウンまで示し始めた。

「クーヤ、行ってくれば？ 全部そのためだったんでしょ」

「それは……」

「なんだかよくわかりませんが、行ってくるといいですね。あなたがいなくても、私がいれば全然問題なくてよ」

「実際、お嬢さまのおっしゃるとおりなので、私としても反論できません」

それぞれに向かって言いたいことはあったが、それらはぐっと飲み込んで、クーヤは大人しく甘えることにした。

「じゃあ任せた」

返事は待たずにクーヤは祭壇をあとにした。

ユグドラシルから抜け出したクーヤを人々の歓声と野次が出迎えた。空に浮かんだ特大スクリーンにはクーヤの姿が大写しになっている。ご丁寧にこれまでの経緯をダイジェストで参照できるようにリンクまで張られていた。

自分の一挙手一投足が注目を集めている。そんな中で彼女を迎えに
いかなければならないとは酷い羞恥プレイだ。

けれども、心強い仲間たちが送り出してくれたのだ。止まるわけに
はいかなかった。

出口からは進路を示すように紅い絨毯が敷かれていた。

ひたすら恥ずかしい。

ショートカットして一気に目的地に到着することもできたが、実質
そんな手段を選ぶことはできなかった。集まってくれた人たちの期
待を裏切ることになる。誰一人欠けてもこの結末には至らなかった。
クーヤはひたすら感謝の気持ちでいっぱいだった。

クーヤは駆け出した。

声援が飛んでくる。野次が飛んでくる。お祝いのメッセージが次か
ら次へと送られてくる。最初は律儀に答えていたクーヤだったが、
とても返事が追いつかない。

「ごめん！ みんなありがとう！」

立ち止まり空に向かって叫ぶと、ひと際大きく歓声が上がった。

そして再び走り出す。

進路上に立ち塞がる障害は何も無い。

こんな時に妨害するのは余程の身の程知らずかバカだけだ。

そして、身の程知らずが絨毯の先で待ち構えていた。

モブオだった。

「クーヤさん、好きだー！ーっ！」

「お前、そんなキヤラじゃないだろ！」

抱擁しようと両腕を広げて待っていたモブオを慣性に任せたリア
ットでどつき倒した。仰向けに倒されながら、モブオは親指を立て
て嬉しそうに笑っていた。

どつとわく観衆を置き去りにしてクーヤは走る。

しかし、いくらか行かないうちに再び障害が立ちふさがった。

特大級のバカのお出ました。

純白のタキシードで身を固めた男が両手の指に挟んだカードを投げ

飛ばしてきた。

回転しながら飛来するそれをクーヤは指の先で受け止めた。

ジョーカーとハートのクイーンの二枚だった。

クーヤの服装が見る間に変化していく。

フリルとレースで飾り立てられた純白のドレスだった。しかも白いベールのおまけつき。

スノップにエスコートされるなんてまっぴらごめんだ！

「ここを通りたければ俺を倒してからにすることだな。しかし、俺もかつては……って聞けよ！ ラスボスの横を素通りするやつがあるか！」

「お前はどちらかというと三下だろ。あとでまた遊んでやるからそれまで我慢しろよ。そのときはナズナも一緒だ」

クーヤが振り向きながら声をかけると、スノップはやれやれと肩をすくめて見せた。

これでもう本当に進路上には誰もいなくなった。

永遠に続くかと思われた絨毯も終わりが見えてきた。

ここが終着点。そして始まりの場所だ。

クーヤは立ち止まるとユグドラシルを振り返った。

ここで全てが始まりを告げた。

もしも運命の出会いがあるというなら、あれがそうだったのだろう。コスプレ好きの変な女とマッドサイエンティストを気取ったダメなおっさんが、たった二人で守り続けてきた大切な場所に自分は立っている。いや、立たせてもらっている。

けれども、彼女だけがここにはいない。

彼女が夢見た未来にクーヤは立っている。

たとえ彼女が現の幻だったとしても、クーヤの気持ちまでもが幻だったわけではない。そしてそれは彼女も同じはずだ。そう信じている。

夜の帳が下りるように、周囲の明かりが落ちていく。

ユグドラシルが淡い光を放ち始めた。

それは雪の結晶のように舞い遊びながら、辺りにゆらゆらと降り注ぐ。

一瞬の静寂。

誰もが固唾を呑んで見守る中を、その静けさを引き裂くように轟音が鳴り響き、光が世界を満たした。

それは祝砲だった。

魂の奥深くを震撼させ、畏敬の念さえ抱かせる産声だ。

外縁に向かつて、何度も何度も途切れることなく打ち上げられるその一つ一つが、宝石のように煌めいていた。

そしてひと際大きな祝砲が打ち鳴らされた。

眩いばかりに光り輝く球体がユグドラシルから飛び出した。

それは放物線を描きながら、寸分のずれもなくクーヤの元へ向かってくる。光は徐々に薄れ、実体が明らかになってきた。

懐かしい姿勢で飛んでくる。あの時と全く同じだ。このままクーヤが何もしなければ脳天に直撃コースだ。何故かクーヤと同じく純白のドレスに身を包んでいるが、空気抵抗を受けて花のように広がったスカートのせいで、クーヤの位置からは大事なところが丸見えだった。そんなところまで忠実に再現してくれなくてもいいのに、とクーヤは笑ってしまう。

少しだけ身を引いて彼女の到着に備えた。

クーヤの頭より少し高い場所で彼女は減速して、ゆっくりと天使のように舞い降りてきた。

クーヤは抱きかかえるようにしながら彼女を地面に降ろした。

「……ただいま」

「おかえりなさい」

「パンツ見た？」

「勝負下着だったね」

「一世一代の大勝負だった。そのつもりだったのに……こんなに簡

単に帰ってきちゃうなんて恥ずかしい」

「手紙読んだよ」

「あーあーあー。やめて。黒歴史だから。なんであんなこと書いちやっただろ。忘れて。全部忘れて一からやり直しましょう」

「それは……無理かな。女の子になっちゃったし」

「ウェディングドレス似合ってるね」

「スノッブの趣味だよ、これ」

「……最悪」

顔を見合わせて笑いあう。

そうしてひとしきり笑い終わると、腰を引き寄せられて抱きつかれた。背の高さはほとんど同じ。だから彼女の顔が目の前にあって、二人は微笑みながら見つめあう。けれどもクーヤはあまり緊張していなかった。

「ねえ、名前呼んでくれる？」

「ナズナ、それともアリサ？」

「もう！ ナズナに決まってるでしょ」

「ナズナ、おかえり。ほんとに良かった」

「良かったのかなあ」

「良かったんだから離れろっ！」

ナズナとの間に小柄な少女が割り込んできた。クーヤをナズナから引き剥がすと、守るようにナズナの前に立ち塞がった。

「仕方ないから協力してやったけどクーヤは私のだから！ それは変わらないから」

威嚇するように敵意丸出しの視線を送っている。

「結局、私たちは何のために呼ばれたのでしょうか？ 説明していただいてもいいと思うんですけど」

「下々の者の考えることはわかりかねます」

いつの間にかミズハナとダメイドの二人もそばに来ていた。

「それは俺の口から説明しよう！ 食事の準備はできている！ みんな来てくれるよなっ！」

振られたはずの新郎が仕切りなおそうとしゃしゃり出てきた。

「俺も行つていいですか？」

「男は帰れ、と言いたところだが、今日は無礼講だ。特別に許可しよう」

スノップは一呼吸置くと、声高らかに宣言した。

「さあ、パーティーの始まりだ！」

エピソード

戦場に並べられたカードを見比べる。

クーヤの場には貧弱なゴブリンが三体。

スノップの場には絢爛豪華な熾天使^{してんし}たちが並んでいる。

屠殺場に送られる寸前の豚も真っ青な顔をしてゴブリンたちは震えている。

圧倒的に不利な状況でクーヤの手札は一枚。スノップは余裕の笑みを浮かべて紅茶をすすっていた。

クーヤの手札では何ターンも前から熾天使に匹敵するほど強力なカードが出番を待ちわびている。しかしいくら強力なカードでも熾天使たちのリンチにあつてはひとたまりも無い。だが召還しなければ、クーヤの敗北は必至だ。

「悩んでも無駄無駄。早くドローして投了しろよ」

「うるさい！」

スノップは勝利を確信しているのか、ニヤニヤ笑いをやめない。そして何度確認しても場は詰んでいる。起死回生のドローに賭けるしかないのはクーヤもわかっていて。

デッキの中には場の状況をひっくり返せるカードが三枚眠っている。それを引けるかどうか、それにかかっている。

山札の上に手をかざして念じる。

勢い良くトップから一枚引くとそのままテーブルの上に叩きつけた。

「^{スノップの怒り}亜神の怒り、だど！？」

スノップの顔色が変わった。

スペルカード、亜神の怒り。

各プレイヤーは全てのクリーチャーを埋葬する。

死は何者にも平等に訪れる。——グレイブエルダーの伝承

哀れなゴブリンたちとともに勇壮を誇った天使たちも羽をもがれ骸むくろを晒した。

「まだ俺のターンは終了してないぜ！ このターン、俺は三体のクリーチャーを埋葬した。これにより『堕ちたる天使ルシファー』のコストは三軽くなる！」

供給できるリソースを全て使い切り、クーヤはルシファーを特殊召還した。

「ターンエンド！」

スノップの手札は一枚も残っていない。
何も引かれなければクーヤの勝ちだ。

スノップは山札から一枚ドロし、それをゆっくりと確認すると、カードを片付け始めた。投了のサインだった。

「よし！」

クーヤは五を示しているサイコロの数字を六にした。スノップのそれは四を示している。

十本勝負はクーヤの勝ちだった。

「つまんねー。つまんねー」

スノップはカードを整理して懷にしまった。

初めてゲームらしいゲームをしてスノップに勝てたクーヤは嬉しさもひとしおだ。しかし、腑に落ちない点が残っている。

「勝ちたいならいつものアレ使えばいいじゃん。大体ワンキルできるアレ。別にスノップが卑怯の限りを尽くしたところでいまさら何も言わねーよ」

「あー……アレね」

スノップは決まりが悪そうに視線をはずすと、デッキを取り出し、それをクーヤに渡した。それは紛れもなく極悪ソリティアデッキだった。ところが、微妙にカードが異なっている。高額なキーカードが軒並みチップなレプリカに差し替えられていた。

「スノップ、これ……」

「みなまで言うな。しかたねーだろ。金が足りなかったんだよ。時

間も無かったしな。底値で飛ぶように売れたのは、まあ壮観だった」
「スノップ……」

「だからもういいって。普通気づくだろ。俺は勝つのが大好きなんだよ。だからもうひと勝負しようぜ。今度は別のデッキだ」
スノップは新しくカードの束を取り出すと、早くもシャッフルを始めていた。

だからクーヤもそれ以上、その話題には触れないことにした。そして再びシャッフルを開始した。

「負けたことだし俺の先攻でいいか？」

「ああ、いいぜ。かかってきな」

クーヤがうなずくと、スノップは不適に笑った。

補足しておく、そのあとクーヤは完膚なきまでに叩きのめされた。

「セット、セット、セット、セット。ドロー、ドロー、ドロー、ドロー。セットセット。ドロードロードロー。セットセットセット……」

山彦のようにこだまするセットとドローを聞き続ける以外にすることが無かった。

「俺の瞬殺コンボデッキがたった一つなわけがないだろ？」

悪戯が成功したスノップは心の底から嬉しそうだった。

クーヤは再確認した。スノップのウザさを。

そして心に誓った。

いつか絶対に痛い目に合わせてやると。

あれから一ヶ月が経った。

90s nostalgiaはかつての輝きを取り戻した。

と、言いたいところだが現実はそのままで甘くは無い。

スノップの資金は花火のように華々しく燃え尽きてしまった。一瞬のきらめきだった。

元々、古い書籍と美少女しか売りが無いのだから飽きられるのも早

かった。

一部の好き者がたまに訪れるようになっただけマシなのかもしれない。

アリサは人知れず学校を辞めた。

それに伴ってファンクラブも自然消滅した。

ミズハナは腐ることなく生徒会名誉会長の職務を全うしている。おかげでクーヤたちの学校生活は相変わらず賑やかだ。

彼女は結局アリサの正体や90s nostalgiaについては聞かなかった。

けれども、たまにアレクサンドリア図書館でひとりため息をついているところを見かけるようになった。そんな彼女のもとへスノップはお気に入りの小説を持って通っている。邪険にされているが、手馴れたものだ。クーヤは何度もやられたからよくわかる。彼は自分の主張を押しつけることにかけては天才的な才能を発揮する。そして渡されるものは、そのときその人に必要なものだ。

ミズハナほどの美少女がいなくなると90s nostalgiaの維持に支障をきたす。

スノップはそんなことを言っているように誤魔化している。

ナズナ主催のコスプレティーパーティーの参加者が増えた。

ダメイドだ。

彼女が淹れる紅茶の味は絶品で、ナズナが用意したメイド服を特に嫌がることもなく普通に着こなしている。

ミズハナが図書館にいる間の時間潰しだと本人は言っているが、どこまで本気なのかクーヤには掴めない。彼女はいまだに謎の多い人物だった。

騒動が治まると同時にモブオはクーヤたちから離れていった。

ことあるごとに「楽しければいい」と言っていたのは、嘘でもなんでもなく彼の信念そのものだったようだ。「何かあったら呼んでくれ」と言われているが、それは「何もないければ呼ぶな」ということだ。クーヤはそれが少しだけ寂しい。

その日、教室は朝からなんとなく騒がしかった。

唯なら何か知っているかもしれない。理由を尋ねてみるとろんそうに目を細めた。

「私が何でも知っていると思ったら大間違いだよ。……まあ知ってるんだけど。直々に口止めされてるから教えてあげない。されてなくても教えるつもりなんてないけど」

机に肘を突いて見るからに気だるそうだ。少し遅めの五月病か何かだろう。あまり真面目に相手をしてもらえそうにない。クーヤは諦めて席に戻った。

席に着くなり、唯からメッセージが届いた。

「ばーか。ばーか。クーヤのバカっ！」

唯はクーヤのほうを見ようとしなない。

気づかないうちに何か気に障るようなことをしてしまったのだろうか。自分の発言を思い出してみても思い当たる節はない。わけがわからなかった。

「何か楽しそうなことない？」

モブオにメッセージを送る。すぐに返事が来た。

「あるよ。でも秘密。そのほうが楽しいから」

簡潔、それでいてモブオらしい返事だった。こちらも期待できそうにない。八方ふさがりだ。

予鈴が鳴って担任の教師が教室に入ってきた。

朝のホームルームが始まる。まずは出席の確認。そして細々とした連絡事項が述べられる。

変わらない日常。

そのはずだった。

けれども、その日は特別なイベントが待ち構えていた。

「今日はみなさんに新しいお友達を紹介します。入学手続きに不備があったせいで少し遅れることになってしまいました。が、意地悪をしたりしないように」

教師はそう前置きすると「入ってきて自己紹介してください」と教室の外で待機している生徒に声をかけた。

真新しい制服に身をつつんだ少女は少し恥ずかしそうにしながら教壇に立って自己紹介を始めた。

「その……入学手続きに不備があったというのはちよつと違って……生まれつき病弱で、そのせいです。入学が遅れたのは」

挙動不審な態度で信憑性を持たせようとしているが明らかに嘘だった。さすがにクーヤでも騙されない。

けれども、そんなことはどうでも良かった。

「ナズナ、です。よろしく願います」

一礼して笑顔を見せた。

犯罪的に可愛い季節はずれの転校生だった。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2805w/>

90s nostalgia

2011年12月22日06時04分発行